
月夜の雫

柚燕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜の雫

【Nコード】

N2791F

【作者名】

榊燕

【あらすじ】

一人の青年夜月雫、彼は眼が覚めると山の山頂にいた。周りを見渡してもあるのは眼下に広がる奇麗な緑の風景と、木々の一つもない朽ちた山の風景。ひと振りのナイフと知り合うところから物語ははじまった。一人の青年と、ひと振りのナイフが繰り広げるコミカルファンタジー。

第一章異世界〜其の一

「月夜の雪」第一章異世界〜其の一」

「H A H A H A 眼が覚めると其処は山の上♪ってなんじゃこりゃ
あああああ!？」

叫び声をあげるのは二十を幾分か過ぎた普通の男、肩上位までの奇麗に整った漆黒の髪に切れ長の瞳が特徴的だがそれ以外は特に目立つところのない顔、黒いジャケットに少し汚れたジーンズをはいている本当にどこにでもいそうな青年だ。

その男がいる場所は木々一つない朽ち果てた山の山頂、あるのはやたらごつい岩や、所々に転がる鳥にしてはでかすぎる羽根の生えた生き物の亡骸。

その亡骸は一つの大きさをとつても全長二メートル、そんなものが数十転がっているのだ。

「……ちょ!怖っ!怖すぎるだろう!何でこんな鳥っぽい奴の死骸ごろごろしてんのよ!??ってかなにこれ!？」

上を向きながら叫び続けていた男が、疲れ果てたせいか下を向いたときにその生物の亡骸が目に入った、一瞬息を飲んだ後混乱の極みの如く限界を超えた喉で再び叫び出していた。

「ぜーはーぜーはー……お、落ち着け俺!いいか落ち着くんだ……さっき思いつきり頭を殴って夢じゃない事は確認したな?ああしたともこれは夢じゃない!ならばこれは何だ!俺は確かに寝る前までは自分の部屋の自分のベッドの上でTVをつけっぱにしながらお菓

子の淬に塗れて眠りこけていただろう？ああ間違いないぞ、確かにあれは俺のベッドだった！ならばなぜこんな朽ち果てた山のそれも山頂にいる上、周りはこんな死骸の山なんだ？知るか！？いやちよ知るかってどうすんのよ！いやすまね、本気で知らねえ、そうですよね。」

一人二役を器用にこなしながら現状を理解していく男……ぶつちやけはたから見たら頭のおかしな人にしか見えず、黄色い救急車を呼ばれそうだが、本人にとっては物凄く追い詰められた状態での仕方のない行為だったのだろう。

一しきり喚き散らし日が沈みかけたころとうとう力尽き丁度いい岩に座りこんだ。

まるで椅子のような形の岩に腰掛け、改めてあたりをじっくりと観察し始めると、混乱の極みにいた男の顔が段々嬉々としたものになっていく。

周りの景色は謎の生物の亡骸を除けばとても奇麗なものだ、山頂ということもあり、眼下に広がる風景は青と緑、所々に茶色い建て物らしき物だけで、そこを真つ赤に近い夕陽が照らし出している、この山周辺以外はとても素晴らしい景色だった。

そこに思い至ったとき男は一つの可能性に気付いた。

それはとてつもなく突拍子もなく、現実味なんてものはみじんもない考え。

むしろ夢であると思い込んだ方がまだ可能性は高いのではないかと思うほど、おかしい考えだが、男はそれでも、もしという思いとともにその表情に笑みを張りつかせていく。

「もしかして……もしかするとあれか！あれなのか！？だったら俺は信じたことのない、信じる事がこれからもないであろう神にでも感謝するぞ！」

先ほどまでの混乱による叫びとは違う、興奮したような叫び声をあげる。

「此処は……此処は！もしや異世界！？」

全く突拍子のない発言だ。

だが今まで生きてきた世界にはこんな綺麗な景色の場所があるなんて知らないうえ、寝て起きたらこんな状態になっている異常性から段々その考えが間違い無いような気がしているらしく、興奮がだんだん収まっていくと、今度は確信したようにあたりを見回し頷いた。

「間違いないだろう！これで異世界じゃないとか言いやがったらたとえ神を名乗る野郎が来やがっても許しはしねえ！」

男は確信を持って頷いた後、自分の身を確認しはじめた。

「特に変わったところは……ないか？持ち物も……ライターに財布だけだな……ってなんで財布なんてあるんだ……まあいいか、その辺は多少都合してくれたんだろうな俺をこの世界に呼んだ何かが……でもまあここが異世界でこの周りの風景を見ると絶対武器とかあった方がいいよな……まあこんな馬鹿でかい生き物を倒す奴がいるんなら武器を持ってもまず勝てないだろうけどな！でもまあ何かねえかなあ。」

きよろきよろとあたりを見回す男、幸いな事に周りで山となっている亡骸からは血も出ておらず腐ってもいないせいで、どことなく不気味な雰囲気はあるもののグロテスクな光景じゃない、だからこそ気づいたのであろう。

「おう！あれもしかしてナイフじゃねえ！」

男はその亡骸を見回していると夕日に反射した何かを発見した、それは柄に丸い宝石が埋め込まれた銀のナイフ。

そのナイフに埋め込まれた宝石は不思議な事に七色に光り、その刀身の銀の刃ははこぼれ一つ、シミや汚れ一つないとても奇麗なものだった……実戦向きとは思えないその美しさに男も思わず手にとってじっくりと見つめていたのだが、突然吹いた風によりそのナイフをまっさかさまに地面に落とした。

「サク……」

「ちょまって！なにその擬音！サクってなによ！地面に何の抵抗もなく突き刺さりやがったぞ！？」

恐る恐るそのナイフを改めて抜いてみるとやはり抵抗らしい抵抗が全くなかった。

そしてその刀身にも傷も汚れも見当たらない、実戦向きには見えなかったが、明らかに実戦向きのナイフより強力な威力を誇っているのがよく解る。

男もそのナイフが少し怖くなったのだろうが、他に武器になりそうなものもなかったらしく仕方なくそのナイフを持って道とは間違っても呼べないような山を一人降りて行く。

「ナイフよナイフよナイフさん、お願いだから俺だけは切らないようにしてください！」

ナイフに向かいあいながら真剣にそんな事をのたまう男、明らかに精神に異常をきたしてる！そう言われても仕方ないような行動だ……が！

「もちろんです御主人様。私は御主人様だけは決して傷つけず、どんなものからも守って見せます。」

男は「ピシイ」という擬音が聞こえそうなほどにナイフを見つめたまま固まった……気のせいかなあとか冷汗を流しながらナイフから眼をそらし、もう一度呼びかけてみた。

「あ、あのーもしかしてナイフさんお話することできるのですか？」

怯え腰なのは仕方のない事だろうだってあの切れ味で突然話し出したのだ、明らかに呪われている武器……そんな考えが頭をよぎったとして誰が責められるというのだろうか。

男は怯えながらナイフに問いかけ返事を待った。すぐ来た。

「はい、私は虹と申します、ご主人様の盾として牙としてその身に尽くさせていただきます。至らぬ我が身ですが末長くよろしく願います。」

「ああああ！やっぱりナイフが喋ってる！……って此処は異世界これくらいの事は不思議でもなんでもないのかな？いやきつとそうだ、そうにきまつてる！だからこの虹と名乗ったナイフも当たり前前の出来事なんだな！」

男がナイフから視線をそらしながらそんな事をのたまう。

ただ悲しいかな、現実というものは時として残酷に事実を知らせてくる。

そのナイフはしゃべるのだと。

「ご主人様、出来ればご主人様のお名前をお伺いしてもよろしいで

しょうか？」

虹の遠慮がちなその質問に律儀にこたえる。

「あ、ああ、俺は夜月 雫だ……よく解らないがよろしく頼む」

く第一章異世界く其の一（後書き）

後書き

これが物語の始まりだった、突然の始まり。

行く先に何が待ち構えているのか、何をしていくのかはこれからです。

何か気になる点や、可笑しいなという点、誤字脱字などありましたら是非ご指摘ください、よろしくお願いします。

最後まで読んでくださった方々ありがとうございました、もしよろしければこれから是非お願いします。

それでは失礼します、また次のお話で。

第一章異世界〜其の二

「月夜の雫」第一章異世界〜其の二」

「とりあえず……どこか情報の集まる所にいかねえとな……なあ虹、もしかして此処ってモンスターやら化け物やらそんな類の者って存在する？」

「ええ、おそらくそれに類する者が存在いたします、闇より出でし者と呼ばれ、人間に害を成す者達です、一般的に闇者と呼ばれています……一般人が出会えばその闇者のレベルにもよりますが、間違いなく死ぬことになるくらい、人間にとっては脅威です。」

（やっぱりかあ〜！本気でどうтусかなあ……多少戦えるって言うても本格的な戦闘なんてやったことねえつつの……つまりだ！戦えばば間違いない俺は死ぬ……なんだ……結論出てるんじゃないか……戦えば死ぬんだ！ならば逃げる！俺の全精力を持って死ぬ気で逃げる！それしかねえ！）

頭を抱えた雫が、そう結論付けると一先ず山を降りる事を決めたらしい、おそらく闇者と呼ばれる存在であろうその亡骸達の、隙間を縫いつつ下に向って歩き出した。

数時間歩いた頃、足元の周辺どころか、目の前すら一メートル先がもう既に見えないほどの暗闇に包まれ、今日は進むのをあきらめたらしい、周りを警戒し、何もいないのを確認したうえで、大きな岩の陰に腰をおろした。

「なあ……虹、俺数時間歩きっぱなしだって言うのに、全然疲れないんだけどさ、ここに来る前の俺なら三十分もしない内にばてて動けなくなってるはずなんだが……って俺がここ以外の世界から来たって言うてなかったか？」

「初耳です……なるほどだからですね、私がご主人様と認めたのは零様が初めてにございます、異世界からの来訪者昔語りでしか聞いたことのない伝承です、以前に読んだ書物の一節をそのまま読み上げますね……異世界より出でし者共は得てして見た目は我等と変わらぬその身だが、その力、その知力、その勇氣、その回復力、その体力全てが我等を凌駕する存在だ、異世界より出でし者共はある時は歴史に名を刻む勇者、ある時は歴史に其の名を刻む魔王として常に畏怖と驚異の存在である……という事を読んだ覚えがあります。恐らくですが世界を超えた際の差異により、零様の世界での能力がこちらの世界での能力だと強化されたように感じるのではないのでしょうか？私も詳しい事を知っている訳ではありませんので正しいかどうかは解りません……何より異世界よりの来訪者とお会いしたことも零様が初めてにございます、お力になれず申し訳ありません。」

虹がその話を元にこの世界の事を色々と話し始める、主人と認めた零に一から細かく教えて行く為に。

「この世界、星自体に名前は付いておりません、今私達がいる大陸がセレディアと呼ばれるこの世界で、一番大きな大陸です。ほかにセレガイ、オクディア、セラ、死の大陸と呼ばれる大陸があります。これ等は五大陸と呼ばれ、人間が住んでいるのは死の大陸以外の四大陸にそれぞれ住んでいます。死の大陸と呼ばれる所に住んでいるのは闇者のみといわれておりますが、その大陸に挑み帰って来たものがおりませんので詳しい事が解っていない状態です。今いる

この山がセレディアの一番端にあるディアレストと呼ばれる山です。此処からですと、一番近い街がディアと呼ばれるそこそこ大きな街なのですが、丸一日は歩き続けなないとつけない距離です。」

「なるほどな、完璧に異世界だな、俺の住んでいたところにはそんな大陸存在しねえし、星自体に地球と名前もついてるしな。何より闇者とか呼ばれる化け物なんて存在しないし。」

虹の説明を聞きつつ、本当に異世界に来たことを実感する雫はやはりとても嬉しそうだ。

それを不思議に思ったのだろう、虹が怖々と控えめに問いをかけた。

「雫様……雫様は不安ではないのですか？突如として自分が今まで住んでいた世界とは全く別の世界に飛ばされたというのに……」

「俺はね、物心ついた時からあっちの世界は俺の本当の世界じゃない……そう思い続けていたんだ。おかしな奴だろう？だから夢みたいな異世界というものに憧れ……いや違うな、異世界こそ本当の自分の世界だと思い続けていたんだな……まあそんな可笑しな人間に友達や親しい者達が出来るわけもなく、常に一人。俺はあの世界から違う世界に行く事を毎日のように祈ってたんだ。だから不安とかはない！今あるのは……そうだな、たぶん歓喜って言うのが一番当てはまる感情だろう。」

雫はそう言うのと本当に嬉しそうにに笑った。

「それに向こうには俺を心配してくれる人もいないし、誰も俺を必要としてくれる人もいないから未練も何もないんだ。」

そこだけは少し寂しそうな雰囲気を感じさせていたが、それも一瞬で、逆に今度は虹に問いかけていた。

「そういえば、この世界だと虹みたいな意志を持っている武器って言うのは普通なのか？」

「いえ、恐らくほとんど存在しないと思われます。私自身今まで一度も出会ったことがありませんので、全く無い……とは言い切れませんが、あるとも言いきれません。私自身どうしてこのように意志を持つようになったのか忘れてしまっていますので何とも言い難いですが……そうですね、言い忘れましたが街中では私と話したりはしない方がいいと思います。私の声が聞こえる人等は滅多にいませんので、雫様が独り言をつぶやいてるようにしか見えなくなってしまうです。ですのでお願いします。」

雫は一つ頷いて虹を改めて見る、そこには闇すら寄せ付けないような銀色の刀身と七色に光る宝石が綺麗に存在する。

決してどれだけ離れていようと虹の事が認識できるだろうと、不思議な感覚に支配されるが、どことなく居心地のいいその感覚に素直に身を任せた。

しばらく見つめていると、思い出したかのようにまた問いかけが始まった。

「そっぴゃ、この世界には、やっぱり魔法とかがあってあるのか？」

「はい存在します。殆どの人が簡単な火付け位の魔法でしたら使えますが事戦闘において使える魔法となると、あまり数多く使える者はいません。ですのでこの世界で魔法使いと呼ばれる者たちはかなりの力を持った者達になります。勿論例外もあります……。ただ魔法といっても何でもできるわけではないんです。火を起こし風を

起こし、水を起こし、大地を起こすつまるころ、この四つに別けられるのですが、火は攻撃が主の魔法、単体から複数体にまで数多くの強力な魔法が多いです。水は基本回復の魔法が主です。時折幻覚や幻影といったものを作り出す者もいます。風に関してはほとんど支援ですね、攻撃も火の次に多いです。そして大地は防御の魔法が主です。それ以外に簡単な治療系の魔法もあります。私自身魔法が使えるわけではありません……使えないはずなのでこれ以上詳しく御教える事はできませんし、魔法を使う方法等も存じ上げておりません。」

魔法、改めて聞くと感嘆のため息しか漏れなかったようだ、雫は少しワクワクしながら魔法に思いをはせているが、実際使えるかどうかは魔法を使える人に教えを請うまで解らない。

そんな事は解っているのだろう、それでも期待せずにはいられないようだ。

「ふわああ……流石に眠くなってきたな……すまねえが寝かせてもらうな。」

「はい、大丈夫です何かありましたら全力で起こさせていただきます。」

「ああ、頼むよ……」

そう言って雫は眼を閉じる、何だかんだといって色々と疲れていたようだ、それもそうだろう突然異世界に飛ばされ、数時間歩きまわり、初めて聞く世界の話を延々と聞いていたのだ、精神的にも肉体的にも疲れない訳がない。

目を閉じて数分もしない内に寝息を立て始めた雫、虹は静かにそれでも絶対守るという意思と共に傍らに有った。

「御主人様……私が初めてそして最後に認めたただ唯一の主……よろしく願います……」

とても、静かに、誰にも聞こえないほどの呟きだった……ただそこには長年探し続けたとても大事なものをようやく見つけた……そんな感じのとても奇麗な感情が見える。

それを呟いた瞬間、雫は寝ていながら、しっかりと頷いた……ただ首が落ちただけかもしれないが、虹にとってはそれだけでも十分満足だったらしい、意識を周りに向け、何物であろうと近づいてくればすぐ解るようにした。

虹は次の日雫が起きるその時まで常にそこに有り続けた。

く第一章異世界く其の二（後書き）

二話目です。

短いですがこまめに更新していけるように頑張ります。

何か変な点や気になる点がありましたらご指摘くださると大変作者が喜びます。

誤字脱字などもありましたら是非お教え下さい。

それでは、最後まで読んでくださった方ありがとうございました、またよろしく願います。

では、失礼しますね。

第二章異世界〜其の三

「月夜の雫」第一章異世界〜其の三」

「なるほど……あれを倒せと？」

「はい、そうしなければ街にたどり着くことができませんので……
雫様なら大丈夫です。」

岩陰に隠れながら虹とひそひそと相談している事柄、それは岩陰の向こう側にいる三匹のクマのような大きさの狼っぽい闇者の事だ。するとい爪と牙、その上での巨体、大きくなったせいで素早さが下がっているかと思ったらそんな事もなく、その動きは雫が今まで見たどんな生き物よりも早かった。

「うん、ぶっちゃけ無理！ってか倒せるわけねえだろうが！あんな化け物と戦ったこともなければ、真剣な命をかけた殺し合いだっただしたことねえんだぞ！」

小声で器用に叫びながら逃げだす準備を始めている。

「雫様、ご自身を過小評価し過ぎです。何よりライラ達の動きをしっかりと把握できているという事は、視えているという事です。それであればいくらでも戦いようがあります……何より雫様がどれだけ戦えるか……試してみるチャンスでもあるのですよ。」

「確かに吃驚したけどさ、あのスピードを普通に視えるってのは……で・も・だ！だからと言ってその判断してからの反応に身体が追いつくかは別問題だろ！ちなみに俺はあれほど早く動けない！」

雫が言う事ももつともだろう、確かに岩陰の向こう側にいるライラと呼ばれた三匹は連携というものは全く無いが、一匹一匹のスピードと、その攻撃力はとても高い。

先ほど偶々不運にも飛び出て来た鳥の闇者、レイと呼ばれるらしいが、そいつもそこそ素早かったのだが、反応すらできず一撃の元葬られ、ライラ達の餌となり果てたのをしっかりとその眼で見っていたのだ。

「雫様……ですが、もう逃げる事もできないですよ？」

「はっ？どういう……なるほどね、これは無理だよね？ってかこうなる前に教えてくれよ！」

「申し訳ございません……ですが、はい。覚悟をお決めしてください。絶対に雫様が負ける事等ありません！今現在どれだけ動け、どれだけ戦えるかをしっかりと把握して下さい。」

現在の状況を言い表すと、背中を預けた岩を背に左右と前をしっかりと囲まれている状態だ。

それも爛々と光り輝く濁った灰色のその瞳と涎をだらだらと流し続けるその口が異様なほどに気味が悪い。

その上獲物……つまるところ雫がライラ達に気付いた事により、雄たけびを上げながら襲いかかってきた。

「ちよっ！？いきなりかよ！つと……って躲せた！それに何か動

けてるぞおい！俺すげええええ！」

もう駄目だと思った一撃、確かに視えていたが躲す動作を考える事が出来ても、身体がついていかない……そう思っていた。

だが雫の身体は、予想以上に考えどおり動いた。

その身体のキレは今までの雫にはなかった……否あり得ない程の物で、思わずそんな事が出来てしまった事に感動するのは仕方ない事だろう。

だが今だ戦闘中だという事を忘れてしまうのは如何なものか。

「感動するのは後にしましょう！次が来ます！」

「うわっ！っと！うひゃ！ってかいい加減にしろや！」

思いつきり襲いかかってきたライラの一匹を蹴り飛ばした……蹴り飛ばそうとしたが……。

「い……………いてえええええ！何だこいつ滅茶苦茶かてええええ！？」

蹴り放った足がまるで鉄を思いつきり蹴ったかのような感覚と痛み。

あまりの事に蹲り足を抱え込む。

ただ、突然反撃してきた獲物に何かを感じ取ったのか、三匹は一度距離をとって、タイミングを見はからい始めた。

「雫様、流石に武器なしでの戦闘では勝機はありません、私をお使い下さい。」

そう言って、自身の刃を日の光により輝かせ、絶対の自信を持ち

ながら雫の手に納まる。

「何だかなあ……さっきまで絶対出来ない、無理！とか思ってたけど何とかなるかもな……っていうかどうにでもなる気がして来た……なんてーか虹お前さん握り締めただけでなんとも不思議な安心感を得られるな。」

虹を握った瞬間、不思議な事に体全体が軽くなり、気分が高揚し始める。

もう完全に負けるなんて言う思いはなく、勝利が約束されている……そんな気持ちになっていた。

「違います、これが雫様の力なのです。今まで自分自身はこうだから出来ない、その思いが強すぎて出来る筈の事も出来なくなっていただけなのです。今この状態が今の雫様なんですよ。今のその安心感というのはある程度御自身の力がどれくらいかというのを把握出来、相手と比較した場合の危険度がかなり低いから……という所が大きい筈です。多少武器である私を持ったことによる安心感もあると思いますけど。」

「よく……解らないけど……今はひとまずこいつ等を倒すか！」

「はい！」

そう言った瞬間、走り出す雫。

目の前の一匹に真正面から突っ込む！

ライラも飽くまでも野生の闇者だ、反応速度と生存本能から目の前に迫った雫に思いつきり爪を振り下ろす。

だが、真正面から突っ込むそう思った行動は直前ライラを超える高さで飛びあがる事により背後からの奇襲となった。

「そこだっ！」

背後からのおもいつきりの一撃……横に振るったその虹の刃は斬った感覚が全くなく、一瞬きれなかったのかと雫は思ったが、次の瞬間切り裂いた場所から血が吹き出し、ライラの一匹が絶命する。あまりの切れ味に切った感覚すら無かったという事に遅れて気づき、反則に近いまでの攻撃力だ……そう思いながら、次のライラに向かい走り出した。

「体が思い通りに動くってのは気持ちがいいものだな！つつよつと！大ぶりすぎて隙だらけだぜ！」

新しく接近したライラは横薙ぎに爪をおもいつきり振るが、それを素早くしゃがみ交わした雫は大ぶりした後、身動きが取れなくなっているライラを一刀のもとに切り裂いた……逆袈裟斬り下から上への袈裟斬りだ。

とても耳障りな悲鳴とともにまた一匹絶命したライラ、残りは一匹だ。

「虹……お前が言ったことが解った気がする。多少強くなった感じはしてたが、ここまで馬鹿みたいに強くなれるとは思ってもいなかったぜつと！つつは！」

虹に声を掛けながら、振り降ろされた爪を交わし、その腕を切り落とす。

苦しげに悲鳴を上げたライラは眼を血ばらせて真っ向から突っ込んできた。

「これでラストっ！」

突っ込んできたライラをサイドステップで躲わしながら、躲わした一瞬で胴体と下半身をさよならさせる。

数瞬ののち、血が吹き出し、最後の一匹も絶命した。

三匹と戦闘が始まってから高々数十秒、一分とかからずに終わってしまい、どうしようかとたたずんでいるとまた虹が再度説明を始めた。

「雫様このモンスター達の牙と爪をもつていってください。街にギルドがありますのでそこでこちらの世界のお金と、生きていく為の方法が手に入ります……ギルドというのはこの世界に巣くう人に害なす闇者を討伐したり、各地に広がる争いに参加したり、地域住民からの依頼を受けたりする所謂何でも屋みたいなものです。ですがこの世界、旅人がこのギルドか商会に入っていない限り、荒くれ者の名で呼ばれ、盗賊や強盗と同意義にとられてしまいますので、入ることによるデメリットもやはりありますが、それ以上に入らなかった場合のデメリットが高すぎるので入られた方がいいと思います。そこで役に立つのが今回討伐した闇者の倒したという印です。これを持って行くとギルドが決めた闇者レベルによりギルド内での立場が決まっていきます。」

虹が言う事をライラの牙と爪を剥ぎ取りながら相槌を打ちつつ聞いていくが、気になるところが色々あったらしく一区切りついた所で口をはさんだ。

「何となくだが、こういった所かは解ったんだが、ギルドに入らない場合のデメリットっていうのは解った……いやまあ全部とはいえないだろうけどな。ただギルドに入った場合のメリットとデメリット、そしてギルド内の立場ってところが今の説明で気になったんだが、詳しい話は解るのか？」

「はい、まずはギルドに入るメリットですが、もちろん闇者を倒した際に手に入る報酬とその証拠の品を売り払う際の報酬です。ちなみにギルド以外で闇者の一部などを売り買いする場合違法行為にあたり、賞金首扱いで逆にギルドから狙われることとなりますので色々と危ないです。後はギルドから発行されるギルド特有の特殊なブローチがあるんですが、これも立場、ランクと呼ばれる物で色々差がでます。そしてランクによって各種街で宿屋の割引や武器防具の割引等といった特典と、年に四回あるギルド内の賞金付き闘技大会、腕試しみたいなものにも参加できます。デメリットはランクの低いうちはいいのですが、ある程度高くなると強制的に受けなくてはいけない依頼が出てきてしまったりします。もちろん受けなくて他に回すこともできますが、その場合は多額の違約金を払い、何度も繰り返すとギルドから追放される場合もあります。後はやはり各種街で事件が起こった場合、まず第一に頼られるため、見捨てたりする事が禁止されると言ったことくらいですね。もちろんその問題によって後からギルドで判断されそれ相応の報酬が手に入りますので全くのデメリットと言う訳でもありませんが。そして立場なんです、これはランクと呼ばれる物がありまして、一番下がM一番上がSSSと言った形になります、最初は推薦がない限りZから始まります、Gランク位になるまでは全くまともな依頼を受けられませんので、早くランクを上げたい場合は今回みたいに闇者を倒しそれをギルドに持って行くとその闇者のレベルによりランクを上げてもらえます。ちなみにランクC以上からは強制依頼が入りますし、ランクS以上からは国からの依頼も入るようになります。やはり高ランクになればなるほど色々優遇されたり報奨金が高くなったりしますので、高いに越したことはないですね。後ギルドは個人で登録するものですが、時に仲間を集めグループ登録する事も可能です。団と呼ばれる物で、団じゃないと受けられないような依頼等もありますので、所属しておいても損はありません。えてして団での依頼は高額依頼か

特殊アイテムがもらえる依頼が多いので得の方がいいですね。ただ下手な所に入ると解ると思います。が人間関係やら報酬の分け前やらで色々くだらない事になるので、もし所属する場合は慎重にお決めください。」

虹の長い長い説明をしつかりと聞き終え、タイミングよく三匹全部の牙と爪を集め終わった。

何か入れる物がないかと周りを見回したが、何も入れる物がなかった。仕方なくその牙と爪をまとめ、ライラの皮を少し剥ぎ、それを紐代わりにして纏めて肩に掛けて虹にまた話しかけながら街に向って歩き始める。

「んでこのライラっていう闇者だっけこいつはどれくらいの強さ、レベルなんだ？」

「はい、このライラが一匹で大体レベル十五前後ですね。ちなみに闇者につけられる最低レベルが一、最高レベルが百になります。が、どんなに強い闇者であってもレベル七十を超える者は片手で数えられるほども存在しません。その中でも最高レベルの確認されている闇者が七十六です。で、実際百まで用意しているみたいですが、そのレベルの闇者が現れたら、この世界が終わりかねませんね。」

説明を聞いているうちにこの闇者が大して強いものではない事に多少ガッカリしていた。

確かに戦い始めるとそれほどでもなく比較的楽に倒すことができたものの、最初戦うと決めた時は本気で死ぬと覚悟をした相手だ。それが低いレベルの者だと解ってしまい、多少高レベルの闇者じゃないかと期待してたので少しがっかりしたのだ。

ただ、そのレベルの闇者が何となく弱いと思ったのは寧自身の考えた。

虹がそんな雫に気づき、その考えを訂正するように話し始めた。

「雫様、倒した闇者が意外とレベルが低い事にがっかりされたのでしょう？勘違いですよ。このレベルの闇者は通常団で狩るか、たとえ一人で狩るとしてもランクC以上の人間が一匹相手にするのが精々な所です。三匹同時に相手し、無傷で倒せる人間だとランクAクラスの人間でも難しいかなんとか出来るか位の物なので、レベルだけを見ると確かに弱いように見えますが、通常の考えからするとかなり強いレベルの闇者と捉えても問題ありません。ただ……わかるとおりレベルがこれ以上に高い闇者も多数存在します。その闇者を単体ないし団で倒せるものがランクS以上の者達です。闇者レベル三十……このレベルの闇者を単体で一匹でも倒せればSランク相当ですね。団で倒す場合でも最低六人以上で全員のレベルがAクラスないと全滅される恐れがあります。それほどAからSの強さのレベル差が大きい事になります。もちろんSからSS、SSからSSSになると更に高い壁が立ちますので私も今だSSの人間はみたことありませんし、SSSなんて存在するかも知りません。」

全くこの世界の事を知らない雫の為に、細々とした詳しい説明まで混ぜ説明しているせいか、一度一度の説明がかなり長くなってしまふ……仕方のない事だが雫は少し申し訳なく思いながらも感謝の言葉を虹に言い、改めて今後の事を考え始めた。

（さて……つまるところ俺の今のレベルはたぶんAくらい相当……でもギルドに登録したばかりだとMだったか？でも今回持つて行くこいつ等のおかげで多少上のクラスからスタートできそうだな。何よりこの世界の物価が解らないからなあ……街に着いてからお金の種類と共に色々また虹に聞かないと駄目か……少々情けないがこの世界になじむまで仕方ないだろう。ひとまず街に着いたら宿を探して……この世界の金俺持つてねえじゃん！っーことは、まずギル

ドを探して登録し、これらを報酬と交換してそのお金で宿に泊まる！そして次の日に武器と防具を揃えられれば揃えよう……これらがどれくらいのお金になるかが問題だよな……その後はもう一度ギルドに行つてランクというものを上げるため依頼を受けるのと、団だかつてのを探してみるか……確かに一人でやるより仲間とやった方が絶対にいいだろうからな。)

黙々と歩きながらそんな事を考える、考え事をしていたせいか、それともそれほどあそこから距離が離れていなかったせいか、ハツと気づいたときにはもう街が視界に捕えられる所まで来ていた。

街の大きさは大したことはない……様に見えるが実際この世界では大きい方らしい。

確かにこの距離から見ると全体を見渡せるが、雫がいた世界、地球の小さな村と同じくらいの大きさだろう。

ただ見て解るのはその土地は建物や屋台と呼ばれる物に埋め尽くされ、多数の人が存在しているのが解り、人の数だけみると地球の町位の人がいるかもしれない。

そんな事を観察しつつ考えながら、少し歩みを速めて街に向かう。知らず知らずの内にやはり一人よりたとえ知り合いがいなくとも同じ人間がいる場所に行きたかったのだろう、何より突然異世界に飛ばされ、喜んでいるとは言っても最初から今まで出会ったのが不思議な武器の虹一人？一刀？

そのおかげで寂しい思いや不安な思いをしないですんだのでありがたい事だろうが、それでも初めて本格的に異世界での人間と触れ合う瞬間……多少緊張しつつも胸を躍らせるのは仕方のない事だろう。

そんな様子を虹も少しほつとしたような雰囲気ですを感じてる。今までそんなに緊張した様子は傍から見ても感じられなかったが、それでも無意識に多少身体が固くなったり緊張したりという事をしていたのだ、虹にはそれが解っていたため、今の本当に安心しながら

ら、期待しつつ足早に街に向かっている雲に安堵したのだろう。
そして漸く、雲達は街にたどり着いたのだった。

〈第一章異世界〉其の三（後書き）

これで第一章完了です。

次から第二章にはいります、ちなみに各章三話づつとかそういうのは決めていませんので、時には第二章で終わることもあるでしょうし、時には五章六章と長くなることもあると思います。

頑張って書かせて頂きますので、何かご意見ご指摘ありましたらぜひよろしく願います。

誤字脱字を見つけた方もいらっしやいましたらよろしく願いますすぐ直します。

それでは、この旅も最後まで読んでくださってありがとうございます。

またよろしく願いますね。

では失礼します。

第二章ギルド―其の一―

「闇夜の雫―第二章ギルド―其の一―」

ガヤガヤと老若男女が溢れかえるこの場所がギルド……と言いた
いところだが、ここは街の広場だ。

周りには露店が建ち並び様々な品物が売り出されている。

冒険には欠かせぬ食料品から各地を回り集めたであろう変な置物
やらタペストリー等まで様々な物が置かれていた。

雫は見慣れぬそれらを見る度に興味を示しあちらこちらをフラフ
ラしていた。

「おゝすげえゝあ！あつちのはなんだ！これおもしれえ！」

虹はそんな雫に呆れたような雰囲気を醸し出しているが、気付か
ないのか、態と無視しているのか知らないが、気にせずフラフラし
続けた。

日が沈みかけ、徐々に露店が少なくなってきた。漸く本来の目的を
思い出したらしく、雫は偶々見掛けた金髪の少女に声を掛けた……
逃げるかのように路地裏に向かってソソクサと動いていた少女にだ。
完璧にそんな事に気付かず……と言うよりも気にせず気軽に声を
掛けられるのは虹すら呆れながらも感心していた。

「あつ！ちょっと待って、道教えてくれないかなあ？」

ビクツと跳びはねながら雫の方に振り返った少女はお人形みたいに綺麗と言うよりも可愛い感じであり、腰上までの長さでウェーブのかかった金髪と蒼い瞳が一際少女を人形のように見せかける。

誰もが始めてみれば息をのみ言葉を掛けるのすら忘れても仕方ない少女にこれまた全くそんな事に気付かず話続ける……虹など呆れを通り越して尊敬すらしている。

「おっ！ラッキー可愛い子に声を掛けたな！って違った今はギルドの場所を教えて欲しいんだが……君知ってるか？」

「えっ！あ、あの……」

少女が返答に困ってオロオロしていると雫の後から見つけた！と言う叫び声と多数の足音が聞こえてきた……誰がどう考えても真っ直ぐに此方に向かって来ていることから少女を狙っているのは明らかだ……が、雫は本気で気付かない……違う、気付いてはいても完璧に無視を決め込んでいるようだ。

「みつくまっぐばあ！」

雫の脇から飛び込み少女の腕を掴んだ男が話し終わる前に蹴り飛ばした、力が上がっている雫が蹴ったのだ……二転三転しながら転がり、路地裏の樽に突っ込んだ。

「あのさー俺が今話しかけてんだろ？割り込んでくんじゃねえよ」

後ろで警戒し始めた集団にそういい放ち改めて少女に向き直る。
少女はビクツと再び身体をすくませ脅えたように雫を見る。

「んゝ答えを聞くにも後ろの奴等邪魔で答えられない？じゃ今すぐ此だけ答えて、助けいる？」

雫がさっきまでと何ら変わらないお茶らけた雰囲気で聞いた為一瞬思考が付いていかなかった様だが、質問の意味を理解してさっきまでの脅えた瞳ではなく、何か期待したような瞳で勢いよくコクコクと頷いた。

「了解！つー訳であんたらこのまま帰るなら許したげるけど、向かってくるなら怪我覚悟してね」

少女の答えを聞くと笑顔で少女にそう返し、頭を軽く撫でながら集団に振り返った。

「どこのどいつか知らないが、訳も分からず揉め事に首を突っ込まん方が身のためだぜ」

集団のリーダーっぽい奴がそう言いながら剣を抜いた。

「いやだってよ、よく考えてみる？こんな可愛い子が助けを求めてきたんだぜ、そりゃ助けるだろう！むさ苦しい男達とどっちとるか聞かれれば間違いなく可愛い少女だろう！」

胸を張ってそんな事を言い出した雫を呆れ果てたように茫然と集団は見つめていた。

この時初めて集団の考えが一致した。

【こいつは馬鹿だ！】

と。

少女は不思議な事にそんな雫に憧れるような熱い眼差しを向ける……誰もが思った、可笑しくね？と。

「気に入ったあ！そうでしょ其の通りでしょ！解ってるねあんな、あたしやすげえあんたが気に入った！だからあたしも手を貸すぜ！」

だがそんな白けた空気の中、またも全く空気の読めない馬鹿が現れた。

出てきたのは真っ赤ポニーテールの髪の新と同年位の女だ、背中に自分と同じくらいの長さの剣を背負っている辺りから剣士だと判断できる、因に女の身長は雫より拳一つ小さいくらいだ。

雫の身長は百七十五位なのでかなり背は高い方だろう、少女に関しては頭二つ分くらい小さい。

「おお！解るか同士！俺は雫、夜月雫だよろしく頼む！」

「ああ！任せな！あたしはサラライカだ宜しくな！」

がっちりと握手を交わす二人、既に集団はおいてけぼりだった。

「ツハ！て、てめえら何してやがる！サッサと馬鹿どもを片付けやがれ！？」

「……お、おう！」「」

リーダーらしい男の叫び声に我を取り戻し集団は襲いかかってくる、其の数二十人。

二十対二……普通に考えれば勝ち目など全くない勝負だが、生憎

この二人は普通じゃ無かった。

「リーダーは雫あんだだ、雫の指示に従うよ！」

「作戦名適当にボコる！人死になしでね。」

「オーケー！いやに解りやすい作戦だいい感じだ！」

「しゃあないでしょ、サラの戦力も戦い方も知らないんだから、何より人を馬鹿呼ばわりするこのムカツク奴等にそんな上等なもんは勿体ねえ！」

「あつはつは！いいね雫！本気であんたの事気に入ったよ、確かにこんな雑魚に作戦だなんて上等なもん勿体無いねえ」

因に普通に話しているが、その間も二人は襲い掛かってくる奴等をあつさりと片付けていく、子供と大人と行った感じに、なるべく大怪我しないように気を付けながら片付けていく。

雫は襲い掛かってきた奴等の攻撃を交わすと共にカウンターで腹を殴り、背中を蹴飛ばし、一生懸命手加減している。

サラはこういう事に慣れているのだろう、自ら突っ込み手刀で軽くそいつらを落としていく。五分も掛からず終わってしまい、最後にリーダーっぽい奴を倒そうとさっきまでいた場所を見ると誰もいなかった。

尻尾を巻いて仲間を見棄て逃げ出したらしい。

「手応え無すぎだねえ」

「んだなあ、弱いのはすぐ解ったけどあれほどとは思わなかった」

意気投合し盛り上がる二人、何時しか話は酒でも飲んで！みたいな感じになっていた。

会話の際にギルドと言う単語が聞こえてきたので、よったあと直接酒盛りらしい。

サラが幸いなことに案内してくれることになって話が進んでいく。そしてさあ歩き出そうとした時、最初の原因であった少女が意を決して話しかけてきた。

「た！助けてくれてありがとうございます！」

それで漸く思い出したらしく、二人は少女から少し目をそらし頭を描いた。

本気で忘れていたらしい、お互い視線がかち合い苦笑をもらした。

「いや、すまんかったな、何かえっと……」

「あつ！クリスです、クリス〃サイラックです！」

「あークリス何か無視したみたいになっちまってすまん、今のことは気にすんな、むしろサラみたいな面白い奴に会えたんだ逆に感謝するぜ」

「へえーサイラック家のお嬢さんかあだから狙われてたのかね？ああいや理由はいいいよ、一先ず雫が言うとおり気にしないでいいよ、雫も言ったがこんな面白い奴に会えたんだ逆に感謝するよ」

二人にそう言われ小さくなってしまふ少女。

だが少女はぱつと顔を上げ、二人を見渡しながらもう一度頭を下げお礼を言った。

「ありがとうございます！でも助けてもらったのに何のお礼もしないなんて出来ません、せめて食事くらいご馳走させてください！」

中々小動物みたいな外見と雰囲気を持っているが、意外と芯は強そうだ。

そんな少女を雫とサラは苦笑を漏らしながらもどこか嬉しそうに見つめた。

「今から先にギルドに行くからかなり遅くなってしまっけど……」

「私も！私もギルドに用がありますので大丈夫です！」

「そっかぁ～ならお言葉に甘えてご馳走になろうかな？雫もいいでしょ？その代わりあたしはかなり食べるからね覚悟しなさいよ！」

「ああ、構わないぜ、俺も人並み以上に食べるから、頼むぜ！」

雫とサラの言葉にとても嬉しそうに笑い、大きく頷いた。

「は、はい！ありがとうございます！宜しくお願いします！」

「ああ、宜しくな！」

「宜しくね～」

こうして三人は日がくれる前にとギルドに急いだ。

偶然か必然か出会った三人は楽しそうに笑いながらその道を歩いていった。

く第二章ギルドく其の一（後書き）

第二章です。

修正しました。

第二章ギルドの其二

「月夜の雪」第二章ギルドの其二」

街の外れにあるそこそ大きな建物、そこがギルドだ。

カランカランという音と共に雫達三人はギルドの中へ入って行った。

中に入るとごちゃごちゃとした雰囲気……全くなく、きちんと小奇麗になったカウンターと恐らく依頼であろう紙の貼ってある掲示板に少し大きめのテーブルが五つあった。

あたかも市役所によく似た雰囲気醸し出している、その景色だけであれば。

ただそこにやはり冒険者であるギルドメンバーが鎧やローブを身に着けそのテーブルで談笑をしていたり、職員達も各自武器を携えているあたり、そこは冒険者達の集まるギルドだという事が認識できる。

「おゝ意外と綺麗だな……とこれが掲示板ってやつだな、結構たくさん依頼ってあるのか」

「……ふあ……これがギルド……」

雫は興味津津に掲示板やら建物なかやらを観察し、クリスは少し呆けたようにやはり建物の中を観察している。

「あはは、何だい何だい、初めて見たってわけじゃないんだろ

う？クリスはともかく雫はさ！」

クリスト雫の反応に苦笑を洩らしつつそう言って近くのテーブルに腰掛ける。

「あゝ言つてなかったつけ？俺ギルド初めてなんだ、今日登録するために来たんだわ」

「！嘘でしょ？あれだけの実力があつて今までギルドに所属してなかったってのかい？」

腰かけたサラが心底驚いた事に逆に雫が驚いている。

「雫さんもなんですか？私も今日ギルドに登録しに来たんですよ！」

「！？」

今度の驚きは二人とも同じだ、まさかクリスが冒険者としてギルドに登録しに来るとは二人とも思っていなかったらしい、てっきり何か依頼をしに来たものだと思つた二人はバツとお互いの顔を見合わせ、酷く慌てたように捲くし立てた。

「ちょ！クリス本気かい！冒険者になるってんなら一日の宿の保証どころか命の保証だつてないんだよ！」

「そうだ！俺も詳しい内容を知っているわけではないが、生半可な者じゃ勤まらんとくろだろう！クリス悪い事は言わない考え直した方がいい！」

二人が二人、素直に心配してそう言っているのだが、言われてるクリスはあまり面白くはない、ただその二人の気持ちもわかるため、簡単にすねたりする事も出来ず、どうしようかと考えていると言い手を思いついた！と言った感じに二人に近づいてきた。

「私だつてそう甘い気持ちで登録しに来たわけじゃありませんよ？一応それなりに力も身に付けたつもりです、雫さんサラさん、少し身体を預けていただけませんか？」

「……まさかクリスあんた！」

「……よく解らんが、俺はいいぞ」

「ありがとうございます……それでは行きます！」

クリスが少し自信があるようにそう言うと、サラは思い当たることがあったらしく驚きながらも体を預け、雫に関しては何も考えずに身体を預けた。

それを嬉しそうに確認すると、少し今までと違った空気がその場を支配する。

クリスから聞こえてくる声は何ら変わってないはずなのに、その声はとても神聖で邪魔をしてはいけなないと心から思ってしまうような不思議な感覚。

「我願う、我思う、この者等の心身を癒し、傷を癒す奇跡よ、今こそあれ！ヒーリング！」

クリスがそう言い終わると雫の腕に着いていた傷とサラの赤くなつた足の打ち身がスウッと消えていった。

「なるほどね……納得したよ、クリスあんたは神聖使いか……」

「はい！これでも他にも何種類かの奇跡を起こすことができますし、ヒーリングに関しては威力が落ちますが、神言を省略することもできます、直接戦闘はできませんが、後方支援ならなんとか頑張れると思うんです！」

（なあ……虹、神聖使いとはなんだ？）

（はい、魔法使いというものがいるというのは以前話しましたよね、神聖使いは神の奇跡を使う者の事です、魔法使いが攻撃を主に扱う事に関して、神聖使いは神の奇跡による、回復と支援を主に扱う者達の事です、ちなみに神聖使いというのはかなり稀少です、この年であれだけ使えるなど、よっぽど才能がある上で努力したでしょう）

（なるほどね、助かったサンキュウ、にしても意外とすげエ奴だったんだなクリスも）

サラとクリスが話し合っている間に、虹に耳打ちしながら新たな知識を手にいれ、会話に参加し始めた。

「すげえなあー神聖使いって稀少なんだろう？それもその年でそれだけの奇跡？だっけ使えるのかかなり凄いらしいじゃねえか！さつきは悪かったな侮辱しちまったみたいになって」

「ああ、私も謝って無かったね、それだけの力を持っていりゃ誰もクリスを馬鹿にしたり、実力不足だなんて言えないね、悪かったよ」

雫とサラがそう言って頭を下げると、あわあわと慌てながら声を上げる。

「そ、そんな！謝らないでください！私を心配して言ってくれたというの解ってます！だからそんなえつとですね、だから！謝らないでください！」

混乱した頭で何か旨い事を考えようとしたらしいが、全く思い浮かばなかったらしい、結局言えたのはお願いだから頭をあげて、謝らないでと言った事だけだ。

そんな驚愕に満ちたクリスと雫の告白でまたしばらくドタバタと登録をするのを忘れ騒いでいた。

十分ほど三人で改めて話しているとようやく落ち着いたらしく、雫とクリスが登録して来るという事で、カウンターに向かった。サラはもうすでに登録済みだからという事で、テーブルで二人が戻ってくるのを待つことにしたらしい。

「こんばんわ、本日はどういったご用件でしょうか？」

ギルドのカウンターの女性はにっこりと笑いながら、それでもじつくりと見極めるように雫を見てきた。

じつくり見る……と表現したものの、その女性の視線が雫を見たのは数秒にもみたく、笑顔を全く崩さない、かなり慣れた感じで瞬時に見極める事が出来るのだろう。

「こんばんわ、今日はギルドに登録させていただきたく参りました」

「そうですか、それはありがとうございます！ギルドは新しい仲間を歓迎致します、それでしたらまずこちらの用紙に御自身のプロフィール等をご記入ください」

手渡された用紙はちんぷんかんぷんな文字が書かれた未知の用紙だった。

たらりと冷や汗を流しながらも辛うじて笑顔でそれを受け取り、近くにあったカウンターの空きスペースで睨みつけながらペンを進め始めた。

種明かしをすると。

（わ、わかんねえよ！何だこれ！俺普通に話せてるからてつきり日本語だとばかりかしおもってた！？）

（落ち着いてください、私が文字を御教えます、幸いな事に記入に必要な文字は全部その用紙に書かれてるみたいですので私の指示に従って書いていってください）

という事だ。

用紙の内容はというと。

「まずは名前と……OK、次に年齢と住所……年齢は二十五歳と住所は不定……でいいのか？そうかいのか、次が戦闘スタイル？……近接戦闘と主にナイフだが得物を選ばずと、戦闘経験はライラ三匹……」

こんな感じの簡単な自分自身の自己紹介みたいなものだ、簡単に言つと履歴書と言つたら解りやすいだろう。

まずは文字を認識するのに苦労しながら、四苦八苦してようやく書き終わったその用紙を満面のやり遂げた笑みで先ほどのカウンタ

一の女性に渡す。

どこか不思議そうに小首をかしげながらも、素直にその書類を受け取り眼を通していくが、次第に表情から笑みが消えて行った。

「雫様、少々よろしいでしょうか、この戦闘経験なんですが、ライラ三匹というのは御一人という事でよろしいですか？」

「ん？そうですけど……えっと何か変でした？」

雫の返答に少し困ったような表情になりながら重ねて質問を繰り返していく。

「いえ……申し訳ありません、それでライラ三匹は一匹ずつ違うときに倒したという事でよろしいんですね？」

「え？いや違いますよ、三匹で襲ってきたのを倒したんですけど……」

その返答に表情が固まる。

「え、ええとですね、それで戦闘総時間が一分未満というのは……」

「あ、はい、それはどうかこうか悩んだんですが、実際まともに闇者と戦ったのはライラ達三匹が初めてでしたし、その戦闘も数十秒で終わってしまったので一分未満とかいたのですが……すいません、もう少し違う書き方をした方が良かったですか？」

「……い、いえ結構ですよ？少しお待ちいただいてもいいですか……課長！ちよっと来てください！」

雫がどこか間違えたか？と考えながら不安そうにカウンターの女性のを見ていたんだが、最後に酷く困った顔をして、席を立つとこちらに聞こえてるのを知ってか知らずか大声で上司を呼び出していた。

呼び出された上司の人もその用紙を見ると少し困ったような顔になり、今度は二人で雫の所へ戻ってきた。

「ええつと雫様、このライラ三匹ということなんですが何か証明できるものは……」

「ああ！そうでしたねすっかり忘れてましたすいません！これです……爪と牙でいいんですよ？」

雫はライラの皮で包んであった爪と牙のセットを三つ取り出した……ライラのその皮ごと。

「……ええ、確かに間違いなくライラの爪と牙ですね、そしてこれは皮ですか……解りましたしばらくお待ちください」

それらを確認した上司の人とカウンターの女性は一度奥に引っ込んでしまったので雫は一度サラの待つテーブルに戻ってきた。

そこには既に登録の済ませたクリスが来ていて、雫の登録がまだ終わってない事に二人は少し驚いていた。

「へえ……まだ終わってないのかい、何かあったの？」

「んゝ解らねえ、戦闘経験と戦闘総時間を聞かれてカウンターの女性が上司呼び出して、そのまま奥に引っ込んでいっちゃった」

「私の場合、稀少能力である神聖が使えるので、簡単な奇跡をいくつか見せただけですぐ登録できましたよ？ちなみにランクはGからだそうです、かなりいいランクから始められました、これもサラさんの推薦があったからですね、助かりますありがとうございます」

「いやいや、推薦いくらして駄目なものは駄目なんだ、それで評価をもらえたってことはそれだけクリスの力があつたってことだろう？」

サラとクリスは不思議そうに雫の現状を感じながら、ランクと推薦といった話をし始めた。

「推薦つてのはなんだ？」

「ああ、まだ言つてなかったっけ？私一応これでランクBまでいってんだよね、それでランクC以上の奴は一応推薦つてのが出来て、推薦した人間がそれ相応の実力を持っていれば、最低ランクからのスタートではなく、ある程度上からのスタートが出来るって訳さ、一応あんたも推薦しといたからそこそこ上からスタート出来る筈だよ」

「なるほどな、それは助かる、ありがとな」

「あはは、むず痒くなっちまうよ！気にしないで！」

顔を赤くして照れてるサラを微笑ましく見ながら、雫はサラとクリスにどうして自分だけこんなに時間がかかるんだろうという事を話し始めた。

サラの話を聞くと、登録自体にそうそう時間がかかるのは滅多に

ないらしい。

「そういや、さつき戦闘経験と戦闘総時間を聞かれたあと色々あったって言ったけど、どんなこと書いたのさ？」

「あ、それは私も気になってたんです、戦闘経験とか戦闘総時間とか私は無しって書いてしまいましたので、雫さんはどうお書きになられたんですか？」

先ほどのカウンターの女性に話したのと同じように話すと、二人の表情が一気に固まった。

反応まで先ほどの女性と同じような反応だ。

「なあ……そんなに変な事俺いったか今？よく解らんのだがどこがおかしかったんだ？」

心底不思議そうに聞く雫にサラとクリスは顔を見合わせたため息をついた。

「あのなあ……普通ギルドに登録してない一般人がライラなんて結構上位の闇者を倒せるわけがないんだよ、それも一匹でもおかしいのにそれが三匹もだって？そりゃ誰だって固まるよ」

「はいその通りです、それに冒険者といってもランクA相当かそれ以上でなければそれこそ三匹なんて纏めて相手できませんし、出来てもかなり大けがを負ってしまうか、もしくはそれ相応の時間がかかってしまう物なんです、それを雫様は三匹を数十秒でそれも大した怪我もなく倒してしまったと言われました……明らかに異常な出来事です」

サラとクリスが本気でため息をつきながら雫を見つめる。

「どうやら本気にされていないようだ、どうしようかなあと思っていると、先ほどのカウンターの女性から呼び出しがかかったので、先ず二人を置いてカウンターに向かった。」

「大変お待たせしました……まずこちらがギルドの登録の証であるカレードと呼ばれるブローチです、それとこれをお持ち下さい、カレードをこれに嵌めお使い下さい、これはカレードと呼ばれる一種の通信をするための道具でして、そちらから話す事はできませんが、こちらからの依頼を伝える場合カレードに情報を転送し表面にその依頼が表示されるようになります」

雫は女性の説明を受けながらそれらの品を受け取り、言われたとおりカレードをカレードに嵌め、胸につける、カレードは直径十センチほどのだ円形の黒曜石みたいなブローチで、カレードというのがそれを力チつと使えるような銀の入れ物だ、きちんと胸に付けられるように細工してあるのはかなり使い勝手がいい。

「そしてこれが先ほどのライラ三匹の報奨金となります、この度は依頼を受けてというわけではありませんので、爪と牙の買取だけですので、この金額になります、合わせて千五百シルです、ああ伝え忘れるところでした、雫様のランクはCとさせて頂きます、一応Dランク以上の方であれば上位の最高Aランクまでの依頼をお受けすることができますが、上位の依頼になればなるほど命の危機が付きますのでご自身にお合いましたランクの仕事をお受け下さい」

「はい、解りましたありがとうございます、えっとひとつ聞きたいんですけど、ランクはどうしたら上がるんですか？」

少し早口に説明をした女性がほっと一息をついたのを見計らって、
一つだけ尋ねた、ある程度落ち着いたように先ほどまでの笑みを顔
に貼り付け、親切に説明をしてくれる。

「はい、ランクは上位の依頼を受け、ギルドに上のランクにい
けると認められた者か、同ランクの依頼を多数こなし、地道に経験
を積んであげる方法、後は例外的に国やギルドの上層部からの推薦
でランクが上がることもあります、あとはそうですね、栗様がなさ
ったように、自分より上のランクが倒すような闇者を倒した場合も、
ギルドの方の認識になってしまうのですが、それ相応のランク上が
ることがあります、ランクのアップの仕方としてはこのあたりです、
よろしいでしょうか？」

「はい、助かりましたありがとうございます！何かいろいろ迷
惑かけちゃったみたいですいません」

「いいえ、こちらこそ大変長い時間お待たせしてしまい申し訳
ございませんでした、それではこれで登録完了となります、改めて
よろしく願います」

「はい！よろしく願います」

栗は軽く頭を下げると、もらったお金を手にサラ達の待つテーブ
ルに戻っていった。

「おーお帰りーようやく終わったみたいだねって何だいそれ！」

「お帰りなさいです、凄いですね……かなり大金ですよねそれ
？」

サラとクリスが驚いているのは俺が持ってきた袋だ、大量のお金が入ってるのが見て解つたらしい。

雫にはどれほどの価値があるかが全然わかっていないので、誤魔化すように笑うしかない。

（雫様、基本宿屋に一泊するのに一シル、食事などであれば、大概一シルあれば二日は存分に食事ができるくらいの価値があります、小さなはずれにあるくらいの家であれば買えてしまうほどの大金です）

虹のフォローによる教えにより、何とか価値は解つたが、予想以上の大金に雫の動きも止まってしまった。

「……あ、あはは、ライラ三匹分の報奨金らしいよ、今回依頼じゃなかったから爪と牙だけのお金だつてさ」

「お、おい！さっきのライラ三匹つてのは本当だったのかい？」

雫がそのお金の出所を言うと、お金自体よりライラ三匹を倒したことが事実であつた事に二人とも驚愕していた。

そういえばと、雫は思い出していたのは虹に受けた説明だった、ランクAクラスでも無傷で素早く三匹のライラを倒すのは難しいという事。

「いやー知れば知るほど面白いやつだな！雫は！良かったらさ私と一緒にパーティー組まないかい？」

「あ、で、出来ればいいんですが、私もパーティーに加えていただけませんか！」

「パーティ？って仲間ってことだよな……… っていうものなんだ？」

雫は団という物については説明を受けたが、パーティという物の説明を受けていなかった、思わず素直にそんな質問が出てしまったのは多少気が緩んでいたからだろう。

ただそんな質問を二人は少し物を知らない奴だなあという認識しかもたなかったみたいで、普通に説明を始めてくれた。

「パーティってのは依頼をそのパーティと呼ばれる仲間同士であたることだ、ちなみに団っていうのがあってこれは固定パーティという物であり、一々探したり、抜けたりすることがないので、いろいろ便利だな、出来れば団を作りたいんだが…… すまないね、私はどこの団にも所属してなければ、団を作る資格もないんだよ」

「団を作る資格というのがですね、レベル十以上の魔物を一人で討伐する事……… なんです、これくらいできる人間でないと、団を作ってもまともに機能しないという事らしいんですが……… サラさんは資格ないという事です、ライラを倒した雫さんなら資格があります」

なるほどなるほど、と頷きながら聞いていた雫は、どこか期待するかのようにつめる二人の視線にようやく気付いたらしい……。

（えっと……… もしかしくなくてもこれ俺が団を作るのを期待してるって訳か？）

（雫様、もしかしくなくても間違いないそうですね、ただ私から見てもこの二人であればパーティを組んでも絶対間違いないように思えます、何より団に所属しての方が色々と便利ですので作って

も問題はないと思いますよ?」

虹と二人耳打ちで相談しながら、少し考えるが……作った際のデメリット（めんどくさい）よりメリットである各種特典の方が心ひかれる上、何より一番心を動かすのが、雫に団を作ってほしいを瞳で語る二人の存在だ。

正直異世界に飛ばされ初めて出来た人間の知り合いであり、気も合えば性格もよく、その上腕も立つ……何より、何だかんだで雫自身も彼女たちを気に入っているし、彼女たちも雫を気に入ってくれている、そんな彼女たちに期待されていることから、雫は一つ頷いてどうするかを決めた。

「ん〜そうだな! 団作ったときのメリット色々便利そうだし、サラとクリスが入ってくれるなら作るうと思う、二人とも一緒に入ってくれるか?」

雫がそう言うと、とても嬉しそうにクリスが頷き、サラも少し照れながら頷いた。

「はい! 是非よろしく願いします雫さん!」

「ああ、私も入らせて貰うよ、よろしく頼むね雫!」

そう言って三人は手を合わせた。

そこでクリスがふつと重要な案件を持ちかけた。

「それで団名はどんなさるおつもりですか?」

「……か、かんがえてない!」

あーでもないこーでもないと話し合いが開始されるが一向に決まる気配がない、二時間ほど食事を取り入れつつ話し合いを続けたが結局決まらなかった。

そんなとき虹がポツリと一つの名前を言ったので、代わりに雫がその名前を二人に伝えた。

「月夜の雫……つてのは？」

雫は言った後によくよく考えるとこれって自分の名前とほんとんと同じじゃねえか！と思い急ぎ取り消そうとしたが……。

「……いい、いいですよそれ！何かしっくりきましたそれがいいです私！」

「そうだね、あたしもかなりストンってきたよ、それいいじゃないか」

二人が揃って大賛成してしまったため、取り消すこともできなくなってしまった。

その後、食事を終わると、三人で先ほどの女性のカウンターに行き、団を作りたいという旨を伝えると、驚いたように雫を見ながらも、一つ頷き用紙を渡してくれた。

用紙に団名と構成員をかき、各自のランクを書きながら提出した。

・団名：月夜の雫

・構成員、リーダー：夜月雫

副リーダー：サラ＝ライカ・クリス＝サイラック

・ランク：B一人C一人G一人の為総合D

と言った簡単な書類だ。

これを書き終わると三人顔を見合わせ満足そうに頷きながら提出した。

「団のランクがCを超えますと全員にカラードルが配られます、ぜひ頑張ってください」

雫達はその女性の応援の声に元気よく返事をし、ギルドを後にした、今日の宿屋を探すためである、外に出たらもうすでにあたり一面は暗闇に支配されており、目の前にあった宿屋に入った。

部屋を二つ、雫の部屋と、サラとクリスの部屋で二つ、お金は報酬金が手に入ったからといって雫が出した、そして、いろいろあつて疲れていたせいか、詳しい話は明日にしようという事になり三人は分かれ各部屋に入っていた。

雫は久しぶりのベッドのような感じがし、勢いよくポフッと飛び込んだ。

「んでさ、虹、カラードルって何？」

先ほど女性から言われたそれが凄く気になってはいたが、二人の手前まともに聞くこともできず一人になり虹と話せるようになるまで待っていたのであった。

「はい、カラードルは先ほど説明があったとおり受信だけのものですよね？カラードルは送受信が可能なブローチで、最初からだ円形の宝石とシルバーの土台がセットになっている希少な道具です、ちなみにギルドへの報告もでき、ギルドからの依頼も受信できます、ただ特別に登録した人同士であれば、送受信以外にカラードルを通

して声を届けたりする事も出来るようになるので、出来るだけ早く手に入れられるようにした方がいいですね」

「なるほどね」それは便利だ、がんばって早くそれもらおうか」

そんな話をしている間にも雫の瞼はトロンとしてきていた、話し終わる頃には既に瞼は落ちており、もういつ寝てもおかしくない状態になっている。

「雫様……今日はゆっくりお休みくださいませ、お休みなさい」

「……あ……と……おや……み……」

雫がかるうじて返事をしていたが何を言ってるのかわからない返事だった、だが虹にはしっかりと通じており、再度お休みなさいと言ったのを最後に聞き雫の意識は落ちた。

雫の意識が落ちた後、ひと振りのナイフの虹は雫の方に意識を向けた。

「安心してお休みください、何があろうと雫様は私がお守りいたします……」

雫に向けていた意識を部屋全体に張らせ、雫が起きるまでずっとその状態を維持し続けていた。

ちなみに、雫が起きたのは次の日の昼くらいであり、起こしに来ようとしたサラとクリスは部屋から異様なほどに嫌なプレッシャーが出てた為近寄れなかったとの事、そして遅れた雫は昼食を御馳走するはめになっていた。

く第二章ギルドく其の二（後書き）

第二章其の二です。

少しだけ前回より長いですが、といっても全然短いですけどね。

ここでもうやく下地ができてきました。

此処から色々と団として動き、仲間を増やし絆を強くしていくはず
です。

最後まで読んでくださった方ありがとうございます。

もしよろしければこれからがんばりますのでよろしくお願いしま
す。

それでは失礼しますね。

第二章ギルドの其三

「月夜の雫」第二章ギルドの其三」

「まずは武器と防具を揃えたいな」

寝坊して、少し遅めの昼食を酒場で取り終えた雫達は、まずはどうしようかといった話になり、まずは……と雫がそう言ったのだ。昨日ギルドで団を立ち上げた後、すぐに宿屋に行き眠ってしまった為、何も用意ができていなかった為だ。

「そうだねえ」さすがに丸腰で訳にはいかないからね、我等がリーダーが何も装備してない状態だったら少し情けなさすぎるっていうのもあるから、あたしは賛成だよ」

楽しそうにからからと笑いながらそう言い、雫の意見に賛成してくれる。

「そうですね、私も周りにはれないように家を出てきてしまい何も準備できてないのでまずは武器と防具揃えてしまいたいです」

クリスも雫と同じように武器と防具を一切用意していなかった、サラはクリスの言った発言に少し驚いたようにその疑問を投げかける。

「クリスあんた……もしかして家出してたのかい？」

「あはは、いえ、少し違います、サラさんは御存知のようすが私の家はサイラック家という比較的裕福な家庭でした、ただ先日両親が亡くなりましてその遺産や権利と言ったものを私しかいなかった本家から取り上げる好機と叔父が色々と悪だくみしていましたので、巻き込まれ周りに迷惑をかけない内に家を出てしまったのです、いつか自分自身で問題を解決できるようになるまでは冒険者として過ごし経験を積もうと思ったんですよ……今更ながら自分で話していると家出ですよね」

そう言っただけでクスクスとなんでもないかの様に笑う。

クリスマス自身両親の事はしっかりと整理がついており、遺産関係や叔父の問題を自分で解決するために経験を積もうと努力しやり遂げる覚悟も持っているらしい、見かけによらず芯が強い少女だ。

そんなクリスマスを見て、やっちゃった！と言った感じで謝ろうとしたサラを雫が止めた。

「謝るなよ、クリスマスにとってその話題は謝られることじゃない普通の話なんだ、もう整理もつき覚悟もしている何でもない世間話の延長上ではないはずだ、そんな彼女に謝罪は侮辱以外の何物でもないぜ、まあクリスマスは大して気にしないとは思うが、それでもな？それならクリスマスと同じように何でもない事のように普段通り話した方がクリスマスの為になるだろうさ……まあおそらくただけだな」

そう言っただけで肩を叩いて笑いかけながら、前を歩きだした。

もちろん今の話はクリスマスに聞こえないようにサラにだけ呟いた言葉だ、サラは頭を軽く描きながら「あんたについていく事を決めたのは大当たりかもしれないね」と小さく口の中だけで呟き雫の後を追いつつ、何でもないように話を続けた。

「ん、確かに微妙に家出とは違うかね、まあどこにでも嫌な奴はいるって訳だね」

「そう言う事だな、まあ折角知り合った仲間だ俺たちに来る事があれば全力で助けるぜ、クリス意外と頑固そうだから中々助けを求めなさそうだけど、本当に駄目だと思ったときくらいは助けを求めてくれた方がこっちも嬉しいからな、一人であまり抱え込むなよ」

流石はサラ、人生経験を他の二人より長く積んでいるだけはある、ちよつとした雫のアドバイスを次の瞬間しつかりと実践しているのだから、そのサラに続くように雫もそんな事を言いながらクリスの頭を撫でていた。

クリスはどこか照れくさそうにしながらも嬉しそうに「ありがとうございます！」と俯いた、その頬は少しだけ赤くなっているように見える。

「さあて、んじゃまあ三人とも意見が一致したところで武器防具屋を探すでしょうぜ」

そう言つて雫がクリスの頭から手を離し先頭に立ち歩き始める。

少し残念そうにその手を見つめながら、しつかりと頷き雫の後に続き、サラも軽く「あいよ」と言いながら雫に続いた。

メインストリートを三人が周りを気にしながら歩いていく、武器と防具屋は何店かありはしたが、どの店もいまいちというか、雫とクリスが見てもあまり分かりはしなかったが、サラからすると粗悪品しか扱っていないような悪徳商店だったらしい。

しばらく歩き続けると、雫は何かに気を取られたかのようにある一点を見つめいきなり動きを止めた。

その一点とは薄暗い裏街道へ続く道だ。

雫は周りが何も見えていないかのようにそこだけを集中して見つめ続ける。

そんな雫を心配して、クリスが声をかけようとした時、先手を取るかのように雫が一言つぶやいた。

「こつち……」

そう言っても全く見動きはしない、出鼻を折られたクリスだが、そんな事はやはり気にしてないらしく、その雫の言葉にどういう事だろうと思いつながらその視線を追っていた。

「雫そつちは裏街道だよ、なるべく近寄らない方がいいと思うけどね」

先に雫の視線が向いてる所に気づき、そう忠告をするサラ、それでも雫はまるで聞こえてないかのように歩き始める。

「こつち……こつちに……」

少し早目の歩調で歩く雫、それをかなり驚いたようにサラとクリスは見ていたが、おいていかれそうな事に気づき慌てて追いかけた。確かに危ないところではあるものの、そこまで危惧する所でもない……とは言い切れない場所だが、それでも雫についていくと決めた二人は、後に続き、可笑しくなっている雫にもしもがないように警戒しながら歩き続ける。

十分ほど歩いた頃、目の前に木の扉が現れた。

現れたと言っても、元々この場所にあり雫達がそこにたどり着いただけなのだが。

その家は扉は木のとても古いものだが、周りのレンガみたいなものや奥に立っている大きな煙突からどうしてもそのまんまの印象は

受けられない、普通にどこか不思議な家だと誰もが思うだろう。

「……すまねえ、何でか解らないんだが、ここに来なくてはいけない気がしてな」

何なんだろうなこの不思議な感覚、何と説明していいかわからないそれは、実際本人が受けてみないと解らないものだ。

「気にすんなよ、雫が逆の立場になったら同じく行動するだろう？仲間なんだから謝るんじゃないかってお礼でもいつてほしいね」

「そうですよ！付いてきたのは私達の勝手ですし、何より私は雫さんに付いてい行きたい思ってたからついてきたんです、謝れると私も少し悲しくなってしまうので、謝らないで下さいね」

そう言って二人は笑いあう、そんな二人に少し顔を俯かせながらも小さく、聞こえるか聞こえないかの大きさでありがとうと呟いた。そんな二人を背に、その扉に向きなおった雫は、静かにコンコンと扉を叩いた。

数秒……。

「はい、どちら様かしら？」

ギィイイという音と共にその扉が開かれ、出てきたのは年老いた老女だった。

背筋は少し曲がり始め、杖がないと歩くのも大変そうな老女なのだが、どうしても見た目と同じ印象を受ける事はなかった、どこかとても生き生きとした生命力に溢れ、杖がなく、腰も曲がっていないれば老人という話が信じられないくらいだ。

その老女は雫をはじめに三人をゆっくりと見回すと、最後に雫の

腰に携えられている虹に注意がいった。

「申し訳ありません……何故か自分でも解らないのですがここに来なくてはいけない気がしまして……可笑しいですよね自分でも解ります……それでもどうしてもここに来なければ……いえ、ここに来たい、そう感じてしまいお邪魔させていただきました、失礼だろうと思います、すぐに帰りますので少しだけお邪魔させていただいてはいけませんか？」

説明と共に静かに頭を下げる雫、老女はそんな雫と腰の虹を見つめ、嬉しそうに優しく微笑んだ。

「いいえ、可笑しい事なんて何もありませんよ、七色を携えし者、どうぞお入りください私たちは貴方様をお待ちしておりました」

老女はそう言うと、家の中に三人を入れるように入口から身を引いた。

その返答に驚いたように雫は老女を見、サラとクリスは老女の発言に驚いたように雫を見る。

だが、いつまでも驚いているわけにもいかないの、まずは三人とも家の中に入ることにした。

家の中は外から見ればかなりの広さに見えたものの、そうでもなく、奥にある扉が見えるのである奥に広めのスペースが広がっているようだ。

居間の椅子に腰を下ろすと、地下に続く階段から一人の女性が昇ってきて、雫達を見回す、老女と同じように三人を見回した後雫の腰に携えられている虹を見て大きく眼を見開きとても嬉しそうに笑いながら老女のほうに走りだした。

「婆ちゃんとうとうかい！私の時に来たのかい！」

「ええそうね、間違いないと思うわよ、彼自身自分ではどうしてここに来たかを解っていないみたいで、それでもどうしてもここに赴かなければいけないと言っていましたからね、とうとう現れました……今こそ我が一族の技術をこの御方に受け取ってもらおうときです」

そんな二人の話は内緒話でもないようで、雫達にも普通に聞こえていた。

ただ、不思議そうにしているのは雫だけであり、サラとクリスは考え込むように雫をじつくりと見まわしている。

そして老女と女性と同じようにサラもクリスも雫の腰にある虹で視線が止まり、それを見つめているうちに驚きにその表情を変えていく。

「……不思議で面白い奴だと思ってたけど……雫あんたが虹を携えし者……なんだね……」

「驚きました……あの方に言われるまで全く気付きませんでした、なぜもっと早く教えていただけなかったのですか？」

二人は驚いた表情で責めるようにそう聞いてきたが、雫にとって何の話か全く解っていない、虹に話しかけてもこの家に入ってから全く反応がなくなっている。

仕方なく、サラとクリスにその話は何かと聞くと、少し気が抜けたように溜息をついた。

「ああ、本当にあんた物を知らないんだね……ってそうか、もしかしてあんた異世界から来たって言うのも本当なのかい？それなら仕方ないのもうなづけるね」

雫の知らないところでは何やら有名な話らしく、雫が異世界から来たことすら知られているらしい。

「……はあ、確かに今更誤魔化すのも面倒だし、仲間にも何時までも嘘をつき続けるのも嫌だからな、二人には言っておく、確かに俺は異世界から来たと思われる、俺の住んでいた世界に魔法なんてものもなければこんな武器と防具を必要とする場所もない、何より闇者と呼ばれるようなものは存在すらしないからな、ちなみに俺はこの世界に来てからまだ三日目だ、正直に言つとほとんど何も知らないに等しい……こんな俺でもまだ仲間として認めてくれるなら……これからもよろしく頼む」

サラの異世界発言に諦めたように雫は自分の事を話し始め、最後に少し悲しそうに二人をみて、頭を下げる。

頭の上から呆れたように溜息が洩れる、その音に頭を上げると馬鹿だなあと言った感じで二人が雫を見つめていた。

「何を今更……異世界から来た奴だろうがこの世界の奴だろうが、雫は雫で変わりないんだろが、そんな程度で見限るような人間に見えるなんて心外だね」

「全くです、私達は先程もいいましたが、自分達の意味で雫さんに付いて行くと決めたんですよ、今更異世界から来た、それだけで見限るような覚悟で付いて来たわけではありません、仲間とは……私はそう思っています」

そんな二人の言葉に雫は思わず泣きそうになった、だが今ここで泣いてしまえば色々と尊厳やら何やらが大変な事になってしまうので必死に我慢する。

我慢しながら歯を食いしばり、一言「本当にありがとう」と二人に言って、深呼吸の後思いつき二人に微笑んだ。

「ありがとう……でもそ七色を携えし者ってなんなんだ？」

「ああそうでしたね、異世界からきたのであれば知らないのも無理はありませんよね、七色を携えし者というのは、私たちの世界に伝わる御伽噺の一つで、伝説の一つでもあります、簡単に説明してしまいますね」

その前置きから、クリスの説明が始まった。

虹を携えし者というのは、この世界を救うと言われている人です。

ただ他の御伽噺や伝説と違い、その者は勇者や英雄と呼ばれる事はあまりないそうなんです、七色を携えし者は人知れずその世界の危機を救う人であり、決してそれを人々に誇張する事もなかったそうなんです、昔のその人の事なんですけどね。

この世界に亀裂が入り、ほっておけばその亀裂から世界が分断されるそれほどの危機が訪れた時異世界から七色を携えし者が現れこの世界を救うだろう。

御伽噺や伝説を知らない人でも、このワンフレーズだけは誰しも知っています、この世界で一番有名といってもいい程の御伽噺です。

詳しい話等は伝わっていませんので実際どういう事なのかは解

らないんですが、この世界に伝わっている七色を携えし者の話はこれだけですな。

クリスはその説明を終えると、一つ息をはいて解りましたか？と聞いてきた。

解りましたも何も、聞いたことは世界を救う縁の下の力持ちと言われていることしか解らなかったのだが、恐らくその説明をしていたのだらう、クリスとサラもそのことが解っているらしいので、雫も解ったと言ってうなづいた。

「私達の先祖は昔その虹を携えし者と一緒にいたことがあり、その時は色々と事情があつたので一緒にいる事ができなかったそうです、それで遙か未来、いつしかまた虹を携えし者が必ず現れる、その時の為にその人が装備できる武器や防具の技術を先祖から代代伝えられているのです、つまり私達の一族は貴方様の為にいるようなものです」

「まあ婆ちゃんはその堅苦しいこと言ってるけどさ、実際そこまで気にする事でもないよ、ただ単に他の人たちとは違う特殊な武器と防具が手に入ってラッキー位に思ってくれた方がこっちとしても気が楽だからね……」つとと、ひとまず自己紹介がまだだったね、私がダーニャ、ダーニャ「ニルベストだ、よろしくな！」

気にするなといわれても、雫の為に存在する一族だと言われ、全く気にしない事も出来る訳がない、ただ、ダーニャの気遣いを無駄にしないように、気にしないふりをして雫は自分も自己紹介を始めた。

「ああ解ったよ、俺は夜月雫だ、よろしく頼む」

「あたしはサラ、サラ＝ライカだよろしく頼むよ！」

「私はクリス＝サイラックです、よろしくお願いします」

「ああ、私はダイロウ＝ニルベストです、よろしくお願いします
すね」

雫に続きサラとクリスが挨拶をして、最後にダイロウと名乗った
老女が挨拶をした。

ダーニャは自己紹介の後、雫を立たせると防具と武器を作る為に
寸法を測り始めた、ついでにとサラとクリスの寸法も測り、よしっ
！と頷くと、駆け足で地下に下りて行った。

「あらあら、ごめんなさいね、あの娘はようやく自分の今まで
学んだ技術を存分に発揮できるという事で張り切っているみたいなの、
武器や防具は一週間くらいで出来ると思うわ、それまで申し訳
ないけど待っていてね」

「そんな！こちらこそすいません、ありがとうございます！よ
ろしく願います」

ダイロウのその言葉に慌てて雫は頭を下げる、続いて後ろからサ
ラとクリスもお願いしますと頭を下げると、ダイロウは優しく微笑
んで頷いてくれた。

「あつと！あんた達宿はどこをとってんだい？」

地下から頭だけをひょこっと出したダーニャが突然そんな事を聞

いてきた。

少し驚いたもののギルド前に宿といったらすぐに解ったと言ってまた引っ込んでしまった。

「あの娘はしばらくああなると何も聞こえなくなってしまうからね、武器や防具ができたらこちらから伝えに行きますので、それまでゆっくり休んでいてください」

ダウロウは苦笑を洩らしながらそう言った。

雫達も解りましたと答え、時間もそろそろ遅くなりかけたのもあり、一度宿に戻ることにした。

「では申し訳ありませんが、一度戻ります、何かあれば連絡ください。すぐに来ますので」

「はい、解りました、それではまたお会いしましょう」

雫達は三人頭を下げその家を後にした、宿に着くころには日が沈みかけ、暗闇が周りを埋め尽くす少し前だった。

「何だか雫と会ってからドタバタと忙しいねえ、今日もこれから食事をとったらもうかなりの時間になってしまっから、また詳しい話は明日かな」

「そうですね、私も少し驚きすぎて疲れてしまいました、出来れば明日また落ち着いてから話したいと思います」

「そうだなあ、俺のせいも多少あるし、俺もまだこっちの世界に来てからの疲れ取れてないからな、明日落ち着いてからまた話しておうぜ、今は一先ず腹減ったし飯でも食うか」

サラとクリスが頷いて宿屋隣の酒場に赴き食事をとった。

その後、あたり一面暗闇に支配された時間帯、三人は別々の自分の部屋に行き、ゆっくりと眠りに落ちた、明日こそしっかりと話し合いをしようと、それぞれ胸に刻みながら。

〈第二章ギルド〉其の三（後書き）

修正しました、中身の流れ自体はほとんど変わっていませんが、全体的に違和感があったところなどを直しているうちに、最初投降したものとかなり発言や表現が変わった場所があります。

申し訳ありません。

この度も最後まで読んでくださった方がいらっしやいましたらありがとうございます。

これからもがんばって書いていきますのでよろしく願います。
それでは失礼します。

第二章ギルド 其の四

「月夜の雫」第二章ギルド 其の四」

まだ日が昇って間もない時間、何故かふと眼が覚めたらしい、雫が身体をほぐしながらベッドから起き上がる。

まだ少し薄暗く宿の窓から見える外の風景は、この街に着いてから散々見慣れた賑やかな雰囲気など一切なく、閑散としたどこか物悲しい雰囲気醸し出していた。

軽く体をほぐし、身支度を整えた雫は静かに宿を後にし、何かに導かれるように街の外へ歩き始める。

どこか不思議な、昨日ダーニヤ達の家に向かうときと似たような感じだと、雫自身すっかりと把握しているものの、どうしてもその歩みを止める事は出来なかった。

街の外の森の中、雫がたどり着いたのは大きな古い樹の不思議な小さな家だった。

「……ここは……？」

「これは妖精の樹ですね、そしてここは恐らく妖精の森だと思われる、空間と空間を無理やり繋ぎ合せたのを感じましたので、今この場はかなり無理がかかった状態です」

雫の呟きに虹がそう答えると、雫の前の樹から小さな妖精がひらひらと雫の前に現れた。

「ようこそおいで下さいました七色を携えし者、私はこの妖精の森の長を務めます、デイグと申します、この場はその虹が言ったとおり妖精の森です、貴方をここにお呼びしたのは他でもない、これから貴方がたどる大変な道程を少しだけですが導き、時に助けになるであろう使いを共に連れて行ってもらいたく、半場無理矢理呼び出してしまいました、申し訳ございません」

其の妖精は翠色の髪をした小さな女の子……大きさは手のひらに乗るくらいの大きさだ。

デイグと名乗る妖精は、それだけ言うつと姿を消し、雫の足もとの少し大きめの花が少しずつ開いて行き、その中には小さな妖精が眠っていた。

ピンク色のウェーブのかかった腰までの髪に白いワンピースを着た可愛らしい妖精だ。

「その者がこれから貴方を導き時に助けとなる者です、今生まれたばかりの何も知らない子ですが、必ず貴方の役に立つようになります、その子も私の娘、どうぞよろしく願います」

姿は見えないが、直接頭に響く様なデイグの声、雫の視線は足もとのピンク色の髪の妖精に注がれていた。

強制的なその頼みにため息をつきながら優しくその妖精を掬いあげる。

小さく身体を震わせると、その小さな瞳を少しずつ開いて行った。瞳の色は濃い赤色……朱色と言った方がいいかもしれない綺麗な瞳。

寝ぼけたようにきよろきよろと周りを見渡し、雫と視線が合うとしばらく見つめ合っていた。

しばらくそのまましていると、妖精の視線が段々としっかりしていき、驚愕の一言が放たれた。

「お父様！」

さすがに雫も酷く驚いたようにあたりを見回し誰もいない事を確認して改めてその妖精を見ると雫を見つめながらもう一度お父様と叫んだ。

「お父様というのは……俺のことか？」

恐る恐るそう尋ねると、不思議そうに小首を傾げながら元気いっぱい答え始めた。

「うん！お父様はお父様です、よろしくお願いします！」

小さなその頭をぺこつと下げ、雫の掌の上から飛び上がる。

雫の周りを軽く飛び回ると、今度は肩の上に降り立ち、嬉しそうに雫に寄り添った。

「あゝどうして俺が君のお父様なのか……説明してもらってもいいか？」

「？お父様はお父様だからお父様なんです」

言ってる意味がよく解らないと言った感じで妖精はそう言い切り、雫は何となく刷り込みってやつか……などと考えながらそれ以上深く考えないようにした。

簡潔に言つと突っ込んでも全く意味がないようだったので諦めたのだ。

「一先ず君の名前はなんて言うんだ？これから俺と一緒に行く

「なんだろう名前くらい教えてくれ、ちなみに俺は夜月雫だ……頼むな」

「えっと……私まだ名前ありません、お父様がつけて下さるまで私には名前は与えられないんです、ですのでは是非私にも名前をもらえませんか？」

妖精は先ほどから名前を名乗らないと思っただら、名前自体がなかったようだ、その上雫が決めないといけないらしい、二度三度その事について聞いてみると、必ず雫が名づけ、それ以外の者がいくら名前をきめ呼んだとしてもそれを認識することすらできないらしい、唯一その妖精に名前を付けられるのは幸か不幸か本当に雫ただ一人だと……そう言う説明を一生懸命にしていた。

「そうだな……俺が決めていいんだ？」

「うん！お父様お願い！」

期待に胸をふくらませドキドキワクワクしている妖精を見ると、雫の身体に緊張が走る、これだけ楽しみにしているのに中途半端で適当な名前を付けるなどできない、それならばと出来る限りいい名前をつけてやりたいと思うのだが中々思い浮かばない。

虹もこの件に関しては雫自身が決めた方がいいと判断したらしく何も言ってこなかった。

もちろん、解らないようなことがあればそのつど色々と解り易く説明はしてくれている。

妖精を見つめながら名前を考えているとふっと一つ不意に口をついた名前があった。

「朱華……」

雫はそう言っていると妖精というファンタジーの生き物に漢字の名前を付けるのは場違いでへんかなあと思いへんこうしようとしたが。

「朱華……私の名前は朱華！ありがとうございますお父様！とても、とてもいい名前です朱華……朱華か……えへへ、いい名前だなあ……ありがとうございます……本当にありがとうございますお父様！」

とても嬉しそうに朱華朱華と自分自身の名前を繰り返しながら微笑む妖精に、今のなしなどという突っ込みを入れる事なんぞ出来なかった。

妖精、朱華自身がその名前を気に入ってくれているのなら、雫がそれ以上どうこう言う必要もない、嬉しそうに騒ぐ朱華を肩に乗せたまま、どこか危険な感じのするこの場所を立ち去ろうとした。

次の瞬間目の前にあった樹はなくなり、背後から雫の身長に二倍近くある巨大な熊？が襲いかかってきた。

「そんなんっ！こんな街の近くに何故デスブリンガーが！？」

虹のとても慌てたような叫び声、今までせかしたような急がせるような大声はは何度か聞いたことがあったものの、これほどまでに慌てふためいた虹の声は初めてだった。

「デスブリンガー……この熊の事だよ……強いのか？」

「……はい……雫様でも勝てるかどうか解りません、もちろん私を使って頂いた状態で尚……」

その虹の判断を聞いて雫はどことなくため息をつきながらなぜこうまで厄介事に巻き込まれるんだろうと思いつながら、目の前のデスブリンガーに注意を払いながら虹を構える。

肩の上の朱華も少しこわばった表情で雫にしがみついていた。

「……ライラとどれだけ強さが違う？」

雫にとって強いといわれるだけではどのくらいなのかが解らないので、判断の基準となるのが一度戦ったことのあるライラと比べてになる。

「ライラが十匹以上まとまって襲いかかってもデスブリンガー一匹の前では敵にもなりません、ライラの攻撃はあの毛皮を通しませんし、速さもライラの倍近くは早く動けます、何より攻撃力ですが……」

「つつつつ！？な、なるほどな！？」

『ドガアアアン！？』

虹が説明しているのを態々待つてくれるわけもなく、突然襲いかかってきたデスブリンガーの一撃をかるうじて大きく後ろに飛びのき躲す。

その攻撃はただ腕を振り上げ振り下ろす……ただそれだけの単純な攻撃だったのだが、今まで雫がたっていた地面は一メートル程の深さのクレーターが出来ている。

地面に拳を思いっきり叩きつけただけの一撃、ただそれだけで爆発でも起こしたかのように地面にクレーターが出来るのだ、どれほどまでに威力があるのかがすぐに見て取れた。

「あんなもんかすりでもしたら一発でお陀仏だよ……逃げる

か」

「無理です、今ただ目の前の敵に攻撃するだけでしたので動きませんでした、デスブリンガーから逃げられるほど早く等動ける人間はいません、囷となるべきものがいなければ逃げる事は出来ないと思います」

虹のその説明に絶望感を現したような表情でデスブリンガーを見つめる。

「風の精霊、そのお力を今こそ我に貸し与え、その風の恩栄をかの者に与えよシルフィード！」

突然の朱華の叫び、それと同時に雫の身体を一陣の風が通り抜ける、どこことなく不思議なその風は雫の身体を覆うと、すぐにかき消えた。

「お父様、今補助魔法をかけました、一応今までの倍近い速度で動けるはずです、それでも逃げる事は出来ないみたいですけど…
…私も頑張りますからお父様もがんばってください！」

真つ青な顔で、それでも諦めるようなことをせず、精一杯頑張ろうと体を震わせながら雫を励ます。

そんな朱華を流し見る雫、突然大きく息を吸い込むとさっきまでの絶望感漂う表情はもうそこに無かった、あるのは強い意志の籠った表情。

「つたく、こんなちつさな朱華がこれだけ頑張ろうとしてるんだ、俺がここで頑張らなければ情けないにもほどがあるだろう？やってやるさ虹！朱華！あいつを倒すぞ！」

「つつはい！雫様存分に我が刃をお使い下さい、どんな硬いものであるかと我が刃に切れぬ者はございません、私たちに戦いを挑んだ愚かしさをその身に刻みましょう！」

「うん！やっぱり私のお父様はかつこいいんだね！絶対絶対負けない！これからやつとお父様と旅ができるようになるんだから、この程度の奴に邪魔なんてさせない！」

朱華のその思いから、覚悟を決めた雫が叫ぶと虹と朱華がその雰囲気を一変させた。

虹は先ほどまで少しその輝きを落としていたが、今では最初に見たとき以上にその刀身が輝いて見え、明らかに先ほどまでなかった死へのプレッシャーというものを外へ放っている。

朱華は雫の肩の上にとつかりとつかまりながらもデスブリンガーから眼を離さず、がたがたとまだ震えてはいるがその瞳に宿る強い意志だけはみじんも揺るぎはしていない。

「があああああ！」

そんな雫達にデスブリンガーは物凄いスピードで迫り横殴りから盾殴り、振り降ろしから振り上げと言った様々な動作を一呼吸の間に繰り返してくる。

「つつなめるなよ！畜生！虹よ切り裂け！」

襲いかかってきたその爪と怪力によりその腕や足を振り回す攻撃を躲しながら、振りあげた瞬間の腕に虹で切りかかる、物凄い硬い感覚があったものの、しっかりとその腕を切り裂くことができた、ただダメージ事態はそれほど大きくない。

「うわっ！つとと、予想以上に早くなってるな……だが、これだけのスピードが出せれば何とかなるか？」

思いつき踏み込みながら切りかかりその勢いで距離を取ろうとした雫は、朱華の補助によってましたスピードをそこで初めて体感した、予想以上のその加速力とスピードに最初戸惑ったが目の前の敵を倒すにはこれくらいあって何とか出来るかもと言った状態だ。微妙な違和感はおも襲いかかってくるデスブリンガーの攻撃を何とか躲しながら慣れ、少しずつ、それでも確実にダメージを蓄積させていく。

「んなっ！ありかよそんなの！？」

雫の叫び、何に對してかというと最初に切りつけた腕の傷がもうすでに治りかけているのだ、自然治癒……それにしても異常なほどの回復力に思わず叫んでしまったのだ。

「そうです！この異常とまで言える自然治癒能力、それとこの身体能力、知識無き闇者で唯一レベル三十を超える本当に厄介な闇者です、少しずつダメージを与えて行ってもそのうち倒すことは出来ると思いますが、その前にこちらが倒される可能性の方が高すぎます、あれだけの治癒能力があるうと、腕一本を切り落したり、足を切り落したり等の大きな傷になれば流石に回復はできなくなります、ですので一撃一撃を致命傷レベルでの攻撃をしないと、私達の方が危なくなります！」

先ほどまでデスブリンガーの攻撃は、その両方の腕とスピードだけの攻撃だったが、躲し続ける雫達に癪癪を起こしたのか、その体全体を使ったタックルや押しつぶし、その足を使った蹴り等も攻撃

に混ぜるようになってくる。

「つつ！畜生！？なんだこの強さ！1つつこれでどうだあああ
あ！」

ボディープレスで雫をたたきつぶそうとしてきたデスブリンガー
の攻撃をギリギリで何とか躲したすきに、デスブリンガーの右腕を
切り落とす、虹の攻撃力があっても辛うじて何とか切り落とせると
言ったレベルだ。

「ぎゃがあああああああ！？」

その切り落とされた腕の痛みに叫び声を上げながら一度距離を開
けるデスブリンガー、その瞳は先ほどまでと違い真っ赤に充血し、
その息も先ほどまでより荒くなった。

そして……。

「ぐっふう！？」

今まで以上の速度での攻撃に直撃ではないが、躲しきることがで
きなかった雫は左半身をその爪で切り裂かれ吹き飛ばされた。

爪で切り裂かれた半身は血にまみれ、早く治療を行わなければ命
にかかわる程、危険な傷、その上その怪力から繰り出された攻撃に
より肋骨も何本か俺左腕は恐らく罅でも入ったのだろっ、動きはす
るものの動かすたびに変な音と痛みが走る。

「ごふう！つつ……かすった……だけで……このダメージ……
ありえねえ……」

血を吐きながらろっつじて樹の蔭に一度身を隠し立ち上がる。

「水の精霊！お願いお父様を癒して！ヒーリング！」

朱華のその詠唱と呼べるか呼べないかの悲痛な叫び、それでも水の精霊は応えてくれ、雫のその爪によるだ傷をふさいでくれる、傷自体はふさがったものの、完璧にはない、あくまで応急処置のレベル、ただ血が止まっただけでもかなり助かった。

折れたはずの肋骨も辛うじてつながったらしく、体力も多少戻ってきた、まだ何とか動けるといった感じにまで回復すると樹の後ろからは荒い息のデスブリンガーが雫を探してあたりの樹を軒並みなぎ倒しながら雫達の方へ向かってくる。

「やべえなあ……俺はあいつに未だまともなのは一撃だけ、こつちも一撃だけがダメージ量が違い過ぎる、せめて腕じゃなく足を切り落とせばまた違ったんだろうな」

「雫様……我が力が及ばないばかりに申し訳ございません」

「お父様……」

雫のその呟きに虹はとても悔しそうに、朱華はしゅんとして落ち込んでしまった。

「おいおい！お前らもしかしてもう諦めたとかじゃねえよな！朱華！散々人に頑張つてとか言っておいてその程度で諦めたりするのは許さねえぜ！虹！何が力及ばないだ、及んだから腕を切り落とせるんだろう？足りないのは俺の技術だ、ならその技術今この場で身につけるだけだろう、そうしなきゃ死ぬしな！俺はまだ諦めない、ってよりも諦めるなんてことは死ぬその間際まで絶対しねえぞ、だから俺についてくるって決めたお前たちにも諦めるのは緩さねえ

！しっかりついて来いよ！」

そう言っただけはその樹の蔭から飛び出し、デスプリンガーがこちらに気づく前に肉薄し今までで最高の一撃の元その左足を切り裂いた。

「ぐううううがああああああ！？」

ドスン！と倒れこむデスプリンガー、これで機動力の大半を奪う事に成功した零は一度また距離をとり、荒くなつた息を整える。

機動力の大半を失つたとはいえ相手は野生での生活を繰り広げた闇者、その左腕と右足のいでたちで器用に動きまわる。

「……零様……申し訳ありません！零様のその気持ち我が刀身による攻撃力に変えお応えして見せます！」

「大地を守りし地の精霊、いま一度の時そのお力を下のものに与え、かの者の動きを助けよ！アースコート！お父様ごめんなさい！私も絶対諦めたりしません！」

虹はその言葉に間違いないほど、先ほどまで以上の切れ味を持つて応え、朱華もさつきまで震えていた身体の震えがとまり、キツとデスプリンガーを睨みつける。

「今この戦闘の間だけです、お父様が負つた身体の傷を地の精霊が肩代わりしてくれます、そして少しですが防御力も上がっています……けどこの補助魔法の時間はせいぜい五分が精いっぱいです！そうそうに決着をつけて下さい！」

朱華がそう叫ぶのを聞きながら零は先ほどまで防戦一方だったの

を今度は雫達から積極的に攻撃を繰り広げて行く。

向かってきた雫達にその充血した瞳を向け、その足と腕を使い無茶苦茶に攻撃をしてくる。

周りの樹をその腕でなぎ倒しその樹が雫達に襲いかかるが、その樹を死角に旨く使いながら切りかかっていく。

繰り広げられる攻防、デスブリンガーの爪が雫の体のあちこちを切り裂くがどれも致命傷には至らない傷、流れ出る血の量が危ないが今はそれらを無視してひたすら攻撃を繰り広げる。

むやみやたらに振り回すだけではデスブリンガーを切り裂く攻撃を放てない、そう解った雫は唯一前にしばらく習っていた剣術の基本ともいえる集中とゆるぎない振りによる攻撃方法を思い出し切り裂いて行く。

先に切る場面を思い浮かべ、その想像に違いがないように、全くの軌跡にズレなく綺麗な一閃を描くように振り抜いて行く。

未だ完璧には程遠いその攻撃方法だが、それでも最初むやみやたらに振り回し攻撃していた時とは全然違う切れ味とダメージを持つて応えてくれる。

「うつく！だあああああ！」

気合い一閃、デスブリンガーの動きが止まった一瞬で残っていた左腕を切り落とす、これでは無力化したデスブリンガー、今だ足が一本残っているものの、先ほどの戦闘で流れ出た血の量が致死量を超えている、その動きは最初から比べると見る影もなく衰えている。

普通の人間の歩くスピードよりものろのろと、それでも尚雫達に攻撃を仕掛けてくる、本能による物か条件反射によるものかわからないが、そのデスブリンガーに雫がとどめの一撃を放つ。

「これで……最後だっ！眠れ！」

雫の一撃はデスブリンガーの首を切り落とした、その瞬間鈍く動き続けていたその体が生命活動を停止させ、全く動かなくなる。

「……終わった……」

その言葉とともにどさつと倒れこむ雫、傍らで雫と朱華が何やら騒いでいるが、何を言っているかが全く聞こえない。

そのまま雫の意識は闇に落ちた。

「朱華！すぐそこの街のギルド前の宿に雫様の仲間がいます！赤い髪の女性と金髪の女性、サラとクリスという女性達です、呼んでください！」

「お父様！お父様しつかりしてください！」

「朱華！雫様を助けたいのは私も同じです！早く！本当に手遅れになる前にお願いですから急いでください！」

虹の必死の訴えに、泣き叫んでいた朱華は、一つ頷き街に飛び去って行く、一瞬で見えなくなるそのスピードは先ほどまで動いていたデスブリンガーの速度を遙かに超えていた。

「雫様……申し訳ございません、お守りすると申し上げたというのに……このような状態に……私にもっと力があれば……」

悔しそうにそう呟く虹、街の方からはとても急いで走ってくる二人の女性と、それを先導する朱華が見える。

虹は血のり一つ付いていないその刀身を輝かせながら自分自身が

自分ひと振りでは身動き一つ取れない事実は今初めて悔しいと思った。

雫を助けるために仲間を呼びに行ける朱華、それに軽い嫉妬をするほどに自らの動けない状態に文句と呪の言葉を投げかけたくなくってくる。

ただそんな事をしても無意味だと解っている、それでも尚そうせずにいらなかった。

朱華が呼んできた二人は雫の傷を見ると物凄く必死な表情で状態を見、クリスが治癒魔法をかけている間に、サラがデスブリンガーを倒した証であるその頭と爪をはぎ取っていく。

雫が倒したそいつを、雫が命がけで倒したそいつの存在を無駄にしない為に、サラは今のこの状態で出来る限りのことをしていく。

そんな二人を見つめ、虹は尚自分自身の役立たずさを呪った。

クリスが応急処置を終えると、サラはその首と爪をクリスに預け、雫と虹を背負い街に向って駆けだした。

虹はいつまでも……その雫の手の中で呪いの言葉を吐き続けている。

〈第二章ギルド〉其の四（後書き）

第二章其の四完了です。

主人公死にかけです、でも死にません。

この度も最後まで呼んでくださりありがとうございます。

これからも書き続けていきますので、ぜひよろしくお願いします。
それでは失礼します。

第二章ギルド　其の五

「月夜の雫　第二章ギルド　其の五」

「……こ、こは……宿屋？」

雫が目を覚まして最初に見えたのは煤汚れた元は白かったであろう天井、その天井は雫が止まっている宿の天井と似ている。

体を動かそうとするが全く動かない身体、どういふことを考えているうちに段々と先程までデスプリンガーと戦い、倒した瞬間力尽きたのを思い出した。

「つつつ！？ぐふう！」

先程までの事を思い出すと同時に思いっきり起きる為とび跳ねようとした瞬間、あまりの激痛に思わず叫び声が出た。

その声を聞き取ったらしく、扉の外からドタバタと慌てたような足音が二つ聞こえてくる。

「お父様！眼が覚めたんですね！」

「雫様……御無事で何よりです……申し訳有りませんでした……」

……」

叫び声に反応したのは部屋の外の二人だけではなく、枕元にいた朱華は飛び上がり雫の目の前に、虹はベッド脇のサイドテーブルの

上から声を上げた。

朱華は本当にうれしそうにぱたと雫の顔の上を飛び回り、虹はとても暗く沈んだ声のトーンで謝る。

「……虹？どうしたんだ……ってか何でお前が謝るのよ？」

雫はどういう状態になったのか！と叫びたかったが、あまりにも虹のその声におかしさを感じぐつとその質問を飲み込み、虹に声をかける。

「……雫様を守るなどと……言っておきながらこの始末……本当に申し訳ありません」

「んだよ、吃驚した……お前さんどこか調子悪いとか思っただろうが心配せんや！にしても何だ？んな事で落ち込んでんのかよ、虹お前さんはきちんと俺を守ってくれたし、力を与えてくれただろうが、それで落ち込まれた日にはその力を借りてあんなざまになった俺の立つ瀬がねえだろうが、ほれ！さつさと調子戻せや！んな事何時までも気にしてんなら俺も本気で怒るぜ！」

虹の発言にからからとほつとしたように笑い、そう言い切った雫は朱華に手を伸ばそうとするがやはり動かずその後苦笑を洩らした。

「雫！起きたのかい！……良かったよ何とか息を吹き返したみたいだね」

「雫さん！本当に良かった……一時心臓が止まった時はどうしようかと思いました」

「……は？」

サラの息を吹き返したという発言では？と疑問に思っていたところ、クリスの心臓停止の発言で何を言ってるのかわからなくなつた雫は、思わず口をぽかーんと開けて不思議そうというよりも間抜けな表情で二人を見た。

何とかその言葉を理解しようと四苦八苦するが、どうにもこうにも思考がまとまらず、黙りこくってるうちにクリスがさっきまでの雫の状態を説明し始めた。

「雫さん外の森で血まみれになつて倒れてるところを私とサラさんで発見してこの宿まで運んだんです、発見したといつてもそこにいる朱華さんが呼びに来てくれたから解つたことなんですけど……それで駆け付けた時にはもうすでに瀕死の状態でして、ろっ骨は折れてますし、腕も折れ、出血多量の状態でしてこの宿に運び込んだとき一度心臓が止まってしまったんですよ、サラさんが教会のほうに高位の司祭様を呼びに行ってくれていたので、ぎりぎりで間に合い今に至つたんです、司祭様の話ではもう駄目だと言われていたので回復したことがもう……嬉しくてうれしくて……」

早口で捲くし立てるように一気に説明するクリス、その瞳には僅かに透明な液体をにじませていた。

隣のサラも涙までは見せてはいないが、とても安心したように力が抜けた笑みを浮かべていた。

「……まじで？俺そんなに危険な状態を旅してたわけかよ……俺すげえ……ってか俺よく頑張つた！良く生き返つた！ありがとう俺！そしてクリス、サラそれに朱華と虹もありがとな……マジでお前さん達いなかったら俺死んでたわけだろう？」

雫はクリスの説明を聞いて何とか理解し、自分自身を慰めるよう

に無意味なハイテンションで誉めたたえ、茫然としてるサラ達に突然そんな事を言った。

あまりにも突然のテンションと話の変更の仕方によりついていけなかったクリスとサラは反応が遅れ、朱華は雫に抱きついて嬉しうに眼を細めている。

少しして我に返ったように、クリスとサラは気にしないで言いながら笑い出した。

「そんな死にそんな状態になってもかわないねえ」まあそれくらいじゃないと我等がリーダーは任せられないか！」

「雫さん本当に面白い方ですね、ご自身が其れほどまで死にそうな怪我をしてるというのに」

そんな事を言いながら笑う二人に、雫はふつと気づいたことがあった。

「あ、そっぴやさ司祭様だったの呼んだんだろう？もちろん無料じゃねえよ……金どうしたんだ？」

雫がそう尋ねるとサラがニマ―としながらとある鉄のようなそうでないようなカードを取り出した。

「これで払つといたよ、さすがに司祭様クラスになるとかなりの高額になるからね私たちはそんな大金持ち合わせていなかったと……でも雫あんたは持っていたからねそこから引かせてもらったよ、まああんたの命の為なんだかまわないだろう？」

「それはいいけどよ、何そのカード？」

雫が不思議そうに見ていると、サラは一瞬不思議そうな顔をした後にああそうかなどと呟きながら納得した感じでうなづいた。

「そうだったね、雫はこっちの世界の事まだあんまり知らないんだっけ、これはギルドが発行してるカードでね、ギルドにお金を預けてこのカードを差し出すと預けたお金を引き出せるようになるカードだよ、まあこんなカード私も初めてみたんだけどさ」

「あつ、補足なんですけど、このカードが支給される冒険者はほとんどいません、何せ十万シルを超える金額で持ち運びができない人専用に発行される物なので……」

サラの説明で全くどうして雫がそれを持っているのが解らず、クリスの説明で尚混乱し始める。

「んで……俺全然意味がわからねえんだが……そのカードが俺のってどういうことよ？」

いくら考えても解らなかつたので仕方なく白旗を揚げ二人に聞きなおすと嬉しそうな意地悪そうな顔でこちらを見つめながら話し始めた。

「はっはっは、ごめんごめん、少しあまりにもふざけた感じだったからさ、少し意地悪しちまつたね、雫あんたデスブリンガー倒したじゃないか、あいつは身体全体が売り物になるうえ一つ一つの金額が半端ない高価なものなんだ、その上偶然にもギルドの依頼の一つにデスブリンガーの始末依頼が貼ってあつてね、その報奨金と合わせると……」

「何と五十六万シルという大金になったんです！一応六万シル

だけ雫さんのお財布に入れておきまして、十万シルが司祭様に支払った金額なので、残り四十万シル程カードの中に残っています」

余りにも金額の大きさについていけない雫、少しずつ一シルが日本円に換算すると計算していくと段々その金額の凄さに気が付き噓だろう！？みたいな表情で二人を見つめる。

いくらそんな感じで見つめても二人は冗談を言ってる様子が全くないので事実らしい。

突然の出来事に茫然とする。

ちなみに日本円にすると一シルが五千円くらいになる。

シルが一番大きな金額の単位でその一つ下がゼル、もう一つ下がダルと言った形になる。

ゼルが大体五百円程、ダルが五十円程の価値の銀貨だ。

それを含め考えると四十万シルという金額は……二十億……思わず雫が「はっ？」と思ってしまうのも無理はないだろう。

「あーあまりにも途方もない金額だったから良く価値が理解できなかったが……ようやく解った……にしてもあまりにも可笑しい金額じゃねえのかそれ？」

「……はあ……これだから、デスプリンガーがどれだけ危険な奴かあんたは理解してないようだね……ちなみにあいつをソロで倒せるのはSSクラスじゃないとたぶん無理だよ、あんたみたいにぎりぎり命と引き換えにつてんならSクラスで……多分無理だろうなそれだけの奴を倒したんだこれくらいの金額になってもおかしくない……とはいえ半分は報奨金何だけどな、一応これはギルドからの依頼で偶然さまよいこんだデスプリンガーの始末依頼をギルドが二十万シルで出してたんだよ、まあその金額を見るだけでもどれだけデスプリンガーが強いかってのがうかがい知れるってもんだろう？何せAクラスが十人以上のパーティーで行っても確実に倒せるって

わけじゃないんだからねえ」

雫のそんな発言にサラが溜息交じりにそう説明した。

つまるところ実力だけを見れば雫はSクラス以上で下手なSSクラス並みだと言われているようなものだ。

そんな事をぼうつとしながら考えているとクリスが追加情報を加えてきた。

「ああそうです！そして団、月夜の雫のクラスがCに上がりました！明日カールドルがこの宿に届けられることになってます！雫さんがどうしても欲しいって言ってたものですので良かったですね！」

嬉しそうにそう言いながら微笑む。

見ている人間が誰しも見惚れてしまうほど可愛い笑みを浮かべながら、クリスは雫のベッド脇に腰を下ろし神聖魔法を唱え始めた。

「そうそう、雫あんたクリスに感謝しなさいよ、この子ったら自分自身かなり無理して神聖魔法使い続けたせいで、今さっきまで寝てたんだから、まあ気持は解らないでもないから、謝るんじゃないきちんと感謝しなよ！」

サラはまたも神聖魔法を使い始めたクリスを優しい視線で見ながら雫にそう言うってくる。

静かに頷きを持って答えた雫はクリスを見つめる。

クリスはサラのその説明に少し恥ずかしそうにうつむきながらも神聖魔法を使い続けるのをやめない、その頬は少し赤く染まっていた。

「クリスありがとう……君のおかげで助かった、本当にありが

とう……サラ教えてくれてサンキューな」

サラは軽く手を振り気にするなと言った感じで答え、クリスはなおさら頬を真っ赤に染めあげ「と、とんでもないです……」と掠れたように呟いた。

朱華はいつの間にか雫の枕元で小さな寝息を立てながら眠りに落ちており、虹はさっきまでの物凄く暗い雰囲気が多少やわらかくなっている、完璧に立ち直った訳ではないが、先程までと比べると全然ましだという事で雫は一先ず良しとした。

「つつすまねえ、ちいっとそろそろ限界っぽいな、すまねえ……ね、る……は………」

突然視界が一瞬暗くなったと思ったら眠気が雫を襲い、それを我慢することができなかった。

かろうじてそれだけを言っ、雫は闇に落ちた。

「お休みなさい雫さん、ゆっくり休んで……早く良くなってくださいね」

「全くだよ、あんたとの冒険楽しみにしてんだからね、早く元気になるよ！」

サラとクリスはそう言っ、やさしく眠りに落ちた雫を見つめる。

二人とも自分達のリーダーがとも変わっている事は初めから理解していた、ただこれほどまで無茶苦茶な人間だとは思ってもいなかったし、異世界から来たとも全く予想すらしていなかった、それでも……雫という人間は全く変わらない、二人が考えていたよりも凄い人間だったというだけで、その心意気や性格が変わったわけではない、それをしっかりと理解してこれからも自分達をもっと頑張

って雫と共に歩いて行こう……そう新たに決意していた。

そして二人は静かに雫の部屋を後にした。

雫が目覚めたのはそれから三日後の朝だった。

「ん〜良い朝だな！身体の調子もまだ全然だが、多少動けるようになったし少し散歩でも行くか！」

朝早くに眼が覚めると、まずはじめに虹に最初倒れた時からどれだけ時間がたっているかを聞いた。

「はい、雫様が倒れられてから初めて眼を覚ますまで二日、それから三日たっていますので今日で五日目になります」

という説明を聞いて流石に寝過ぎだろう俺！とか叫びながら晴れ渡った街を見下ろし散歩に行こうと独り言をもらしたのだ。

ただこの部屋にはもう一人……一匹？いるのを忘れており、それを聞いたそいつが私も行きます！と大声で騒ぎ始めた。

「お父様！おいて行くななんて酷い事しないですよね？」

キラキラと好奇心に充ち溢れるその瞳は断られてもついて行くと物語っている、溜息を一つ付いて「はあ解った解った」と朱華をその肩に乗せ宿を後にする。

朝あまりにも早い時間の為サラとクリスはまだ起きていないらしい、宿屋の女将さんは朝食の下準備のためかもうすでに起きており、雫を見た瞬間「あんたもう大丈夫なのかい！」と心配そうにそして嬉しそうに言ってきた。

その女将さんの言葉が殆ど他人でしかない人間に対してこういう言葉を投げかけてくれる人がいると解つてとても嬉しくなり、いい

気分で散歩に出かけた。

もちろん虹を腰にぶら下げ、ブローチ形のカラードル（カラドアより一回り小さい）を胸につけている。

流石にこんなに早い時間にやってる店もなく、門を開けていたギルドに入ることにした。

実際雫は初めてここに来たとき以来ギルドに来ていない事に気付いたためでもある。

ギルドに入ると雫に気付いた受付の女性（雫の登録を受け持った女性）が驚いた表情でまたもや「ギルド長！」と叫び声を上げながらその席を立ちあがる。

何だか忙しい人だなあと雫は思いながらギルド掲示板に目を通していく。

いろいろと依頼があるが、今はまだ傷を治すことに専念しないと駄目だし、何より武器防具がまともに出来上がるまで動きまわる気もなかった。

ただ単に気まぐれに好奇心に誘われ見て回っていただけだった。しばらくそう暇をつぶしていると、受付の女性が何やら真っ白な鬚を携えた初老の男性を連れて雫の元にやってきた。

「月夜の雫のマスター、雫様で間違いございませんか？」

「ええ……あなたは？」

「ああこれは大変失礼しました、私この街のギルドを与らせていただいていますデニス〃ロゼと申します、この娘はラリア〃ロゼ……恥ずかしながら私の不肖の娘です」

「初めましてじゃないですけど、お久しぶりです！ 凄いですね登録してまだ一週間もたっていないのにクラスAになるなんて……私初めて見ました！」

やってきたのはギルドの長、そしてその長の娘である受付嬢、デニスはどこか何を考えているのかわからない微笑みを浮かべ、リアアに関しては感心しきった尊敬の眼差しを向けてくる、さすがにそれに恥ずかしさを覚えた雫はリアアから視線を外しデニスに用件を聞き始めた。

「それで……俺に何のようです？」

「それなんです、雫様お仲間の方からお聞きされたと思いますが当ギルドにて多額のお金をお預かりしておりますという確認とこちらが本題なのですが団を作りあげCランク以上になった団には団員達の暮らす家をギルドの方で紹介できるようになっているんです、ただこれを紹介できるのが団のマスターにのみになりますので、失礼ながら話しかけさせて頂きました」

家という言葉に心を惹かれ雫はデニスに真剣な視線を投げかける。それに気づいたデニスは変わらぬ微笑みを浮かべながら「こちらへどうぞ」とカウンターの横にある扉を開け中へ誘導する。

扉の中は雫が止まっている宿屋の二倍はありそうなスペースに会議室で使うような机が何個かと少し大きめの図書ダンスが三つおいであつた。

「一先ずおかけ下さい、リアア飲み物を！雫様こちらが今ご紹介させていただける物件です」

そう一冊の薄いノートを差し出してきた。

そのノートを開くと中には一ページに一つ家の紹介が図解と共に載っていた、親切に広さや欠点、いい点など全て記入されている。

ペラペラとページをめくっていくが、どれもかなりの大きさの家

で一番安い家でも一万シル程の値段である、虹が言っていた町はずれの小さな家とは比べ物にならない家だというのがそれではつきりとわかる。

一ページ一ページしつかりと見ていくと、最後まで読み終わってしまった。

見ていた物件は一番高いもので五万シルという値段であり、広さは雫が泊まっている宿屋の三倍近い大きさを屋敷と呼んでもおかしくない代物だった。

ちなみに宿屋の大きさは広さだけを見ると畳百畳分ほど、かなり大きな宿屋なのだ、その二階建になっていて一階が受付と朝食をとる広場、二階が部屋になっている、ひと部屋十畳くらいなので九つの部屋が置かれている。

全てを見終わりに入った物件がなかった雫はため息をついてそのノートを返す、「そうですか」と残念そうにつぶやいてそのノートをしまい込んでいるとラリアが戻ってきてお茶に似た飲み物を出してくれた。

ついでに嬉しい情報まで運んできてくれた。

「ギルド長、雫様にであればあちらのノートをお見せしても問題ないではありませんか？確かにあちらはクラスS以上の方専用ですが、金額面と能力面、そしてギルドへの貢献度から雫様にであればお見せしても問題はないかと思われませんが……」

ラリアのその発言を聞くとこれの上位物件があるらしい、ただしそれらはかなり高価な代物らしく通常クラスS以上ではないと見れない……。

そのラリアの言葉に考えながら一冊のノートを運んでくるデニス。

「確かに……御一人でデスブリンガーを倒せるだけの力を持っているのであれば、こちらをお見せしても問題はないでしょうね……」

… 申し訳ありません」

「気にしないでください、確かに俺自身どこまで実力で運がが解らないんですから、何よりもともとそれはルールなんですよ？それじゃ仕方ないじゃないですか」

雫はそう言つて笑うと、デニスは少しほっとしたようにいつもと同じ微笑みを浮かべ雫に一冊のノートを差し出してきた。

そのノートは先ほどまでと同じだが、物件の広さ高さが先ほどまでとは全然違つた。

一番安い物件で五万シル、一番高いものに至つては四十二万シルという金額だつた。

一ページ一ページずつ確実に読み進めて行くと一つ気にある物件があつた、一応最後まで目を通して見たがそれ以上に気になる物件はなかつた。

そのノートに乗っている物件の中で一番大きな物件であり、小さなお城並の大きさの家だ。

ちなみにその建物は宿屋から見るとギルドの後ろの方に見えるあの大きなお城と思つてた屋敷だという事を説明してもらい、その資料を改めて見直し始めた。

「場所は解つたと広さが…… 五千フォール…… 五千坪位か…… 本気で広いな…… その上図解を見ると部屋数も多く地下室、鍛冶場、食堂から必要かどうか分からないものまで全部揃っている…… 何より建物だけで五千坪、庭だけでも百坪ほどあるってんだから異常だよな…… んでもつて…… ああ！これ五階建なのか…… つまり床の面積だけを見て五千坪、単純計算では割り出せんだろうが五階建という事は異常なまでの広さだな、こんな物件がこんな安いとは……」

そこに書かれた金額は十万シル…… 何かいわくありげだというの

は明らかだったが、その中身の図解に心ひかれ、その大きさと所有施設、後は立地条件が気に入ったため購入を決めた。

「すいません、この物件なんですが……」

「ああやはりそちらを……本当によろしいのですか？」

予想どおりいわくありの物件らしい、先ほどまで変わらぬ微笑みを浮かべていたギルド長が少し渋い顔をしながらもう一度確認してくる。

「そうですね……一度見せていただくことはできますか？」

「ええかまいませんよ、こちらがその物件の鍵になりますので、場所は解りますか？」

「はい大丈夫です、勝手に入っても？」

「大丈夫です、ただし何が起ころうとギルドでの責任は持てませんので行かれるのであればそれ相応の覚悟をお持ち下さい」

ギルド長が最後のその言葉を投げかけるときの表情は真剣そのもの、何やら本気で危ない物件らしい、雫はそんな事を聞きながらあるうことが「楽しみだ！」と言いながらその物件に向って歩き出した。

朝早い今の時間、未だ周りにちらほらとしか人の姿が見えないその道を歩き、少し細い道を進むと五分もしない内にそこに着いた。

「……目の前で見ると本気で城だよなあ……俺初めてみたぞ……」

あまりの大きさに茫然と見上げる雫。

それも仕方のない事だろう、屋敷と呼ばれているものの、大きさは本当に小さな城くらいあるのだから、それも五階建で中央は三階、サイドに少し大きめの塔が建っており、そちらが五階建になっている、ちなみにその塔と中央の家はもちろんつながっている。

「さて……何時までもつつ立てても仕方ねえしいくかね」

そう言つて鍵穴に鍵を差し込むと……。

「お帰りなさいませご主人様！」

と半透明のメイドっぽい者がいきなり挨拶をしてきた。

流石に雫も驚いたようでビクツと背を伸ばし、その声を発した人物？をみる。

足はある、ただすけて見える、体がある、ただすけて見える、顔も手もある、やっぱりただすけて見える……。

一人冷静に……見える者の混乱の極みの中状況を分析していくと、一つの答えが導きだされた。

「おお！幽霊！」

「違います！あくまで私はこの屋敷の守護精霊です、確かに見る人皆幽霊やらお化けやら拳句の果てには化け物とまで呼んでさつさと逃げ出してしまうですけどれっきとした生き物……とは呼べませんけど意志もありますし言葉だつて通じるんですよ」

少し愚痴っぽい反論を聞きながら雫は内心ガッツポーズをとっていた。

（きたこれ！予想通りの結果だぜ！むしろ予想通り過ぎて怖すぎるくらいだ！幽霊のメイドがいたら面白いと思ってらマジでいやがった……俺ってラッキーだな！）

常識人なら通常怯え、即座に逃げだし、度胸のある奴ならば戦いを挑むかもしれないが、雫のように可笑しな思考を抱えて喜びに打ちひしがれるような奴はいないだろう。

何より、雫はこういったことを期待してこの物件を選んだようだが、もの好きというかなんというかよく解らない人間である。

「なるほどな、お前がこの屋敷があんなに安かったら理由が……にしてもお前だけなの？」

ふつと疑問に思ったことだった、確かにこの幽霊一人でも十分な脅威ではあるが、それにしてもそれだけでこの物件があそこまで安くなるとは思えないのだった。

「いえ、もちろんこの屋敷を問題なく機能させるだけの人員？この場合精霊員っていうんですかね？はいますよ、私はメイド長のファリス申します、この屋敷の精霊の長でもあります以後よろしく願います」

簡単にさらつと多数いますよ～みたいな事を言い出したファリス、完璧に物件が安かった理由を把握し、尚好都合じゃねえか！と喜び勇み購入を心の中で決めていた。

「おう、よろしくな多分今日か明日からこの家に来る事になるとおもうぜ、俺は夜月雫だ、よろしくな」

「はいよろしくお願いいたします雫様、我ら一同この日を心よりお待ち申し上げておりました、存分にこの屋敷をお使い下さい」

恭しく頭を下げるファリス、それに向って「サンキューな」と軽い挨拶を返し、ギルドへ向かって戻り始めた。

もちろんこの物件を購入するためにだ、なぜ他の人はこんな恵まれすぎたような物件に手を出さないのか本気で不思議がりながら雫は足早にギルドに向かう。

ちなみに誰も手を出さないのは、一人？であれば何とか我慢できる人もいるであろうがそれが多数いれば流石に気味が悪いうえ、何が起こるかわからない恐怖で気が気じやなくなるという理由だろう。足早にギルドへ戻るとギルド長に購入する旨を伝え、思いつきり驚かれながらも、どこか感謝するような眼差しで一枚の書類と、先ほど雫に渡した鍵と同じ鍵をもう一つ手渡してきた。

書類に虹の助けを得ながら記入をしていき、問題なく全て書き終えるとそれで購入完了だった。

料金はカードのほうから自動引き下ろしになるということだ。

「いい物件紹介してくれてありがとうございます」

雫がそう言うのとギルド長は少し迷った後、少し待つようにいい、奥の部屋に歩いて行った。

その後五分ほどその場に待っていると不思議な雰囲気を感じ出す同じ形同じデザインの黒と白の少し大きめの袋を携えて戻ってきた。

「これはあの屋敷に保管されていましたがアーティファクトです、この黒い袋に入れたものを白い袋へ、白い袋へ入れたものを黒い袋へ移動させる事が出来る、特別なアイテムです、これがあれば冒険途中持ち出すことのできないアイテム等がありまして、この袋で屋敷に送ることが可能となります、元々あの屋敷の主が持つべきも

のの筈ですので、こちらもどうぞお受け取り下さい」

そう言つて二つの袋を受け取る雫、大きさは雫の身体上半身が丸丸入るくらい大きさであるが、重さが感じられず、折りたたみもできるようでそれを折りたたむと少し厚みが出たが拳二個分ほどの大きさまで縮んだ。

それをありがたく受け取りながら、一言「ありがとうございます」
た」と言つて宿屋に戻っていく。

仲間二人の反応を楽しみに思いながら一人にやにやと宿屋への道を歩くその姿は明らかに異常者のそれだった。

警備兵に呼び出されしばらく拘留されたのも仕方のない事だろう。

「んな仕方ない事あるか!？」

〈第二章ギルド〉其の五（後書き）

第二章終了です。

次回から第三章に入ります、そろそろギルド込みの動きを入れていきます。

この度も最後まで読んでくれた方々ありがとうございます。

これからも遅くなるとは思いますが書いていきたいと思しますのでよろしく願います。

それでは失礼します。

第三章活動開始！其の一

「月夜の雫」第三章活動開始！其の一」

「あつはっはっはっはっ！？流石我等がリーダーだけあるね！
怪我も治りきらない内に朝一番の挨拶が鉄格子を挟んでなんて」

思いつきり笑いながら……腹を抱えて笑いながらサラは涙すらその瞳に携えている。

その隣のクリスも何と言っているものやらと言った感じで苦笑を洩らしつつも心優しい言葉を投げかけてくれた。

「雫さん本当ですよ、怪我だってまだ治ってないんですから無暗に出歩いたりしちゃだめですよ、それにしても普通の人なら後二、三ヶ月は全く動けないはずなんですけど、やっぱり凄いですね……それでも本当に気をつけて下さいよ！起こしに行ったら居なくて本当に驚いたんですからね……心配させないでください」

「ああ、すまねえな、ありがとうクリス、んでもってサラ手前え笑い過ぎだ！俺は何も悪くねえのにこの街の警備兵とやらが勝手に勘違いして連れてきやがったんだからな！」

雫はそう言うサラは尚も勘弁してくれと言った感じで笑いを強くしてとうとう涙を流しながら笑いだした。

クリスも本当に全くと云った感じで困ったように苦笑しつつも警備兵にきちんと話を通し雫が解放されるように手まわしをした。

サラは結局雫がその檻から出るまでずっと笑いつぱなしでようやく笑いが納まったのは痛くなった頬とのど、そして腹が限界に近づいてからだった。

「ふう……… たくよお善良な一般市民……… つてわけでもねえが無害な冒険者捕まえていきなり牢屋つてのはいかがなもんよ！」

クリスはまあまあとたしなめながら理由を訪ねてくる。

「それで、どうして雫さんは捕まっていたんですか？警備兵の方から聞いた話によると何やらえっと………」

「にやにやと犯罪者面でミイラみたいなやつが徘徊してたって聞いたよ、本当にそんな怪我で動き回るうえ、どんな顔してたかわからないけどね、捕まっちゃったのはそれなりに緩んだ表情だったんだろう？ いったいどうしたってんだい？」

クリスが言いにくそうにしていたことをサラがさらっと（洒落じやないですよ？）言いきって理由をクリスから引き継いで聞いている。

サラのその質問にうんうんとうなづきながら不思議そうにこちらを見ているクリス。

そんな姿だけを見ると小動物みたいに見えるなあと思いつながら理由をはな……… そうとしてやめた。

「いやたださ……… つとと、今は秘密だ！ そうだ二人は宿屋に何か荷物おいてきてんのか？」

「全部引き払ってきたさ、今日までの予定で宿泊してたからね、

また行く事も出来るけど……それがどうしたんだい？」

「ちなみに、雫さんの荷物も全部持ってきてありますから大丈夫ですよ」

サラは不思議そうに、クリスはにっこりと可愛い笑顔を浮かべながら雫の荷物をひょいっと持ち上げる。

といっても雫の荷物なんて持ってきた財布とギルドでもらった力ラドル、置いていったのはというよりも忘れて行ったのは財布だけだ、カードだけは物珍しげにいじっていたのでポケットに入っていたから何とか買物物ができたのだ。

「ふむ、ナイスだ二人とも！クリスはサンキューな俺すっかり置いたこと自体忘れてたから下手したらそのまんまになっちゃうところだった、んじゃまあこれから行きますか！」

雫は二人にお礼をいって、そのままずんずんとあの屋敷に向って歩き出す。

勝手を知ってるのは雫のみ、他の二人は不思議そうな少しワクワクしたような感じで付いてくる。

ついてくるのを一度確認すると、後ろから「教えろ！」という文句を言ってくる二人を全く無視しながら歩き続ける。

詰め所からギルドまでは歩いて五分もかからない距離で、ギルドから屋敷までも歩いて五分かからない距離すぐに目的地に着いた。

「わあ……御城……やっぱり御城になると私の屋敷よりも大きいですねえ、一度でいいからこういう御城に住んでみたいんですよ！でも私の家もそれなりにですからなかなか……」

「……ここがどうしたんだい？誰か知り合いでも出来て紹介す

るって事……かい？」

クリスは素直に感激したように「御城」とその屋敷を表現して夢を語りながら少し落ち込み、サラは誰か知人の紹介かあと言った感じで雫に視線を向けてくる。

「そうかそうか！クリスは城に住むのが夢なのか、でもすまねえなこれただの屋敷なんだわ中身は普通とは言い難い設備がそろってるけどな！サラ、紹介って言うのもあながち間違いでもないが、それだけでもねえよ、さて行くか！」

二人に意地の悪い笑みを向けながら雫が門の鍵を開け放つ。後ろで二人が驚いたように何で鍵を持っているのか聞いてくるが、雫はなおも黙って玄関の前まで歩いていき、その扉を開け放った。

「お帰りなさいご主人様！あら？お客様ですか？」

「いや違う、この二人は俺の仲間で団、月夜の雫のメンバーだ今日からこの二人もこの屋敷で暮らすから頼むな」

「ああそうなんですか解りました！それにしても雫様団に所属されていたのですね」

「所属って言うよりも俺が作った団だからな」

「あら！流石雫様ですね！やはり我が屋敷の御主人様になられる方はこうでないと」

などと二人を置きっぱなしに普通に会話を続ける雫とファリス、しばらく話を続けているが全く反応を返して来ない、最初の「お帰

りなさいご主人様」という発言と、その後の「今日から二人もここで暮らす」発言、最後に「我が屋敷の御主人様」といった言葉達を一生懸命今頭の中で処理して理解しようとしているのだろう。

少しだけ早く処理が終わリハツと気づいたように雫に詰め寄ったのはクリスであつた。

やはり頭の処理や理解の早さといった頭脳関係はクリスの方が得意らしい。

「し、雫さん！これはいったいどういうことなんですか！？解りません、解るように説明お願いします！」

処理したとはいえ未だ混乱の真つ最中らしく、せつつくように質問を繰り返していく。

その姿によりやく我を取り戻したサラもそれに続いて質問の嵐だ。

「ちよ、雫あんたどうしたんだいこんな屋敷！？ご主人様って私たちも暮らす？挙句の果てには我が屋敷の御主人様？訳わからないよ！いや何となくわかったけど全然解らないよ！きちんと説明してくれないかな！？」

そんな二人の驚きように満足したようににんまりした笑みを浮かべる雫。

その隣ではファリスが小さくため息をつきながら「説明なしで連れてきたんですね」と首を軽く横に振った。

「初めまして、御二人様、私この屋敷の精霊でファリスと申します、以後よろしくお願いいたしますね」

このままにしておいてもどうにもならないと判断したファリスは視線を二人に回し、自己紹介から始めて、静かに二人にも自己紹介

を促す……本当にできたメイドといった感じでその場を収めようと動き始めた。

「あ、ああ私はサラ、サラ＝ライカだ……すまないね未だちいっと判断に困っているがよろしく頼むよ」

「は、初めまして、クリスです、クリス＝サイラックです……なんだかよく解りませんがよろしくお願いします」

落ち着いて静かに挨拶してくるファリスに、多少冷静さを取り戻した二人が釣られて自己紹介を始める。

よく解っていない二人だが、これからここにお世話になるという事だけは何となく理解したらしい、あとこの屋敷が雫の物だという事も。

「サラ様、クリス様よろしくお願いいたします……それにしても全く雫様、驚かせたいのは解りますがいきなりでは本当にサラ様とクリス様にご迷惑ではありませんか？自分で言うのもなんですが私たちを受け入れられるような人達は稀有なんですよ？」

ファリスは二人に向って笑顔でお辞儀をすると雫に向きなおりそんな事を言い放つ。

その言葉に導かれるように二人もファリスを見つめると、何やら半透明で後ろが透けて見えている事によやく気付いた。

ただ手足や体等も全部ある状態でただ少しだけ透明なだけなのだが、二人にもファリスが幽霊にみえたらしい。

「……雫さんこの人……彷徨える者です……私が今浄化を……」

「まったく雫！そいつは幽霊だよ！変なの取りつかれちまいやが

って！」

そう判断した二人はクリスは杖をサラは剣を構える。
それを見た雫がここで初めて慌てたように二人を止めた。

「ちよまで！確かにこいつはゆ「精霊です！」……せ、精霊だ
がこの屋敷自体みたいなんだよ！少し落ち着けや！ってかいきなり
倒そうとかサラもクリスも意外と暴力的なんだな」

雫の幽霊といった発言にかぶせながら強い勢いで精霊といったこ
とを強調したファリス、二人のそんなやり取りに毒気を抜かれたよ
うに杖と剣を下ろす二人。

「そう言えば……先ほど自己紹介の時にも精霊と言っておりま
したね……申し訳ありません勘違いしてしまったようで……そうで
すよね雫さん何だか取りつかれるってイメージじゃないですよね」

「すまないね、すっかり動転しちゃってね少し考える事が出来
なかったよ、にしても全部雫が悪いんだから勘弁ね」

意外とこの世界で精霊とはポピュラーなものなのだろうか、二人
はファリスのその精霊といった強い強調に素直に納得する二人、ク
リスもさらっと何か少し毒を吐いたような感じだが雫は気にしない
事にしたらしい、思いつき故意に流し、サラのその発言に「すま
ねえな」と苦笑交じりに呟いた。

「いやはや驚くとは思ったがこれほどまでとは……にしてもフ
ァリスが精霊だっつう事には驚かないんだな……なんだか他の連中
はファリスを見た瞬間逃げ出したって言ってたから、てつきり珍し
いというか普通あんまりいないもんだと思ってたぜ」

「いいえ、精霊はめったに人に姿を表しませんので、ほとんどの人は伝説の生き物位にしか思っていないでしょうが私はこれでも神聖使いなんで、一応そっちの知識もあっただけです」

「私は今までの冒険で偶々以前に一度精霊つてやつに会ったことあったからね、雰囲気がいって多少似てる場所があったからだよ」

雫の疑問に二人はそう答えると、改めてファリスに挨拶をして、屋敷の中を案内することになった。

まずは各自の部屋を用意してもらった、雫は一階の中央奥の部屋で一番いい広い部屋、サラとクリスはそれを挟むように少し離れた左右の部屋、左がクリスこの部屋も普通の客間と比べるとかなりの大きさの部屋であり、内装もベッドに本棚机にテーブル挙句の果てにソファーまで用意してあった、右がサラの部屋で大きさと部屋の内装はクリスと同じだ、ちなみに雫の部屋は二人の二倍近いスペースに他に書斎や事務室と言った部屋まで付いているので全てを含むと三倍近い大きさになる。

雫の部屋の内装は大きな本棚二つにテーブルと椅子、ソファーにベッド、あと壁に何か高そうな絵まで飾ってある、事務室には大きめのソファーが二つとそれらの真ん中に大きめのテーブル、それと雫用の事務テーブル、書斎には天井までの本棚が十四置かれており、一番奥にはライト付きの小さなテーブルまで用意されている。

「雫様は我が屋敷の御主人様ですからね、こちらの部屋は御主人様専用の部屋なのです、お二人には申し訳ありませんがどうぞご了承ください」

と恭しく頭を下げてきたファリスにとんでもない！と慌てたよう

に返答を返して自分達の部屋ですら大きすぎて、もつと小さくてもいいと言ったくらいだった。

その後居間から始まり食堂、倉庫、武器庫、地下室、鍛冶場、風呂場、あと各種客室と両サイドにある塔の紹介、それと大広間にバルコニー、屋上を案内された。

それら全部回るだけで説明付というのもあり三時間ほどかった程だ。

ちなみに両サイドの塔はギルドから時折挑戦者達も来る、アーティファクトであるらしい。

見た目はただの五階建の塔なのだが、中に入ると上下ともに最高百階の高さ深さにまでなるらしい、左の塔が比較的低レベル用で、右の塔が高レベル、もちろん実際死ぬ事もあるらしいが今はまだないらしい、ギリギリになると帰還の魔法が掛かり勝手に外に放り出されるといふ事だ、ちなみに本人がいくら大丈夫であつても塔が危ないと判断した段階で放り出されるため、なかなか攻略が難しいらしい。

「ちなみにこの塔は挑戦料がかかりますので、それらのお金はすべて雫様の元に届けられるようになります、もちろん雫様方が入るのには挑戦料等かかりません、一度の挑戦に低レベルだと十シル、高レベルだと百シルになります、結構頻繁に来ますので意外といい収入源になると思います、今までのお金は全部この屋敷の修繕費と備品代として消えていきました、雫様にはこれからこれらもご負担していただかないといけませんのでよろしく願います、と言っても今までもこの塔だけでやっていけた上に少しは余裕が出る時もありますので、あまりご迷惑をおかけすることはないと思います」

流石に雫達は今日は塔に入るのをやめ素直に居間に戻ってお茶を飲むことにした。

雫を迎えに行ったのがお昼近くであり、何だかんだとそこから出

るまでに二時間近く、そして今この屋敷の案内で三時間近くかかりもうあたりは夕方になっていた。

「それでは今日は少し早いでしょうがお食事に致しましょう、あと三十分ほどで出来ると思いますので、それまでごゆっくりお過ごしください」

ファリスはそう言って居間を出て行った。

残された三人は疲れたようにその居間に置かれた大きなテーブルの上にほかほかと湯気を立てる紅茶を顔の横に置きながらぐとぐとしていた。

「この御城……屋敷広すぎます……全部回っただけでもうくたくたですよ」

「全くだ……でも確かに凄いいい場所だね、それがあの値段だったなんて信じられないよ」

雫は一応一通り説明し終わっていたらしく、クリスは疲れたといつてダウンしており、サラは疲れた表情の中にもニヤリと軽く口元を動かしそう言った。

「だろう？ いやさ図面見た瞬間一目ぼれっていうのかね、しちまつて思わず買っちゃったよ」

サラのその言葉に嬉しそうにそう言って笑う雫、そんな話を話しながら安らいんでいると、ファリスがまた入ってきて、食事の準備ができましたといいながら食堂まで連れて行かれた。

出てきた料理はまたかなり豪華なもの！というわけではなく、普通の酒場やレストランなどで食べるものと同じらしい。

雫は酒場でしか未だ食事をとったことがなかったので、酒場と同じような料理だなあといいながら食べていると、隣でクリスがレストランと似てますね！といいながら美味しいと言って食べていた。サラもその料理達を美味しそうに平らげていき、雫もすべて食べ終わると美味しかったと満足そうに言いきった。

確かに料理自体は酒場やレストランと似たようなものだったが味が全然違った、比べ物にならないほど美味しかったのだ。

そんな食事を取りながら今日はもう疲れたから休むと二人が食堂を出て行った。

雫はそんな二人を見送りながら、ファリスに雫自身も休む旨を伝え、軽い挨拶をした後食道を後にした。

初めてづくしの行動に疲れていた雫はまたも、すぐ眠りに落ちて行った。

〈第三章活動開始！〉其の一（後書き）

第三章です。

しばらく間が空いてしまい申し訳ございません、リアルがいろいろ忙しく思うように執筆ができませんでした。

ですが暇と時間を見てこれから書かせて頂きますね。

最近読んでくださってる方も増えたようなのでなお頑張らせて頂きます。

この度も最後まで読んでくださりありがとうございます。

これからがんばって書いていきますのでよろしく願います。
何か気になる点、誤字脱字等ありましたらぜひご一報ください！
それでは失礼します。

修正事項。

第一章其の一から第三章其の一までの誤字脱字を修正しました。

かなりの量の誤字脱字があり、読んでくださった皆様には大変読みづらかった事を謝らせて頂きます、申し訳ありません。

A K A S A K Aさんよりご指摘いただいたところは全部修正したつもりです、もし何か気付いた点やおかしな点ありましたら、ぜひご一報ください。

改めてこの場でお礼を申し上げます、A K A S A K Aさんご指摘いただき本当にありがとうございます。

第三章活動開始！其の二

「月夜の雪」第三章活動開始！其の二」

「出来たよっ!？」

さあ今からギルドに何かこなせる依頼がないか探しに行こうと、玄関に三人が集合して歩き始めようとした瞬間、外側から勢いよく扉が開け放たれ、そんな叫び声と共に女性が飛び込んできた。

「全く！宿にいったらあんたら居なくて探し回ったじゃないか！まあギルドに問い合わせたらここにいて解ったから良かったんだけどさ、んでもってほれほれ！これがあんた達の武器と防具だ、早速装備してみてちょうだい！」

口早くそう捲くし立てるのはそうダーニヤだ、興奮して頬が紅潮しているその様子は腰下までの長い銀髪と相成って物凄く魅力的に見えるが、興奮しすぎて周りが受ける印象もそれを軽く凌駕してしまっている。

興奮し話し続けるダーニヤの話を半分ほど聞き流しながら必要なところだけを拾っていく雫達は最後にそう言っ差し出してきた武器と防具の包まれた布が所狭しと並ぶカートを見て全員眼を光らせた。

「本気で！うおおおお！やっと武器と防具が手に入った！」

「へえ……どんなもんなだろうねえ今のあたしの武器よりいい物……つてのは想像しにくいから楽しみでしょうがないよ」

「私の武器……私の防具……初めての……み、見てもいいですか!？」

武器と防具の存在に気づいた零達三人はダーニヤの興奮が移ったかのように同じく興奮し、武器と防具に手を伸ばしていく。

大きさや形からどれが誰の装備かというのがすぐ解る。

まず初めに飛びついたのは意外とクリスだった。

「クリスの装備は杖と服、それとマントと腕輪の四点だよ!杖はダイヤモンドを研磨して多角形状にしたんだ!その内に魔力を乱反射させ増幅する事が出来るようになってるのさ!服はちいつと婆ちゃんに手伝ってもらったものなんだけど、聖樹の加護が宿してあるから並の鎧より頑丈だし、魔法の威力の軽減とナマクラな刀剣類は通さないよ!マントも婆ちゃんに手伝ってもらったやつだけど、これには風の加護が宿してあるからいざというとき風がその身を守ってくれる!最後に腕輪なんだけど、これはアースライムと呼ばれる土の結晶で作った物でね、術者のある程度までのダメージをその腕輪が砕け散るその時まで肩代わりしてくれるものなんだ!ただ……いざという命にかかわるようなダメージは無理だけどね」

クリスが装備を手にとった瞬間そんな長い説明を一瞬で済ませるダーニヤ、その瞳がどうだい凄いだろう!と物語っている。

クリスはその武器と防具に見惚れ一言「すごい……」と感嘆のため息を漏らしつつ、優しくそれらを抱え込み自室へ駆けだした。

それを傍目にサラも自分の装備に手を伸ばしていく。

「サラの装備が一番どうするか悩んだんだよね!元々かなりい

い武器防具そろってたし、何より私の実力が一番いかになく発揮できる種類の装備類だったからさ！サラの装備は剣と鎧、髪飾りとネックレスだよ！まず剣なんだけどダイヤモンドとサラマンドラの革と角どっちにするか迷ったんだよね……結局サラマンドラの方選んだんだけどさ、何となくあんたにはこっちの方が似合いそうでね！特徴はその綺麗な紅い刀身とその波紋さ！その波紋ただの波紋じゃなく紋章の役割を果たしてね魔法効果が付いてくるんだ、もちろん火属性さね！ただそれだけだと火属性の敵に対抗できないから、『火なるものから無なるものへその姿を変えよ！』のキーワードで無属性の剣にもなるようにしたんだ！本格的に使いこなせるようになるば、その刀身を炎に包ませたり、炎を出したりする事も出来るようになるからサラの実力次第さね！次に鎧だけどやっぱりこれも揃えてサラマンドラの鱗で作らせてもらったよ！一応全魔法に大しでの軽減効果があるけど炎に関しては無効化、水や氷に関しては半減までもってけるよ、もちろんその防御力は最高峰！クリスの服もかなりいい感じだけどその比じゃないよ！その鎧を貫けるものなんてそうそうないと思うていい！それでもって髪飾りだ、兜つけるがらじゃないだろうサラはさ、だからあえて髪飾りにしといた！これなら邪魔にもならないだろうからね！その髪飾りもサラマンドラの逆鱗を使った代物でね、自然発動で防御魔法が展開されるんだ！ただ上からの攻撃に関してだから下からとか真正面からつかれると全く効果を発揮できないから気をつけてちょうだい！最後にネックレス、これはサラマンドラの心臓をそのガーネットに封じた物でね、サラ自身の攻撃力と防御力を底上げしてくれる効果がある！もちろん身につけている間でおかつ私が用意したサラマンドラ装備を全部身につけていることが条件になっちゃうんだけどさ！」

一つ一つの説明が叫ぶような説明だが、不思議と聞きづらさがない、ダーニヤの説明を受け、サラは感心したように一つ一つの武器と防具を確認していく。

確認するにつれて頬を紅潮させていき一言「着替えてくるよっ！」
と行ってサラも自室に走って行った。

最後に残った雫が期待に胸をふくらませその装備に手を伸ばして
いく。

「雫の装備は……悔しいけどほとんどが先祖から受け継がれて
いる技術で作られたものさ、今の私だけじゃここまでの技術きつと
見つけられなかった……けど、いつかは超えて見せるけどね！まず
は武器何だけどその黒い塊あるだろう？それを手に『黑夜の刃』と
いってみて」

二人の時のように興奮した様子はないが、どこか悔しさ少しの誇
らしさを秘めた瞳で雫を見つめる。

「黑夜の刃」

雫がそう言った瞬間掌に握った黒いクリスタルのようなものが突
然雫と同じくらいの大きさの漆黒の鎌にかわった。

「これが雫の武器、ただあまりにも大きいんで持ち運びが大変
だろう？だから普段はそのクリスタルになっていて、そのキーワー
ドをもとにその姿に変わるようになってるんだ、ちなみに『無なる
クリスタル』で元に戻るよ」

「無なるクリスタル」

そう言った瞬間元の黒いクリスタルに戻った、どいう仕組みか
はダーニヤ自身知らないみたいだが、先祖の技術だということだ。

「ちなみにその材質ダークマターっていう黒いこの星以外か

らきた物質らしいよ、実際さつき持つて見て重さって感じなかった
だろう？ただ頑丈さは折り紙つき、それを破壊できるものがあるな
ら逆に私に教えてほしい位の頑丈さでね、切れ味も鉄位までなら普
通に切れるはずだよ、それ以上は雫の腕次第って訳だね」

雫は改めてそのクリスタルを見つめた。

確かに先ほど持った時、このクリスタルを手を取ったときの重さ
とまったく変わらない重さであり、頑丈さ切れ味も話を聞くだけで
とあり得ないといってもおかしくない代物だ。

「んでもって防具何だけど、まず婆ちゃんに手伝ってもらった
この服、妖精王の加護を受けし服でね、魔法の軽減効果とヒーリン
グ効果があるから、多少の傷はこれを身につけてるだけで少しずつ
回復していくはずだよ、まあ余りにも酷いと保証はできないけどね、
んでもってその上からこの部分鎧を着けてもらう事になるんだ、全
部ダークマタで作られ、弱い魔法であれば反射し強い魔法であれば
効果を軽減することができよ、まず肩と腕、胸当てに脛この部分
だけでなく、効果は全身にいきわたるから安心して、頑丈さはサラ
のサラマンドラより少し上位だけど、重さが全然違うでしょ？これ
も先祖の技術何だけど、どうやってかその重さを限りなく軽くして
るみたいなのよ」

その服を手を取った瞬間、つい最近出会った森の精霊が思い出さ
れた。

雫はまさかなあと思いつつ鎧を持ち上げてみるが、その重さが服
の重さと比べて同じくらいか少し重さがあるかどうかといったくら
い軽いものだった。

「んー完璧に物理法則無視してやがるなあ……これぞまさにフ
ァンタジー！」

雫はまた一人違うところに感動して悦に浸っていた。

そんな雫を気にせず、ダーニヤは続いて説明を続けていく。

「んでもって次がこのサークレットね、これは中央に太陽石って呼ばれる石がつけられていて、周りの素材は黒竜の逆鱗、自動で頭上からの攻撃を防御する魔法が発動するけど、あくまで限界はあるからね、あと衝撃を吸収するわけじゃないからそこは気をつけて」

一人悦に浸っていた雫はその説明を聞き、サークレットに手を伸ばす、仄かに暖かさを持つそれはどこか心を落ち着かせてくれるような気がした。

「何となく気づいたかもしれないけど、太陽石っていうのはその人本来の力を発揮できるようにするため、心を落ち着かせる効果と全身の保温効果があるよ」

ダーニヤのその追加説明を聞き納得してそれをつけてみると、あまり変わった感じはしないものの、どこか安心感が感じられた。

「さて次にこの指輪二つなんだけど、こっちの銀色の鳥が彫られてる指輪が物理的なダメージを壊れるまで軽減してくれる効果で、こっちの竜が彫られてる銀色の指輪が精神的なダメージを軽減してくれる効果があるから、左右どこの指でもいいから常につけておいて」

雫は説明のあった鳥が彫られた指輪を右手の人差し指、竜の彫られた指輪を左手の人差し指にそれぞれつけ、着替えてくるという一言をダーニヤに残し部屋に戻った。

数分後、三人がそれぞれ新しい装備に身を包みその場に姿を現した。

明らかに可笑しな位威圧感を発してるその装備に身を包んだ三人は苦笑をもらした。

「ダーニヤありがとう、本当に凄い装備ばかりだ、サラとクリスも凄く感謝してる……けどこれはいざという時以外なかなか身につけられないよ、クリスと俺の服やアクセサリーは問題ないけど、この特殊すぎる素材の部分鎧やサラのサラマンドラの装備はあまりにも他の人の眼を引く……というか引きすぎるから、ある程度この団が有名になってどうしても隠せなくなるまではいざというときだけ使わせて貰う事にするよ」

雫が申し訳なさそうにそう言うと、ダーニヤは一瞬はてなマークを浮かべた後笑いだした。

「あ、なるほどね、クックック！ご、ごめん説明がたりなかったわ！」

少し我慢しながらでもその笑っているのが解るくらい、苦しそうなダーニヤは笑いの発作が治まると改めて説明を始めた。

「クリスに関しては全部問題ないけど、サラと雫は装備の大半使えないと思うよいまのまんまじゃね、明らかにレベルにあってない装備だからさ、一応サラはその武器とネックレス、雫は武器と服と指輪しかいま装備しても効果が全く意味ないはずだよ、ちなみにその武器とアクセサリー類もすぐに完璧に使いこなすのは至難の技だと思うよ、私の作った武器防具、先祖の技術共に厄介な事にね……」

ダーニヤはそこでいったん区切ると三人を見回し挑発するように
こう言い放った。

「持ち主を選ぶのさ」

つまるところ、装備する物であっても、それらが雫達を認めなければその効果を存分に発揮することをしない……といったことらしい。

一瞬何のことだろうという顔をしていた三人だが、ニヤニヤと面白そうに見つめるダーニヤを見ている間に頭の整理がつき、三人ともまた苦笑をもらしたがその瞳には絶対認めさせるといった強い意志が感じられた。

「なるほどねえ……まあ旨い事そうそういかないか」

「まあ逆に少し安心したよあたしは、つまるところ使いこなして武器にしても防具にしてもその効果が発揮できてると思えるようになれば一人前、それまではあくまで半人前扱いってわけだね、上等！あたしはそういうの好きだよ」

「大変そうですね……これだけの凄い装備なんですそれくらいじゃないと逆におかしいですよね！でも私だってそうそう遅れをとったりしません、絶対に使いこなして見せます！」

雫は軽くため息をついているものの、その瞳の強さは誰よりも強かった。

サラとクリスも自分自身を改めて鍛えなおし、一刻でも早く与えられた装備を満足に使いこなせるようになろうと決意した。

「はあふ……にしても疲れたよ私は……完璧に徹夜で仕上げたからね……あ！そういえばさ雫あんた団長なんだってね私も今日からこの団に入るから後でギルド行ったときにでも申請しておいてポジションは鍛冶師でいいから……ごめ私限界だわ、今日から私もここに住まわして貰うから適当な部屋貰うね……あーその透明なメイドさん、どこでもいいから私の部屋作って案内して」

余りにも突然なその決意表明についていけずぽかーんとしている三人と一精霊。

一番早くに回復したのは精霊ファリスだった。

伊達に一番年を生きている？わけじゃない、雫によろしいですかといった感じの視線を投げかけ、返事をまつ。

それに気づいて、ようやく我に戻った雫は頭を軽く掻きながらうなづいた。

「早くしておくれーそれじゃないとその辺でぶっ倒れるよー」

ダーニヤは本当にもう限界らしく、先ほどの元気はどこから来ていたのかと聞きたくなるほど今にも力尽きそうだった。

雫は強引だなあと思いながらも、新しい仲間の誕生に喜びを感じていた。

ダーニヤがファリスに案内され、二階に行こうとした背中に雫は呼びかけた。

「ダーニヤ、改めてこれからよろしくな！」

それに遅れてようやく調子を取り戻した二人も「よろしく頼むよ！」「よろしく願います！」とその背中に声をかける。

ダーニヤは、背を向けたまま軽く手を振りそのまま二階に上がっていった。

三人は顔を見合わせ苦笑を洩らしながら、初めてそろった装備を一度部屋にもどり、使える物だけを持って改めて玄関で集合した。

「さて、ようやくある程度身支度もそろったんだ、武器や防具に認められるためにも頑張ろうぜ」

雫がそう言うと、サラとクリスは笑いながらうなづいて、屋敷を後にした。

向かうところはギルド、ようやくそろった武器と防具を試すように、それを生かせる依頼を探しに向かった。

〈第三章活動開始！〉其の二（後書き）

誤字脱字に注意を払いつつ書きました……が、恐らく自分の事です、気づかないところでやらかしてる気がします。

もし気づいたところなどありましたら、よろしくお願いします！
そろそろ、三人のギルドでの初？仕事の始まりです。

もしよろしければこれからもどうぞ読んでってください。
それでは失礼します。

「第三章活動開始！」其の三

「月夜の雫」第三章活動開始！其の三」

「あつ！雫さん丁度いいところに来てくれました！」

ギルドに入ると、ラリアが雫を目ざとく見つけ、素早く声をかけた。

とてもいいタイミングだ！と笑顔を浮かべながら。

「ラリアこんにちわ、どうしたんだ？」

雫の後ろで、意外と手が早いんですねなどとクリスとサラがひそひそと話をしているが思いつきり雫に聞こえている。

むしろわざと聞かせているのかもしれない、それを何とか無視しながらラリアと話を続けていく。

「はい！丁度いま月夜の雫への依頼書が回ってきたんですよ。今からカラードルの方へ連絡入れようとしたところだったのでまさにベストタイミングです！」

元気よく答えたラリアは一枚の書類を雫へ手渡した。
後ろから覗きこみながら二人もその依頼書を見る。
依頼書には。

「依頼書……ランクC強／ランクB弱」

・場所：ディアの森、闇者の集落。

・闇者の討伐：グリーズル五匹、ラルカ五匹（追加可能性大）。

・集落の壊滅。

・成功報酬：九万五千シル＋収集品、集落にあるアイテム類。

＊上記二つの完全遂行が任務完了となり、闇者の収集品をもって確認するものとする。

集落に存在する闇者が現在確認されている数が上記、実際数の上下はあると思われるが全て殲滅し、その集落を壊滅、壊滅の証としてカリードルにて映像の保存を行う事。

モンスターの数においてランクのアップもあり得るので、収集品の獲得は必須。

そう書かれていた。

後ろの二人が息を飲む音が聞こえ、振りかえるとかなり驚いた表情で、その書面を見続ける。

最初に書面から目を離れたのはサラだった。

「ちょっとリアっていったかい！これは誰からの依頼なんだ！明らかに私たちの手におえるレベルを超えてるじゃないか！確かにランクはCだけど明らかにランクBクラスの依頼書だよこれは！確かに書面に書かれてるだけの闇者だけなら何とかなるかもしれないけど、それでもぎりぎり、ましてやそれに追加がきたらかなりの確率で全滅しかねないってのは解るはずだ！何より、場所がディアの森

の中だろうこれ！たどり着くまでにだってかなりの数の闇者を相手にしないといけないって条件だってあるんだよ！ギルドのミスじゃないのかい！？」

一気にそう捲くし立てるサラ、クリスも顔を少し青くしながらコクコクと頷いている。

雫だけがそのモンスター達がどれくらいの強さを誇っているかを知らないため、状況を理解できていなかった。

（なあ虹、グリーズルってやつとラルカってやつはかなり強いのか？）

（はい、ライラよりワンランク上の闇者と思ってください、グリーズルはデスブリンガーのレベルが低い者で、ラルカがライラのレベルが上の者です、共にレベル二十前後の闇者になります、特徴も似たようなものですので、本当に其の二匹の上位と下位に位置する闇者とお考えください。ちなみにデスブリンガーのレベルは四十前後です。）

こつそりと虹から情報を聞きだす雫、確かにその話を聞くとかなり無茶な依頼に聞こえてくる。

以前虹から聞いた話で、レベルが三から五違えばワンランク上になり一気に強さが増すという話を聞いている雫も、そこまで説明を受けてラリアを難しい顔で見つめる。

「そんな事言われましても……私もこの依頼書を……ギルド長から渡されただけでして……」

「その依頼書はギルドからというよりも、元々私個人の依頼ですよ。ただ最近問題が大きくなり、その闇者たちによる冒険者襲撃により、

冒険者の負傷率があまりにも高くなりすぎたため、団への依頼とし、貴方達であればなんとか出来ると私が判断したので回させて頂きました。」

突然雫達の後ろからギルド長、デニスがそう三人に言い放った。いつもと変わらぬその微笑みをたたえながら。

「あんたかい！確かにリーダーの活躍を見れば出来るように見えるかもしれないけどね！私達は団を組んでまだともに依頼を受けた事もなければ、戦闘を経験した事もないんだよ！何よりまず初めは手頃な腕試し程度の依頼を回すのが普通じゃないのかい！」

サラはかなり興奮しているらしく、突然出てきたデニスにくっついてかかる。

仕方のない事だろう、これはゲームではなく現実であり、一步間違えれば死というものが待ち構えているのだから。

いくら慎重になってもなりすぎることではない。

ましてや情報がある程度揃っていて、明らかにその依頼が死に近いと解ればどれだけそれを取りやめてもらおうと掛け合っても当たり前の事だろう。

「……申し訳ありません、実際はそうすべきことなのですが、私共も本当はそうしたかったのですが……今すぐに動ける団が雫さん率いる月夜の雫だけであり、ほかに動ける団は軒並みランクがEかDだけなのです。上位の団は皆今この付近にはおらず、早く戻ってこられる団であっても半月はかかるという事です。それまでこの闇者の集落を放置しておけば、近いうちに街に襲いに来る可能性が大いにあります、ですのでかなり無茶で無謀な事であると承知の上で月夜の雫の皆様にこの依頼をお願いしたいのです……この度の依頼に関しては拒否して頂いても、何ら罰則がかかることはありませんので、

もちろん拒否していただいてもよろしいのですが、今頼れるのが貴方達だけなのです……」

いつもかぶっている微笑みという仮面を捨てたデニスは、とても苦しそうに三人を見つめた。

流石にそこまで言われるとサラもそれ以上突っかかることができないようで、しぶしぶ引き下がり、青い顔をしたクリスは……。

「雫さん！何とか引き受ける事はできないでしょうか？」

雫にそう尋ねてきた。

驚いたのはサラだ、さっきまでの様子を見ると怯え、明らかに一番恐怖していたクリスがサラでさえ及び腰になるレベルの依頼を受けてほしいと頼んできたのだから。

「まあ……この街が襲われるとどっちにしても戦わねえと行けねえ訳だし、何より……」

そう言ってクリスを見る。

「お前の実家がここにあるんだろう？見捨てられねえよな！」

雫は二カツと笑うとクリスの頭を乱暴に撫でた。

少し恥ずかしそうに、どこか嬉しそうになすがままになっているクリスは「はい！ありがとうございます！」といって微笑んだ……まだ顔は青いままだが、それでも少し顔色も良くなってきている。

雫の言葉でやっと頭が回り始めたらしいサラが軽く頭を掻きながら「ったくあたしとしたことが」と呟きながら。

「すまなかったね！あたし一人少し混乱し過ぎてたみたいだね、い

「つちよ気合い入れてやってやろうか！」

そう言つて雫とクリスの肩をバンバンと叩く。

そんな二人をどこか眩しそうに、とても申し訳なさそうに見つめながら、デニスは一枚の書類を雫に手渡した。

「雫さん、こちらが今朝新しくなりましたこの件の依頼書です、確認してください。」

その言葉にその依頼書を改めて確認した雫達は改めて驚いた表情でデニスを見つめた。

「依頼書ランクBオーバー……??？」

・場所：ディアの森、闇者の集落。

・闇者の殲滅。

・闇者の集落の壊滅。

・報酬：十三万シル＋収集品、集落のアイテム類＋闘技大会へのシード権

＊上記二つの完全遂行が任務完了となり、闇者の収集品をもって確認するものとする。

集落に存在する闇者が現在確認されている数が上記、実際の上下はあると思われるが全て殲滅し、その集落を壊滅、壊滅の証としてカラードルにて映像の保存を行う事。

モンスターの数においてランクのアップもあり得るので、収集

品の獲得は必須。

雫が驚いたところは報酬の大幅アップ。

クリスとサラが驚いたところは闘技大会へのシード権。

「闘技大会のシード権なんて……ギルド長これは本当なんですか？」

クリスが疑わしげにそう尋ねる。

そんなクリスが不思議で虹に理由を尋ねると。

（ギルドの闘技大会は基本ギルドに所属していればだれでも参加は可能ですが、優勝者はほとんど決まっているようなものです。ランクSクラスの人間が優勝者になり、優勝者にもみ通常次の大会へのシード権というものが手渡されます。シード権はそれだけで準々決勝からの戦いになり、参加した時点でそれ相応の名誉と名声、お金が手に入ります）

そんな説明を受け、なるほどと頷く雫。

参加しただけで有名になれ、その上お金まで手に入る、それだけを聞けば大したことのないように聞こえるが、サラとクリスの驚きようを見ると、その有名になる度合いと金額がかなり凄いのだろうと考えた。

「はい、もちろんです。この度の依頼を貴方方にこなしてもらうのはこちらの我がままであり、明らかな上位ランクへの依頼になります。それに応じる為にはこれくらいの報酬は当たり前でしょう。」

そう言っつていつもの微笑みをその顔に張りつかせ、頷いた。

サラはそれを見て明らかにやる気が出ていた。

クリスもサラ程ではなかったが少し表情が明るくなっている。

雫はそんな二人を見つめながら、これはどんなことをしても生き残り、戻ってこないといけないと改めて心に誓い、二人と一緒に頑張ろうと頷きあった。

ラリアはそんな三人を少し羨ましそうに見つめながら、一つの書類を用意していた。

その時はデニスを含む雫達四人はラリアの行動を全く見ていなかった。なので誰一人気づくことはなかった。

改めて用意をするためギルドを出ようとしたとき、雫が一つの事に気付き慌ててラリアの元へ向かった。

「忘れてた！ラリア団のメンバーに一人追加があるんだけどどうしたらいい？」

雫がそう言うのとハッと顔をあげて、何かを隠すように慌てて返事をしてくる。

何を隠したか……雫には関係ないものだと思います、突っ込まず、ラリアが出してきた書類を見つめた。

「こちらに記入してください……その方は戦闘メンバー扱いでよろしいんですね？」

「いや、鍛冶師だ、団専属の鍛冶士になるんだけど、それだと何か変わるのか？」

雫は書こうとしていた手を止め、ラリアを不思議そうに見つめる。

「はい、戦闘メンバーによってランクが決まるため、非戦闘メンバーは違う扱いになるんです。ちなみに非戦闘メンバーにもランクがありますのでそれは追々その方がいらっしゃったときに説明します

ね、そちらではなくこちらの用紙に記入をお願いします。」

そう言って雫が書こうとしていた書類と似ているが書く欄に職種・ポジションという欄が増えていた。

雫は職種・ポジションの所に鍛冶師と記入し、名前を書き込んだ。

「ダーニャニルベスト」

そう書き込んで、それを見たラリアはあっ！と声を上げた。
またも不思議そうにラリアを見る雫。

「ニルベストさんってもしかして、あの路地裏に住んでるあのニルベストさんですか！？」

少し興奮気味にそう聞いてくる、その大声に地下にいたデニスがまた寄ってきてラリアに注意をした。

「ラリア、お客さんの前で大声はやめなさいと何度言えば解るんだ、全く……ほう……」

そう言いながら書面を見たデニスも少し驚いたように雫を見つめた。

不思議そうにしている雫に気付くとデニスは微笑みを少し崩し苦笑を洩らしながら。

「いや、すみません、ダイロウとは少し付き合いがありましたね、その娘のダーニャとも……それでこの子なのですが、ある筋ではかなり有名な鍛冶師で誰の元にもつかない！と豪語していたもので少し驚いてしまったんですよ、申し訳ありませんでした。」

そう頭を下げてきた。

なるほど、と頷きながら頭をあげて下さいと雫は言いながら、改めてダーニヤが凄い人物だった事に気付いた。

そんな話をしながら無事登録を終え、ギルドを後にする。

出発は準備もあり、ダーニヤにも説明しないといけないので明日という事になり、三人は各々明日の準備のために分かれ、歩きだした。

全ては明日、生き残るために。

〈第三章活動開始！〉其の三（後書き）

更新が遅くて申し訳ありません。

それでもしっかりと書いて行くつもりですのでよろしくお願いします。

これと同時進行でエルドラドというMMORPGを主題にした物語も最近書き始めたので、もしよろしければそちらも読んでみて下さい。

この度も最後まで読んでくださいますありがとうございます！

これからがんばって書いていきますのでよろしく願います！失礼します。

第三章活動開始！其の四

「月夜の雫」第三章活動開始！其の四」

雫達が街を出てから二時間、ディアの森が目の前に広がっていた。これから高レベルの闇者退治に入るため、なるべく体力や傷薬などの消耗品を使わないようにゆつくりと歩き、道に時々現れる低レベルの闇者を避けここまで来た為、これほどの時間がかかったのだ。ちなみに通常であれば一時間かかるかかからないかで着くぐらいの距離だ。

「さあて……装備と各自消耗品の確認だけはしっかりしておいてくれよ……間違いないく命懸けの依頼だからな。」

雫が二人を見つめながらそう言うと、二人も雫を見つめながら頷いた。

「流石に……緊張するなつてのは無理があるねえ、ただ緊張しすぎるのだけは駄目だから気を付けなよクリス。」

一番戦闘経験が豊富なサラが、緊張で力チ力チになっているクリスの頭を軽く叩きながらそう笑った。

雫に声をかけなかったのは、サラよりも高レベルの闇者を倒してるせいか、いやに落ち着いているからだ。

「は、はい！……すいません、解つてはいるんですが……」

サラのその言葉に、反射的に大声で返事をした後、少し落ち込み情けないように頭を垂れる。

そんなクリスを雫は乱暴に頭を撫でながら、少しでも安心するようになろう、軽口をたたいた。

「大丈夫だ！命がけつてのはそうだけど、俺なんて毎度命懸けの戦いだけど、今だってこうやって無事なんだから、今回も全然問題なしだ！」

そう言い放ち、笑みを浮かべながらクリスを見つめる。

そんな軽口で緊張が解ける訳がない……が、それでも多少気を持ち直すことに成功したのだろう、緊張は解けていないが、その表情に少しだけ笑みが浮かぶ。

「ありがとうございます、サラさん、雫さん。大丈夫です私だって月夜の雫のメンバーの一人なんですから！」

自分自身に暗示を掛けるようにそう言い放ち、二人を真正面から見詰める。

そんなクリスをサラは軽く小突き、雫は頷きをもって応えた。

「んじゃ行くぞ！朱華補助魔法掛けられるやつ出来るだけ掛けてくれ！」

雫が朱華にそう言うと、肩の上に乗っていた朱華が速度上昇と反応速度の上昇の二つの魔法をかけた。

「シルフィードとセルフィードの二つを掛けました！直接戦闘に参加できないけど、補助は任せてください！」

朱華に感謝の言葉を三人で掛けながら、森の中に入っていく。

普段それほど難易度の高い闇者がでない、初心者冒険者達慣れる為の場所だが、今この時だけは、森に入った瞬間嫌なプレッシャーが三人を襲う。

雫はデスブリンガーとの戦いで、これ以上のものを味わい、サラは数多くの経験があるため問題なく動けるが、クリスだけは入った瞬間このプレッシャーのせいで動きが止まった。

だが、クリスは自分自身に言い聞かせるように「月夜の雫のメンバー！私は負けない！」と小さくつぶやいてそのプレッシャーの中心の背中を追いかけるように歩きだす。

「やばい感じだね、予想以上にこれはきついかもしれないよ！」

サラがそう言ったのは、前方の茂みの向こうに多数の闇者の気配を感じたからだ。

クリスはサラが言った後、その視線を追いかける事でそれに気づき、雫は過去の二度の戦いで得た直感でなんとなくそこに何かがいるのを感じ取っていた。

サラは赤い刀身を目の前に構え、いつでも襲いかかれるように準備を整えた。

雫はすでに鎌を装備して油断なくあたりを警戒し、クリスも杖を構えながら詠唱を開始する。

油断していた訳ではなかった……それでも背後からの突然の奇襲に三人は体制を崩された。

『グルウウ！』

背後から、ラルカ二匹が雫とサラに襲いかかったのだ。

流石に奇襲とはいえ、体制は崩されたがダメージは食らわなかつ

た。

ただ、その奇襲のおかげで、前方の多数の気配もこちらに動いてくるのが解り、サラと雫は大きく舌打ちをした。

「ツチ！不味い……せめて奇襲で前方の奴等の半分は始末出来ると思ってたんだが……」

「全くだね！前方の奴等……ラルカ五匹にグリーズル二匹かい！」

「数が多すぎます！一旦引き……きゃあああ！」

あまりの数の多さに、及び腰になったクリスにラルカが飛びかかった。

襲いかかる鋭い爪と牙。

ラルカの攻撃はその素早い動きとその動きからの爪と牙によるものだけだ。

だけとはいえ、そのスピードはライラの二倍近い速さだ。

「地の精霊！かの者に一時の盾を！アースシールド！」

雫とサラは体制を崩し、その攻撃の対処に間に合わないと判断した朱華は咄嗟に地の精霊に力を狩り、土の盾をクリスの前に出現させる。

その盾はラルカが衝突したと同時に消滅したが、その動きを止める事に成功した。

「つつしゅ、祝福されし我が杖よ！今我が前にある悪しき存在に鉄槌を！ライトニング！」

咄嗟にその隙についてクリスが神聖の奇跡を発動させる。

杖の先から三本の黄色い雷がラルカに襲いかかる。

『グウギヤアア！』

アースシールドによつて動きを止められたラルカはその攻撃が直撃し、前足と背中、鼻が焼けただれる。

その隙を見逃すことなくサラがラルカに冗談からその刀身を振り下ろす。

「うらああああ！いつけえええ！」

叫び声とともに振り下ろされたその剣は見事ラルカを真つ二つにし、一匹目を撃破する。

その赤い刀身は、ラルカを斬った際ついた血を受け付けられないかのように、地面に一滴残らず滑り落とす。

「あ、あ、あ……っつ、はあはあはあはあ！」

クリスは緊張感と、自分自身が行った攻撃の効果を見て、息を乱す。

サラと雫は、そんなクリスを挟むように背中合わせで闇者に向きなおす。

体制を整えた二人だが、流石に今の状態でクリスを落ち着かせている余裕など全く無かった。

「……ったあああ！」

左右から襲いかかってきたラルカを雫はその鎌の一振りです倒す。右から襲いかかってきた奴は首を落とし、左からの奴は胴の半場から真つ二つになっていた。

「おー！すごいじゃないか雫！この武器もそうだけど、流石としか言いようのない威力だね！」

感心したような声を洩らすサラだが、襲いかかってきた一匹のラルカを突き刺し絶命させている。

「一先ずこれで四匹、残りラルカ三匹とグリーズルが一匹……って一匹!?」

改めて闇者を確認していた雫が今になって一匹グリーズルがいない事に気がついた。

本能的にやばいと感じた雫は、クリスを思いっきり吹き飛ばした。もちろん闇者がいない方向にだ。

「きゃあああ！」

悲鳴を上げながらも、その衝撃でやっともな理性が少し戻って来たらしく、何とか受け身を取りながら茫然とその光景を見つめていた。

サラは雫の行動でグリーズルの動きに気づき、咄嗟に飛び離れている。

逃げ遅れたのはクリスを助けた雫だ。

『グウルルルガアア!』

その叫び声は上から聞こえてきた。そしてグリーズルの爪が雫のクリスを吹き飛ばした腕に襲いかかった。

「つつつたあ！なめんなよごらあああ！」

幸い攻撃を受けた腕は左腕一本、右腕に握った鎌を思いっきり横に振る。

致命傷に近いダメージを与えたものの、やはり片手では十分な威力を発揮でなかったようで、グリーズルの片腕と胴体の半場まで切り裂いた。

普通人間であれば致命傷で身動きなんて取れない傷だが、相手は闇者。

その状態から左腕の爪を雲に振り下ろす。

「つつお父様！」

攻撃された際に弾き飛ばされた朱華が悲鳴を上げた。

「させないよっ！」

それをサラが、ギリギリで受け止め、雲はその隙にその場から飛びのいた。

流石にグリーズルの怪力を支えきることができず、その刀身は地面に突き刺さるが、飛びのいた雲が一回転し鎌を斜め上から斜め下に遠心力で威力を上げながら振り抜いた。

『グギヤアアア！』

真っ赤な血しぶきと共に倒れ落ちるグリーズルを確認すると、もう一匹のグリーズルと残りのラルカに注意を払う。

「助かったサラ！」

「お互い様ってね！」

そう言って二人がまたもクリスを挟み込むように体制を整える。

「我願う、我思う、この者等の心身を癒し、傷を癒す奇跡よ、今こそあれ！ヒーリング！」

雫のその腕の怪我に真っ青になりながらもその瞳に後悔と共に強い決意の光をたたえたクリスが奇跡を起こす。

「サンキュ！予想以上にすげえなヒーリング、動かなかった左腕全然痛みすらねえ！」

爪によって引き裂かれ多少の傷とその威力の高さでしびれていた腕が回復した。

「……雫さんのその服のおかげでもあります、元々少しずつ回復していたところを私が少し強化したみたいなものですから。」

クリスはそう言いながら、まだ及び腰ではあるものの、しっかりと闇者を見据えて震える声でそう言った。

「本当にダーニヤ様様だな！サラっ！」

「あいよっ！っと！」

雫が襲いかかるラルカ三匹を牽制していると、その陰からサラにグリーズルが襲いかかった。

サラもそう何度と奇襲を食らう程レベルの低い冒険者ではない。襲いかかってきたグリーズルの腕を叩き折った。

『グギャアグ!』

流石に雫と同じように斬り落とすのは無理ではあったが、その腕を使用不能にまで持ち込んだ。

「我が前の悪しきものに浄化を! ストリーム!」

腕を叩き折られ動きが止まったグリーズルにクリスが追い打ちをかける。

渦を巻く水の奇跡。

その威力はかなりのもので、グリーズルの胸を貫通した。

それに負けない! とばかりにサラが雫と同じように遠心力を使って真横から一閃。

もちろん怪我をしていないサラは両手でだ。

多少斬り込めはしたものの、やはり雫と同じには無理だと感じながらサラはグリーズルを吹き飛ばした。

『ギャグウウ!』

吹き飛ばされたグリーズルはラルカを一匹巻き込み大きな樹に激突した。

しばらく悶えていたが、数秒後に動かなくなった。

巻き込まれたラルカは既に絶命している。

「残り二匹! 一気にいくぞ!」

雫はそう言つてサラと一緒にラルカに向つて走る。

真正面から迎え撃つ……そんな考えが闇者にあるわけもなく、そのスピードを生かし、横から襲いかかつてこようとするが。

「動きは見えてるっての！」

鎌を逆に構えていた雫はタイミングを見計らい思いっきり振り上げた。

奇麗に縦に真つ二つになるラルカ。

サラも負けておらず、その動きを読んでいたらしく、地面に剣を突き刺し、襲いかかってきたラルカがその刀身に自ら激突し自滅していた。

「一先ず……これで終わりだろうね。」

警戒を解かずに、サラはそう言った。

雫も周りを警戒していたが、気配というか危険な感じがしない事が確認できると、鎌をクリスタルに戻し、その場に座り込む。

クリスはすでに腰が抜けたかのように座り込んでおり、サラは剣を地面に突き立てたままどかっと地面に腰をおろした。

「し、しんどいぞこれ！」

多少乱れた息を整えながら雫がそう言った瞬間、二人も頷いて同意した。

「しよっぱなから報告されてた数超えてると来たもんだ、これだけの筈がないから、この二倍から三倍の数は最低限見といた方がいいね。」

ため息をつきながらサラは空を見上げる。

「……すいませんでした……何もできなくて……」

クリスはとても申し訳なさそうに、唇を噛みしめながら後悔……悔しがっている。

「んなことないさ、実際クリスのおかげで俺は腕の傷がすぐ治ったし、サラがグリーズル吹き飛ばせたのだって、クリスの奇跡があったからだろう。」

「そうだね、あたし一人じゃさすがに無理だったよ。クリスと二人だからなんとかなったんだ！もう少し自分に自信もちな！」

二人のその言葉に、顔を上げるクリス、瞳に涙が少し溜まっている。

それをこぼす前にふき取り元気に「はい！」と返事をして、先ほどまで見せていた決意した瞳の光をより一層強くしていた。

「さて、軽く今の内に飯食つとくか……こんな血みどろの所で食べたくはないが、これを逃すといつ食べれるか話からねえからな。」

そう言っつて鞆から干し肉と水を取り出し、目をつぶって一気に詰め込んだ。

流石に雫とはいえ、この異臭と気味の悪い血みどろの地面を見ながら悠々と食事が出るほどまだ慣れきってはいない。

サラは雫よりは耐性があるのだろう、嫌な顔をしながらだがそれでも普通に食べ、クリスにいたっては何度も吐きそうになりながらも、何とか食べきった。

食事をとり、十分ほど休憩をとった三人は改めて立ち上がり、奥に進んだ。

「……おいおい本気かよ……」

絶望に似たその呟きを誰が非難できるだろう。

雫のみた光景は闇者の集落。

そこにたむろする闇者。

そしてその数だ。

グリーズルが十匹。

ラルカが二十匹その集落に集まっていた。

雫達が侵入し、先ほど倒したのを知ったのだろう、この森にいる闇者が全部集まっていると雫達は考えた。

「だけどおかしいね、ラルカにしてもグリーズルにしてもそこまで知力がある奴等じゃないんだけど……」

サラが嫌な予感がするといいながらそんな事を言った。

雫も先ほだからとても嫌な感じがしっぱなしだ。

あの光景を見た事も関係はしているだろうが、それだけじゃないと本能が告げていた。

「つつラルリオン！」

クリスが、雫とサラが見つめていた集落と違う方向に視線を向けた瞬間そう叫んだ。

「うち！何だってこんな所に！」

「そいつはどういったやつなんだ？」

とてつもなく焦っている二人に、どういった闇者が解っていない雫は緊張した眼差しで二人を見つめる。

「ラルカの上位閻者だよ……厄介な事に知恵があるから多数の閻者が固まってる場合だとかなり危険な閻者だよ。」

「はい、単体であればラルカを少しだけ強くした感じですが、指揮能力があるので……今の状態だとかなりやばいです。」

説明を受けた雫は頭を抱えなくなった。

ただでさえあの数で絶望的だというのに、その上あれらを指揮出来ると来たのだ。

あまりにも不利な今の状態に絶望しないのが奇跡に近い。

「……黑夜の刃！畜生！囲まれた！」

頭を抱え込んで考えてるうちに何時の間にやら囲まれていた。

一番最初に気付いたのは雫、サラもすぐにそれに気づき武器を構える。

クリスは今まで聞いたことのない詠唱を唱え始めていた。

「我願う。我想う。我が乞う！」

今まで緊張して震えていた声ではない、完璧に集中しきって周りの一切を切り捨てての詠唱。

「……何か打開策があるみたいだから……守るぜサラ！」

「任せときな！伊達に一番分厚い鎧や武器を装備してるわけじゃないところを見せてあげるよ！」

「水の精霊よ、かの者に保護を与えよ！アクアアーマー！これで少しは攻撃を防げるはずですよ！でも多分一発多くても二発食らえば消え

てしまうと思ってください！」

朱華がそう叫びながら雫の肩から飛び上がる。

『ギュギヤアアア！』

周りを取り囲んでいた六匹のラルカと三匹のグリーズルが一斉に襲い掛かってくる。

それは、純粹な恐怖を蘇らせるには十分な代物だが、雫はこれ以上の恐怖を既に体験している。

サラはその恐怖に耐え、体を動かす術を身につけている。

クリスはそんな状態になろうとも詠唱をひたすら続けている。

「願うは光！想うは心！乞うものは光の心！」

「おりゃああああ……！」

その声を聞きながら雫はその闇者の群れの中に飛び込んだ。

襲い来る爪と牙、怪力の腕や足。

致命傷になる攻撃だけを何とか躲かし、それ以外をあえて受けながらその鎌を両手で真横に振り抜く。

勢い付けて振るった鎌は半回転、前方にいた三匹のラルカと一匹のグリーズルを真つ二つに切り裂いた。

だが、その代償も小さくなかった。

「つく……」

一度距離を開けた闇者達だが、それを見た雫は膝をついて息をしている。

「御主人様！なんて無茶を！」

今まで人前で一切話さなかった虹が思わず叫ぶほど無茶な行動。腕や足、その体に至るまで傷がないところが見当たらない。

確かに深い傷はないものの、その多数の傷から流れ落ちる血液はその服の回復力を持っても追いつかないほどだ。

「さ、サラ！守りは任せる！出来る限りせん滅するからそっちに漏れたのは必ず防いでくれ！」

息も絶え絶えな癖にその瞳の強さに思わずサラが息をのむ。

「……あいよ！任せな！この身に代えてもクリスにや絶対触れさせないよ！」

雫に感化されたように、サラの身体が熱くなる。

今まで以上に体が軽く、今まで以上に武器を扱える気がした。

『ガアアアア！』

雫が動けない隙に、グリーズル二匹がクリスを襲おうと詰め寄る。

「それ以上は通さないよ！」

そう言っで一閃。

確かに思いつき振り抜いた。

だが、その振るった感じが今までに感じたことのないような感覚だったのだ。

「……これが火事場の馬鹿力ってやつかね！今ならグリーズル程度

いくらでもこいつて感じだよ！」

先ほどまで全くと言っていいほど斬り裂くといったことができなかったサラ、だが目の間に転がるのは真っ二つになった二匹のグリーズル。

その真っ二つになった表面は焼け焦げていた。

「つつう、うらあああ！」

片膝をついていた雲にラルカが囲むように襲いかかってくるが、その場から思いっきり飛び上がりその攻撃をかわす。

流石に人間がそこまでの高さ飛びあがれると考えていなかったのだろっ、全力で四方から来ていたラルカ達は互いにぶつかり合い動きを止める。

上からそのラルカ達に二度鎌を振るった。

「おらあああああ！ツグ！」

ひと振りで二匹、二振りで襲いかかってきた全部を斬り裂いたが、出血のせいでその瞬間に眼がかすみ、着地に失敗する。

「つつはあ…はあ！こ、これでラルカ七匹目！グリーズルは三匹！」

「残り十三と七！零一度下がって！次はあたしが前に出る！」

その言葉に素直に従い、クリスのそばまで飛びのいた瞬間、今までで最高の速度でサラがグリーズルの群れに飛び込んだ。

今の状態が続いてるうちに強い奴等から先に倒そうと考えたからだ。

「今この一時だけかもしれないこの力！余すことなくあんた達にくれてやるよ！」

最初は断面だけが焦げていたのだが、一振り、一振り増す事にその刀身に炎が宿り始める。

「使いこなせてるとは全然思わないけど今は助かるよ！」

そう叫びながら息をまともに吸うことすらしないでひたすら斬り裂いていく。

グリーズルを四匹斬り裂いたところで、流石に限界がきて、動きが鈍った瞬間グリーズルの体当たりが決まる。

「がはっ！」

口から思いっきり血を吐きながらクリスの元まで弾き飛ばされた。

「どうよ……まだ動けるか？」

あえて大丈夫かとは聞かない、大丈夫な訳がないからだ。だから聞くのは動けるか？まだ戦えるかといった事だけ。

「あ、当たり前だろう？この程度怪我の内に入らないさ！」

肋骨は数本、見ると左腕も折れているだろう、それでもサラは立ち上がり闇者に向きなおる。

サラのおかげで少し回復した雫もゆっくりと立ち上がり、闇者に向かう。

「今我が心、光の元にその姿をここに現す！サンシャインクロス！」

ここにきてようやくクリスが詠唱を終え、ラルカの群れに杖を向ける。

沈黙。

何も起こらない……と思った次の瞬間、視界いっぱい光に覆われた。

だが雫とサラは不思議な事にその光の中、闇者達をしっかりと把握できている。

『グギヤアアアーゴグウウウ!』

無数の断末魔が響き渡りその光が納まると、その場に残っているのはグリーズルが一匹とラルカが三匹、そしてラルリオン。

知恵があるというだけあり、その突然の出来事に困惑しているようだ。

「ひ、ヒーリング……ご、めんな……い、こ……いこ」

雫とサラの身体を温かい光が包んだ瞬間クリスが倒れた。改めて見るとその姿は酷い事になっていた。

手のひらは避け、所々爪も割れている。

体中のあちこちに火傷の跡と小さな傷が多数。

二人よりもさらに重症といった状態になっていた。

「朱華！クリスを頼む！」

「水の精霊よ彼女を癒してヒーリング！」

雫が叫ぶ前から動き始めていた朱華はその声と同時にヒーリングを発動させる。

ただ同じヒーリングであつてもクリスが使つゝ奇跡とは違ふものであり、その効果はクリスのものより弱い。

だが、それをかけ続けられる時間は精霊だけあつて、長い。

「お父様！クリスさんは私がなんとかします！」

その言葉に頷いて、最後の力で掛けられたヒーリングの効果を改めて確認する。

体全体の傷をふさぐことはできなかったものの、多少気力や活力といったものが戻つてきている。

目の前の敵をせん滅するには十分だろう。

と雫は考えていたが、実際その怪我で目の前の敵を倒すのはかなり無茶にも程がある。

だが今の雫には、そんな考えが微塵もなく、出来る！という思いしか浮かばなかった。

それはサラも同じようであり、腕は折れたまま、肋骨もまだ折れたままだろう。

それでももう負けるといった考えは微塵もない。
考えるのは早く倒す、それだけだった。

「サラ！多分全部一気には無理だ！抜かれた闇者は頼んだ！」

そう言つて駆けだす雫。

「任せな！たとえ全部来たとしてもあたしがここで全滅させるよ！」

サラもそう叫び返し、右手だけでその剣を構える。

その刀身には燃えるような炎が纏われている。

「うつらあああ！一匹！二匹！」

一息でラルカ二匹を葬り去ったが、グリーズルがその隙についてクリスに向かう。

「あたしがいるってこと忘れてんじゃないよ！」

ただの袈裟斬り、しかし炎に包まれた刀身により切れ味と破壊力が増しているその一撃は、グリーズルを真つ二つにしその身を焦がした。

「ラスト！……んで後は手前えただけだ！」

そう言つてラルリオンに向きなおる。

後ずさりしながら逃げる準備に入るラルリオン、今の状態で全力で逃げられれば追いかける事は無理だろう。

「わ、れ願う、その身を……つ、なぐ……鎖あれ！」

その時息も絶え絶えなクリスが奇跡を起こした。

その奇跡は緑の鎖。

ラルリオンの身体をその緑の鎖が絡め取る。

ゆっくりと歩を進める雫。

どうにか逃げようとともかくラルリオンだが、クリスの奇跡の力は予想以上に強く、びくともしない。

とうとう目の前まで来た雫。

「これで最後だ……こんな所まで来ちまつた手前え自身を恨みな！」

その声とともに振り下ろされる鎌。

あっさりとその鎌はラルリオンを真つ二つに切り裂いた。

次の瞬間倒れこむ雫。

後ろではサラもドサッという音とともに倒れこんでいる。

「お、わった……けどもう動けねえ……」

雫が絞り出すようにそう呟くと。

「あた、しも、だ……も、うむり……」

サラも限界らしい。

クリスに至ってはしゃべることすらできない状態、先ほど奇跡を起こしたこと自体が奇跡だと思えるような状態だ。

そんな三人にヒーリングをかけ続ける朱華だが、いくら精霊とはいえ限界はある。

力を使い過ぎればその体は睡眠を欲するようになり、それは抗えるものではない。

それに必死に抵抗しようと試みるが、やはり限界を超えてしまった今、抗うことができず、雫の上に落ちた。

かろうじて、全員の出血とクリスの火傷だけは直せたのを確認して眠りに落ちる。

確かに集落自体は潰れ、高レベルの闇者も全部いなくなったが、それでも低レベルの闇者はこの森に存在する。

血の匂いにひかれてか、その低レベルの闇者が姿を見せる。

「……ご主人様に近寄る事は許しません……」

静かに、それでもどこまでも響く様な虹のその声に、低レベルの闇者は怯えるようにその場を後にする。

「こんなことしかできませんが……今この場には絶対闇者は近づけ

させません！」

そう虹は言い放ち、ナイフ全体からとてつもないプレッシャーを放つ。

そのプレッシャーはデスブリンガーと相対した時と違いが解らぬほどのもの。

多数の人間の足音が聞こえてくるその時まで虹はそれをやめなかった。

そして、その光景を最初にみた冒険者は零達三人に向けこうつぶやいた……その眩きには尊敬の気持ちも含まれていたがそれ以上に凄怖と恐怖が強かった。

「化け物……」

〈第三章活動開始！〉其の四（後書き）

三章完結。

次は四章。

今回はほとんどが戦闘描写。

上手くかけているかいまいち自信がありません。

変なところなどあればぜひ御意見などお願いします！

第四章入団希望〜其の一

「月夜の雫」第四章入団希望〜其の一」

「ん……こ、こは……？」

雫はぼんやりした意識のまま見慣れない赤と白の天井を見上げていた。

体の感覚からベッドに寝かされているのは解るが、ここがどこだかを認識できていないようだ。

「お父様！良かった……漸く眼が覚めたのですね！」

「雫様！本当に……本当に良かった……」

枕元から虹の声、目の前に飛び出してきたのが朱華だ。

朱華に至ってはぼろぼろと涙を流しながら雫に抱きついている。

虹も本当に心配していたようで、起きた瞬間張りつめていたこの部屋の空気が一気に緩和した。

「虹……朱華……ここは……俺の部屋……だよな？」

ゆっくりと体を起こしながら周囲を確認し、朱華と虹に同意を求めると、朱華がコクコクと頷いた。

「どうして……っ！そ、そうだ！サラとクリスは！？」

ぼんやりしていた頭がようやく回り始めたらしく、どうしてこんな状態になっているのかを理解したらしい。

「大丈夫です。先程雫様より先に一度眼を覚まされました……その後事情を話し終えた後すぐ、もう一度眠ってしまわれておりますが、お二人とももう傷も癒えておりますのでご安心ください。」

虹がそう言うと、安心したようにほっと一息吐き、改めてどういった状態になったのかを確認していく。

「はい、雫様達があの闇者達を全滅させた後、街から遅れて他の冒険者の方々が来てくださいました。それで倒れている雫様達を町まで運んで頂き、フィアナさんとダーニャさんが司祭様を読んだり、残りの後始末をすべて行いました。」

朱華も目の前で頑張りました！といいながら雫の肩に止まる。

「なるほどな……フィアナとダーニャには迷惑かけたな……助けに来てくれた冒険者達もか……にしても……怪我したとは言え三人とも無事に帰ってこれて良かった……」

雫は虹の説明を聞き終わるとそう呟いて身体の力を抜いて行く。

「すまねえ、気が抜けたら一気に疲れが出たみたいだ……もう一度寝かせてもらうは……後の詳しい話はフィアナとダーニャに起きたら聞くから、伝えておいてくれ……」

「はい！解りました！お父様ゆっくり休んでください！」

「承りました、ごゆつくりお休みください。」

その虹と朱華の返答を聞き、雫は再び闇に落ちて行った。

「朱華……申し訳ありませんが私は動けませんので、フィアナさんとダーニャさんに伝えてきてもらってもいいですか？」

「はい！もちろんです！虹さんはお父様をよろしくお願いします！」

虹がそう言うのと笑顔で頷き、フィアナとダーニャの元へ飛んで行った。

虹も朱華の返答に「任せて下さい」と返事をし、雫を見守る。
雫が次に目覚めたのは次の日の昼になる頃だった。

「な、なるほどね……いや、助かったんだから感謝の言葉以外ねえよ、ありがとな！」

雫は先ほどの説明を聞き冷汗を流しながらも、色々と動いてくれたフィアナとダーニャに礼を言った。
何に冷汗を流したかというと……。

「御主人様！良かったもう起きられて大丈夫なんですね。」

「雫！あんた一番怪我ひどかったって言うのに他の二人と回復が同じくらいってのはやっぱり凄いねえ……まあよかったよ！」

食堂に顔を出した雫は、椅子に座りながら話し合っていた二人に

声をかけ、無事を喜んでもらっていた。

「心配かけたようですまなかったな、サラとクリスはまだ？」

「はい、サラ様とクリス様は先ほど朝食を済ませた後、まだ完全に回復されていないようなのでお休みになりました。」

「まああの怪我を三日で完治させちまった雫あんたがおかしいのさ！」

フィアナの説明に、追隨してダーニヤが笑いながらそう言うてる。

確かに可笑しな位治りが早いので言い返せない。

「まあ……それはいいだろう、んで二人には迷惑かけたみたいだなすまねえ。」

俺がそう言つて頭を下げると、二人揃つて少し慌てたように頭をあげてくれと言ってきた。

「ご主人様！私はいざというときに動くためにいるんですよ、もちろんふだん何気ない時不自由させないためというのもありますが、ですので頭をおあげ下さい！我が主人にそう頭を下げられると私の立場でどうしていいか分からなくなってしまうす！」

「まったく、んな事にすんじゃないよ！私達はもう仲間だろう？ならすまない！じゃなくてありがとつて言ってもらいたいもんだね！」

二人のその言葉を聞き、雫は頭を上げながら、まだ多少硬いが笑

顔で「ありがとう」といいながら、椅子に腰かけた。

「あーそうだな、あんたに話しておかなきゃいけない事と、謝らないといけない事あるんだよ……」

ダーニヤが少し気まづそうにそう言ってきた。

フィアナも少し申し訳なさそうに雫を見つめる。

「何だ？」

雫が短く聞き返すと、二人はお互い視線で合図をとりながら、ダーニヤが説明を開始した。

「んとだな、今回雫達大怪我してただろう？それを治すために高位の司祭様を呼んだってのは聞いてるよな？それでかった費用何だが……三十万シル……すまないが勝手に雫のカードから支払っちゃったんだよ。」

すまない！と頭を下げながらフィアナとダーニヤが雫を見つめる。

「なんだ……それなら逆に俺が礼を言う立場であって謝られることじゃないだろう？ありがとな、んで、その顔を見るとまだ他に話があるんだろう？」

雫がダーニヤ達の顔を見てそう言った。

二人は苦笑を洩らしながら話を続ける。

「そうだよ、続きがあつてそれはそれでよかったんだけど、あんた達の武器と防具、多少メンテナンスが必要だったのと、完璧に作り直さないといけなかったのがあつたんでそれでだね……二十万シル

程かかつちまつたんだ……流石にあの類の材料を揃えるとなるとね……その代りあんたらの武器防具は完璧に修理しといたよ！何とか
雫の財布と今回の報酬で何とかなつただけ……今私達の団の資金
つてのが限りなくゼロに近いのさ……謝らないといけないのは勝
手に雫の個人資産まで使つちまつた事だね、本当に悪かつた！」

そう言つてまた二人揃つて頭を下げる、少しその説明で冷汗を流
しながらも雫は逆に礼を言つた。

これが雫が冷汗を流しながら礼を言つた理由である。

フィアナの説明により、この屋敷の維持は何とか塔への挑戦者に
よる挑戦料で何とかなるが、雫達の生活までだといろいろ難しいら
しい。

かろうじて後二三日は大丈夫らしいが、それ以上だと……と言葉
にならなかつた。

「話は解つた！ひとまず今回みたいな無茶な依頼じゃなく、普通に
問題の起こらないようなレベルの依頼をこなして資金をためる事に
するか。」

雫がそう言つと、ダーニヤとフィアナは頷いた。

「あ！後だね……いやこれは後で雫がギルド行つたときに解る事だ
から今はいいか、まあ雫にとっていい事になるかめんどくさい事に
なるか解らないけどね。」

ダーニヤが何か言おうとして、ニヤリと人の悪い笑みを残しながら
中途半端に話を切つた。

気になつた雫が何度も答えを尋ねたがどうしてもその答えを教え

てくれる事はなかったなので、仕方なくギルドに依頼が何かないかを探しに雫は屋敷を出た。

その背中を見送ったダーニヤの顔は悪戯をするそれ以外の何物でもなかった。

「カランコロン」

雫がギルドに入ると、ざわざわしていた店内が一気に静まり返った。

(……っえ！俺何かしたか！？)

静まり返ったギルドの中にいた人間、全員が雫に視線を集中させている。

改めてその視線に変な汗を流しながらあたりを見回すと、普段ギルドにいる人数の五倍以上の人間がその場にいて、ギルドの中を狭く感じさせている。

(何か……あつたのか？ってか何で俺がこんな注目されてんだよ！)

その視線に辟易しながら、掲示板の前に立ち依頼を確認していく。後ろではざわざわとギルドの受付に人が殺到し、受付が頷くとまたも一斉に雫にその視線が向きなめる。

とても居心地が悪そうに、なるべく気にしないように雫が依頼を確認していく。

確認していると、一枚の依頼が目についた。

「依頼書……ランクC弱」

・場所：街周辺。

・闇者の討伐：街道に出現する闇者の討伐。

・確認された闇者：ライラ三匹、レイラル五匹。

・成功報酬：一万シル＋収集品。

＊上記の完全遂行が任務完了となり、闇者の収集品をもって確認するものとする。

確認された闇者以外においても、街道に現れる闇者があればその討伐、闇者の数において報酬も上下する。

という依頼だ、虹にレイラルという闇者がどういったものかを聞くと。

（はい、レイラルとは大きな鋏が特徴で全長で一メートルくらいの闇者です。攻撃方法がその鋏でのそれだけです、低レベルの冒険者がよくお小遣い稼ぎの為に倒す闇者です、レベルも5とかなり弱いので、雫様達であればいくら数がいっても問題にならないと思われます。）

虹のその説明になるほどなあと頷きながら、その依頼を持って受付に歩く。

雫が歩くのと同時に受付の前にいた冒険者達は道を開けて雫を観察し続ける。

「ラリア、この依頼を受けたいんだが……って何なんだこの騒ぎは？」

受付にはいつも通りラリアが座っていて、俺が行くと笑顔でその依頼を受理していく。

「はい！今ここにいる方々は街の英雄を見に来たんですよ。」

笑顔のままそう言って雫を見つめる。

その笑顔がどこか眩しいほど憧れてる者に向けられるそれに感じ、雫は一步後ずさった。

「え、英雄ねえ……なんだかすごい奴が来てるみたいだな……今ギルドに来てるのか？」

「クスクス、はい、今まさにギルドに来て、皆さんがその方を見ています。」

ラリアの言葉に俺ははて？と嫌な思いが一瞬よぎった。

（いやいや！まて！そんなわけないだろう？偶然、そう偶々で偶然に決まってる！）

「……そ、そうなのかあ……ラリアその依頼早く受理してくれねえか？ちいっとばかり用事を思い出してだな早々に……」

雫が逃げるようにこの場を去ろうとしたが、それが許されることはなかった。

なぜなら突然背後から一人の青年が声をかけてきたからだ。

「あ、あの！？あ、ああすいません大声だしちゃって、月夜の雫のマスター雫さんですよ？僕！コウ」コロって言います！冒険者登録してからまだ五ヶ月の新米でランクEです！それで……そのですね……っつよし！それで！もしよろしければ月夜の雫に入れていただけませんか！僕……強くなりたいんです！」

そう声をかけてきた青年、コウは見た目雫と同年くらい、青色のツンツンした髪が特徴的で得物は片手剣らしい、見た感じだと日本刀に似た感じの剣だ。

身長は雫より高い百八十位で身体つきも細いようでかなりがっちりとしている。

そのコウを待っていたかのように、津波のように周りの冒険者達も我先にと月夜の雫へ入れてくれと押し寄せてきた。

最初に聞いてきたコウはその津波にのみ込まれながらも、しっかりと雫の隣に立って耐えている。

意外としつかりしたその安定感に感心しながら、これはどうしたことかと混乱している雫。

その騒ぎはギルド長のロゼが納めるまで一時間近く続いた。

「なるほど、つまりこいつ等は入団希望者って訳か……」

「そういう事です、全部で五十六名、男性四十、女性十六です。」

ロゼの説明を聞き終え、俺がそう呟くと、目の前に並ぶ壁に見えるほどの奴等が全員俺の方を見ている。

辟易しながらどうしたものかと悩んでいると、ロゼが小声で話しかけてきた。

（雫さん、この者達皆が皆ではありませんがほとんどの者が雫さん

の庇護下に入りたいが為に来た者達です、出来る事であれば、そう言った者達はなるべく見極めて考えた方がよろしいですよ。」

その口ゼの忠告に感謝しながら、俺は目の前の奴等をどうするか考える。

ふっと思いついたことがあったのでもう一度掲示板に向かうと、先ほど見かけたもので素通りさせた依頼書を二枚手に取った。

「依頼書……ランクD弱」

・場所：ディアの森。

・闇者の討伐：レイラル五匹。

・成功報酬：千シル＋収集品。

* 闇者の収集品を持って討伐の証とする。

というものと。

「依頼書……ランクC弱」

・場所：ディアの森。

・闇者の討伐：グリ四匹。

・成功報酬：一万シル＋収集品。

＊闇者の収集品を持って討伐の証とする。

の二枚だ。

雫はこの二枚をリアに受理してもらい、全部で三枚の依頼書を手にとつたの前の前に戻ってきた。

「月夜の雫だ、今回俺の団に入りたいという事で集まったと今ここにいるギルド長のロゼから聞いた、それで、全員を入れる訳にはいけないので試験をしたいと思います。」

雫はそう言つて三枚の依頼書を見せる。

「まず一枚目、レイラルの討伐だ、次に二枚目がライラとレイラルの討伐、最後にグリの討伐だ。それぞれ団のメンバーが一人ずつついでその評価を元に入れるかどうかを見極める事にする！嫌な奴はこの場で先に去るようにしてくれ！受け入れる者は俺の周りに集まつてもらおう！」

雫がそう言つと、十名ばかりの冒険者はギルドを後にした。

残りのメンバーは四十六名、それでもこれだけ残つたのかとため息をつきたくなりながらも雫は説明を始めていく。

「まず各自のランクを教えてほしい。」

そう言つて聞きだしたランクは、Eが一人、Dが四十四名、Cが一名の四十六名だった。

Dランクの奴等は皆どこか自分自身でどうにか頑張ろうといった気概が全くない。

それなのに、一番低いランクのEのコウはこのメンバーの中で一番やる気に充ち溢れ、一番ランクの高いCのビレイとなつた男はどこか雫を試すように見ている。

その二人だけが雫がこのメンバーの中で気に行つたというよりも気になつた奴だつた。

「まずメンバーを分ける！まずレイラルの討伐はDの十八名について行つてもらおう！」

そう言つて適当に十八名振り分けていく。

「次にライラとレイラルの討伐にはDの二十六名について行つてもらう！」

この時点でざわざわと騒ぎ始めた。

それはそうだろう、残つたのがランクEとCの二人だけで、残つた依頼がグリ討伐のそれだけなのだから。

「最後にグリ討伐にEとCが一人づつ来て貰う、ここは俺が担当するので、三人で討伐することになる！以上だ、試験開始は明日午後三時から！街の門の前で集合、遅れたやつはその時点で失格になるからそう思つてくるように！」

レイラル討伐にあてられたメンバーは少しほつとしたようにギルドを後にし、ライラとレイラル討伐を受けた奴等は少し緊張したように後にした、恐らく何名かは来ないだろう。

そして……。

「んでもつてお前達はどうする？明日この依頼受けるのに来るのか？」

雫がそう尋ねたのは、コウとビレイにだ。

「もちろんです！感激です雫さんと一緒に冒険に出られるなんて！」

と素直に感動するコウと。

「受けさせて頂きますよ、貴方の実力が噂通りか……確かめてみたいですからね。」

とこちらもある意味素直に頷くビレイ。

雫は頷くと明日は遅刻しないように言って二人と別れた。

「……お疲れ様でした雫さん、ですがメンバーに相談せず勝手にきめてしまって良かったんですか？」

「いや、メンバーにはもうすでに説明してありますよ。」

そう言っただけでカールドルを見せる。

なるほど、と頷きながら口ゼはいつもの微笑みで答えた。

「さて、俺も明日の準備を整えないといけないんで、今日はもう戻らせて頂きます。」

「はいわかりました、ですが一つだけご忠告を、雫さんあなたは今や冒険者の間では街の英雄です、街の他の人たちにはこのことを伝えておりませんので知らない事ですが……ですが雫さん達を助けに行った団風の守護のメンバーは雫さんの事を……なんといいますか……」

何か言いづらいことらしく、珍しくロゼが言葉に詰まる。

「いいです、そのまんま言ってくださいその方が解りやすいんで。」

雫がそう言っていると、そうですねと頷きながら続きを語る。

「そのメンバーたちなんです、雫さんたちを恐れてます。風の守護も月夜の雫と同じランクCの団です、偶然来たので助けを求めたのですが……それで風の守護のメンバーは総勢十五名、その全員で助けに行き、雫さん達が敵を全滅させていることを確認しました。その現場を見たそのメンバー達が街で雫さん達の事を化け物、人間じゃない……と吹聴しております。恐らく自分達の団である闇者と戦った場合間違いなく全滅したというのがいやでも解ってしまい、それをたった三名で片付けてしまった雫さんたちに怯えているのでしよう、人間自分が恐怖する者に対して行う事がどんなことか解りますか？」

ロゼのその言葉に静かに頷く雫。

「……解っているようですね、はい。排除しようとするか、徹底的に関わろうとしないか、それに取り入ろうとしようかのどれかです。今回風の守護のメンバー達は街にそう言っただうわさをまき散らし排除しようと考えているようです。嫌がらせなどあるかもしれませんでお気を付け下さい。」

「なぜ、そんな事に……」

雫がそう呟くと、ロゼが申し訳なさそうに頭を下げる。

「本当に申し訳ございません、すべて私の責任です。今回の依頼ラ

ンクでいいますとA中クラスのものになるんです。通常ランクAの団となりますとメンバーが三十名以上、最低ランクC以上が規定となります。その中でもA中クラスの依頼を受けられる団になりますとメンバーが四十名、ランクもBとAを中心にしたメンバーの編成でないとかかなりの危険性があるものです。それを零さん達はランクCという団の実力のうえ、たった三名で倒してしまわれました。通常あり得ない事です、私も正直申し上げますと聞いた時には少し怯えました。実際こうして零さん達を知っていなければ風の守護と同じく怯え関わろうとしなかったかもしれない。それくらいにとんでもない依頼だったのです。それを私は零さんたちに押し付けてしまいました。本当に申し訳ございません。」

つまり、普通の人間であれば達成不可能レベルの依頼を、達成してしまったので人外扱いと怯えられ、排除しようと動く奴等が出てきたと言う事だ。

零は解らないでもないけどなと思いつながらも、自分自身がそういう立場になると全く思っていなかったので少し落ち込んだ。

「気にしないでください、結局ロゼさんは受けなくてもいいと言ってくれたのに俺達がそれを受けたんです、責任は俺達にあるんですよ……それに全員が全員そういう思いじゃないというのも解りました、ロゼさんもこうして俺達を心配してくれてるじゃ無いですか、それだけでいいんです。」

零は自分自身に言い聞かせるようにそう言った。

確かに、怯え避けられ排除されようと動かれても、それがすべてではなく、現にこうして、今話しているロゼ、受付のラリア等は決して零達を否定しない。

二人とも真実を知っていてなお、そういう態度でいてくれるので、それが零にとってはかなり嬉しいことだった。

ロゼはその雫の言葉に軽く頭を下げ、自分の部屋に戻っていった。受付からは未だ憧れる者に向けるような視線を雫に向けてくる。確かに……嫌われるのは嫌だが、あそこまで明らかに憧れるのもいささか居心地がわるいなあと感じながら雫は、ラリアに軽く挨拶をしてギルドを後にした。

「人より強い力を持ったことよっての憧れと恐怖……ねえ……めんどくさいな……」

雫はギルドの外、街の中で誰にも聞こえないようにそつ呟きながら屋敷に戻っていった。

〈第四章入団希望〉其の一（後書き）

漸く四章。

そして新キャラ登場！

もちろん雑魚キャラとして数えていたDにも一人隠れ新キャラがいます！

これはこれからの話で出ていきますね！

ちなみに、この話昨日の内に書きあげるつもりだったんですが、書き上げた瞬間間違えて消えてしまいました……バックアップもとっておりませんでした。

泣きながら、書きなおす気も起きず今日になってしまいました遅くなっています。

第四章入団希望の其二

「月夜の雫」第四章入団希望の其二」

「おかえり、さつきカールドルで簡単に話は聞いたけど詳しい話聞かせてもらっていいかい？」

雫が屋敷に戻るとサラとクリスが食堂で紅茶を飲みながら待っていた。

雫が入ると同時にサラがそう言っで雫を促す。

「ああ、さつき軽く説明した所は除くとして、人数は全部で四十六名。E一人にD四十四名、Cが一人だ。テストとして依頼をこなしてもらおうと思ってる。」

そう言っで雫は先ほどの三枚の依頼書をサラとクリスに見せていく。

サラはその依頼書を見ながら頷き、クリスは少し不安そうにその依頼書を手に取っている。

「そのこのレイラルの依頼書をクリスをリーダーとしてDメンバー十八名、そのリストはこれだ。このメンバーと一緒に行ってもらうと思うんだが大丈夫か？」

雫はクリスに向け一枚のリスト表を手渡しつつ、そう尋ねる。

「……はい。確かに私自身少し不安なところもありますけどそれでもこの団のメンバーとして、副団長という地位につかせて頂いた責任もあります。無事にしつかりとやり遂げて見せます！」

そう言っても不安そうなその硬さは抜けなかったものの、その決意はクリスの瞳を見ればどれだけ本気であるかが解る。

まっすぐに、絶対にやってみせるという覚悟を持って雫を見つめる。

それに一つ頷き、さらにもう一枚のリストを渡す。

「頼むな。次にサラなんだが、ライラとレイラルの討伐のその依頼書を頼む。他に今渡したリストのメンバーD二十六名と一緒に。クリスもサラもだが今回は依頼をこなすだけではなく、一応連れて行ったメンバーの動きやその覚悟、家の団に入れても大丈夫だ！と思える人だけを選んでくれ。人が増えればいい事も多いがそれ以上に問題が発生することの方が多くなる。そう言った事も考えて、少しずつでもいいゆくりでもいいからしつかりした団にしていきたいと思う。その為に見極めだけは頼むな。」

雫はそう言って二人を見つめた。

サラとクリスは解ってるといった感じに頷いてその依頼書とリストを見つめなおす。

「まあサラは恐らく大丈夫だろう、その人数と、その闇者であれば何か問題になりそうなことや、気になるところとかあるか？」

「ああ、まああたしは大丈夫さ、あと残ってる依頼書ってなるとグリの討伐の依頼書か、それは雫が残りの二人を連れて行くってことだろう？まあ問題って言うよりも確認だね、その二人雫が見た感じでこのメンバーの中では団に入れる可能性が比較的高そうな奴等っ

てことでいいのかい？」

サラはそう言って、先ほど聞いたEとCの二人の事を訪ねてくる。

「そうだな。俺からみた第一印象だけどEの奴がコウという奴だ、見た感じの体つきとその意志はかなりのものに見えた。実際戦ってみないと解らないけどな。もうひとりのCのやつがビレイという奴だが、こいつは俺の噂が本当かどうか確かめたいといった感じだったな。かなり解りやすい挑発をしてきてたのである意味解りやすい奴だった。こつちこそ本当に一緒に行つてどうなるかわからないところだが……」

雫がそこで言つたん言葉を切り、どう言おうか迷っている。

「雫さんは実際楽しみなんですね。どこか期待しているような、楽しそうな感じが雫さんの口調から感じ取れました。雫さんが感じたのであればきっと大丈夫だと思います。だから変に言葉を選んだりしなくてもいいと思いますよ。少なくとも私たちには……ね？」

クリスがそう言って雫に笑いかけてきた。

少し驚いたようにクリスを見ると、顔を少し赤くしてうつむいてしまった。

その隣でサラは「クリスの言うとおりだよ！」といって豪快に笑つてる。

その二人を見て雫は、少し身体の力が抜けたのを感じた。

「……そうだな、サンキュー。確かに命を掛ける仲間中途半端な遠慮は逆に変か。」

そう言つて雫も軽く微笑んだ。

一通り細かい所を打ち合わせし、ちょうど話が終わったところにファイアナが紅茶を持って現れた。

三人はその紅茶を飲みながら軽く雑談をし、少ししてから明日の準備にかかるため各部屋に戻っていった。

目の前には四十二名の人間。

男もいれば女もいる、冒険者たちだ。

その冒険者達の前に立っているのが雫とクリスとサラだ。

「それじゃあ昨日話した通り、分かれてくれ！」

予想より減った人数が少ないなあと思いながら雫はそう声を張り上げた。

実際内訳を説明すると、クリスパールティーターが十六名。

サラパールティーターが二十四名。

そして雫パールティーターが二名。

クリスの所で二名とサラの所で四名抜けただけでそれ以外は一応装備を整えて集まっていた。

クリスのメンバーは比較的顔色がよく、軽口を叩き合っている姿がちらほらと見えるが、サラパールティーターは顔色があまり良くない、本当に大丈夫なのか？といった感じでサラを見つめている。

そんな中、サラパールティーターに一人だけそんな奴等と違う雰囲気のある奴がいた。

（へえ……昨日みた感じだとあんな雰囲気感じなかったのに……俺もまだまだ見る目がねえなあ……でも、楽しみが一つ増えたぜ。）

そいつを見ながら雫はそんな事を思っていた。

身長はクリスと同じくらいでかなり小さいが、得物が弓。

実際昨日あった時はどこかのほんゝとした感じのイメージしかなかったその少女といってもいい位の子は、今この場に立っているとその瞳に宿る意志の強さをいやがおうにも感じる事ができた。

身長は大体百六十あるかどうか位に、翡翠色の髪をツインテールにしており、昨日までは少したれ目がちだったその瞳は今少し釣り上った状態になっている。

姿はカチューシャに銅の胸当て、翠色のスカートといたたいでたちだ。

サラもその子に気づいたらしくリストを確認している。

「ラマッラカールという子みたいだね、雫もさっきあの子見てたみたいけど……結構いい感じじゃないかい？」

「やっぱりサラも感じたか……ラマって言うんだな、昨日みた感じだとただのほんゝとした感じの印象の子だったんだが……俺も見る目になってねえなあ……俺も今のあの子ならすげえ楽しみだ。頼むなサラ。」

二人はメンバーに聞こえないように小声でそんな話を話しあいながら、自分のパーティーのメンバー達に装備などの確認をしていく。サラとクリスは一人ずつ確認しているようで、まだ終わっていないが、雫のパーティーはただ二人だけなのですぐ終わった。

「コウ、ブレイ装備は大丈夫……みたいだな。ブレイお前は魔法使いだったのか……」

二人の装備を確認すると、コウが刀のような刀剣に茶色のレザーアーマに脛当てと小手に似たレザー系の物。

ブレイは漆黒のマントと青と白の旅人の服のような感じの服に、

棒に蛇がまきついたような感じで下から渦を巻いている杖だ。

「そう言えば言ってますでしたね。それでも今まで色々こなしてきてますので、今回は楽しみにさせてもらいますよ。」

雫のその言葉にそう返事をし、挑むようにこちらを見つめている。苦笑を洩らしつつ、コウを見ると、こちらはこちらで物凄く気合いが入った感じだ。

「雫さん！今日は頑張ります！よろしくお願いします！」

そう言ってガバツと頭を下げる。

こっちはこっちで大げさだなあといいながら苦笑を洩らし、サラとクリスも装備の点検が終わったのを確認すると、ディアの森に向けて歩き始めた。

今回三人とも同じ森での戦闘なので、いざとなれば助け合う事が可能だ……という事も考えこの依頼を受けたのだ。

実際今回は前回のよう消耗をそこまで考えないでいいので、最短距離で歩いて行くと、一時間ほどでディアの森に着いた。

「よし！じゃーここで分かれるぞ！サラ、クリスくれぐれも無茶や無理はしないようにな。困った時はカレードルで呼び合うように。」

「ははは！それは雫あんに一番言いたい言葉だよ。散々今まで無茶無理してきたのはこのドイツだい全く。雫こそ危ないと思った時は呼んどくれよ！」

「そうですよ！雫さん程無茶な事を、無理な事をしてしまう人を私は知りません。本当に少しでも危険を感じたら呼んでください！すぐに駆けつけます。」

注意をした雫だが逆に注意をされ頭を掻きながら参ったといった
感じでうなづいた。

三人がそう確認し終わると、各パーティーメンバーを連れて森の
中へ入って行った。

↳第四章入団希望↳其の二（後書き）

少しばかり続く感じ何で一氣にその後までアップします。

第四章入団希望の其三

「月夜の雪」第四章入団希望の其三」

「クリス」

それほど深い森の中ではないですが、私にとって未だ恐怖を拭い去ることのない場所。

そんなところに未だ自己紹介しかこなしていない私と同じランクの冒険者達十六名でレイラルが目撃された地点に向けて歩き続けます。

「皆さん大丈夫ですか？何か気になる所や、危険な雰囲気を感じたらすぐに言ってください！後十分ほどで目撃情報のあった地点に到着しますのでくれぐれも気を抜かないようにして下さいね！」

私はこのパーティーのリーダーです。

同じランクの人に偉そうにこんなことを言う他の人達是不愉快に感じる人もいるでしょう、私自身かなり心臓がもうバクバク言ってます。

それでもリーダーを寧さんに任されたんです、弱音をはいて、失敗するわけにはいきません。

こうやって任されたという事は信頼されているという事だと私は思っています、それに答えないで副団長や団を名乗ることなんておこがましい事だと思うからです。

「（……にしてもまあ大丈夫なのかよあんな餓鬼でよ……まだあのサラとか言う女剣士や団長の事とか言う奴なら安心できたけどよあ………ったく外れ引いちまったな）」

「（そうだな、それにこいつ俺らと同じDランクだって言うじゃないか、そんな奴にいちいち指示されても……信用できねえってな………ったく、いざとなったら俺達でやるか）」

確かに私は見た目もランクもそう見られても仕方有りません。

それでもそう言われると少なからずショックを受けるという事をこの方たちは考えないのでしょうか……。

少なくともこんな方達は団に入れる事は絶対にはないですね。

私はリストから二人の名前を見つけるとチェックマークを付けておきます。

「つつ！？気を付けて下さい！近くに闇者がいます！」

チェックマークを付けていると、前方と左右から鋭いさっきの籠った視線を感じたんです。

それを感じ取れたのはどうやら私だけみたいで、ほかの冒険者の人たちは未だ何を言ってるんだ？みたいな目で私を見つめてきます。

（そんな！何で気付かないのこの人たちは！？）

私はそんな後ろの冒険者たちに文句を言いたくなかったがそれどころではなかったので、詠唱に入りました。

そこに至つてようやく数名の冒険者の方が私と同じようにその殺気に気づいたようで、戦闘態勢に入りますがもうすでに遅いです！

『ギヤアアグウウウ！』

そう言って襲いかかってきたのはレイラル。

その鋭い鋏を持って私たちに襲いかけてきます。

その数十五。

（報告を受けた数より多いじゃないですか！？）

「今この地にその御身の奇跡を具現化させたまえ！アースグレイブ
！」

先ほど私に文句を言って、自分達がどうかしないといけないと言っていた二人は、突然襲いかかられ腰を抜かして座り込んでいました。

思わず舌打ちをしそうになってしまい、それをギリギリで止めた私は、詠唱の終わった奇跡をその二人の左方向から襲いかかってくる三匹のレイラルに向けて唱えます。

「皆さん！円を組んでください！囲まれてます！動けない人はその円の中に入れ守れる体制を整えて下さい！」

そう言ってまともに動けたのが八名、三名は（先ほどの二人を入れ）突然の奇襲によって腰を抜かしていますし、残り三名は襲いかかってきたレイラルの攻撃を受け武器を落とし茫然自失となっています。

残り二人は武器を持っているものの、その数の多さに怯えて身動きが取れなくなっています。

「つつ！とりあえず！動ける今この八名でまずその動けないでいる八名を囲むように円陣を！御身の軌跡たる風の刃よ今この時目の前

の悪しき者に罰を与えよ！ウインドセイバー！」

私に襲いかかってきた一匹のレイラルを風の刃で切り裂きながら、私も円陣の一部として動きます。

他の冒険者の人たちも、何とか目の前に襲いかかってきたレイラル達を倒し、円陣を組むことに成功しました。

「残り七匹です！油断さえしなければ問題ありません！落ち付いて対処していきますよ！」

私はそう言つて、襲いかかってくるレイラル達を風の奇跡や雷の奇跡、土の奇跡を使い倒していく。

他の冒険者の人たちは最初の奇襲で予想以上に混乱しているようで、一応倒す事は出来ていても剣や斧を無茶苦茶に振り回しているので逆に仲間に被害を与えそうになっています。

まだ辛うじて仲間の被害は軽いかすり傷程度ですが、このままだと闇者にではなく同じ冒険者の仲間に傷つけられる可能性が高いです。

「落ち着いてください！もう残りの敵も三匹です！落ち付いて自分を保つて下さい！そうすれば絶対にか……」

そんな！？

「う、うわああああ！？た、助けてくれ！？」

無茶苦茶に振り回しつつ、尚二匹のレイラルを倒した冒険者達でしたが、突然その背後からのしのしと歩いてきたグリを見た瞬間、自分達の武器を闇者に投げつけて逃げ出してしまいました。

今この場に残っているのは腰を抜かした三人と私だけです。

先ほどまで怯えていた二名と武器をとり落とした三名も、戦っていた八名の冒険者の人たちと一緒に逃げ出してしまいました。

「わ、我思う、我願う！今この時一時の奇跡の元に我等を守りし大地の奇跡よあれ！アースウォール！」

私たち四人を囲むように土の壁が現れ闇者から姿を隠しました。

「はあはあはあ！お、お願いします！せめて立ち上がり逃げる事だけでもして下さい！」

私は荒くなつた息を懸命に整えながら、未だ腰を抜かしている三人にそう言いました。

「そ、そんな事言つたつて！たてねえもんはたてねえんだよ！」

「そうだ、そ、そうだ！お前が悪いんだ！こんな森に俺達をつれてきやつて！」

「……た、助けてくれ！？」

私はした唇を噛んで其の三人から視線を外しました。

私は冒険者という者に少なからず憧れに近いものを持っていた。

雫さんやサラさんと出会いなおその気持ちは強くなってたんです。つい先日の街を守るために立ち上がってくれた二人、私を助けてくれた二人、そう言ったものこそ冒険者で私もこうなりたいと思っていました。

だからこそ今こうして私の後ろにいるような三人が同じ冒険者だと思つと、悲しく、とても悔しいです。

「……今はそんなときじゃ無いですよ！残りはレイラル一匹とグリが一匹だけなんです！なんとしても……月夜の雫の名に懸けて私がなんとかして見せます！」

そう覚悟を決めた私は今唯一まともに行える範囲系の軌跡をおこすために少し長めの詠唱に入ります。

このアースウォールはレイラル一匹の攻撃であれば五分程は持つはずですが、それにグリ of 攻撃が入れば恐らく持つて一分ほどでしょう。

私の詠唱にかかる時間が少なくても四十秒……ぎりぎり間に合うかどうか……いえ、間に合うようにやるだけです。

「この空を覆いしその風よ、この台地に廻られしその水よ、今我願うは、その奇跡。」

……流石に……私のレベルですとこの詠唱はつらいものがあります、この短い詠唱だけでかなり力が抜けてしまつて今にも座り込んでしまいたいくらいです。

「風より出でしその刃、水より出でしその激流、今我思うは、その奇跡。」

……もう少し……です。

「風の刃と水の激流たる御身の奇跡今この地にて具現化させ悪しき者への断罪を行いたまえ！」

……。

『ドゲン！？』

「風水の奇跡！シルフィルトレント！」

土の壁が崩れると同時に辛うじて間に合った軌跡が目の中に迫っていたレイラルとグリを飲み込んでいきます。

噴き出すような水の砲撃に風の刃が組み込まれたその奇跡はその水圧で敵を吹き飛ばし、潰し、その刃で切り裂きます。

範囲奇跡とはいえ、前方にしかその奇跡は向けられないので、今更に考えるとかなり危ない掛けでした。

目の前には水圧でつぶれ、風の刃で切り裂かれたレイラルとグリが倒れています。

それをしっかりと確認して私はようやく腰をおろして一息つきました。

無理無茶をして自身を傷つけるやり方であれば他にも方法はありますが、自分自身が無事でなおかつ意識を保ち、後ろの三人も守らなくてはいけない状態であればそんな無茶出来るわけもなく、その状態で出来る奇跡があれば一つだったので仕方ないとは言え……今更ながらに震えと冷汗が止まりません。

ただ、私はまだ仕事を全部全うしていません、何とか立ち上がり、倒したレイラルとグリの一部を袋に入れ、三人に向きなおります。

「私の力では貴方達を街まで運ぶようなことはできません。まだ立ち上がることもできませんか？」

私の言葉にただひたすらコクコクと頷く三人。

私はため息をつきながら、カードルで雫さんとサラさんに連絡して今の状況を伝えました。

『解った！俺達の方は今無事完了したから今から向かう！クリスよ

く頑張ってくれた！』

『あいよ！あたしの所ももう終わるところだから、すぐ向かうよ！にしてもそいつらにしても他の奴等にしても情けないにもほどがあるね！って言ってもこっちも似たようなもんだから何にも言えないんだけどね……一先ずつと！てっええい！……すまないね、一先ずもう数分で終わるからそうしたらすぐ向かうからそこで待ってて！』

という言葉を受けました。

私は二人の言葉を信じて、三人を木の陰に移し、私も少し離れた当たり全体を見られる位置に腰をおろして一息つきます。

それでもお二人が来てくださるまでは絶対に気を抜いたりだけはいけません。

私の仕事は最後街にこの闇者達の一部を渡すまで終わりじゃないからです。

でも……本当に疲れました。

雫さんの言っていた、しっかりした団を作る、改めて私も実感しました。

今私と一緒に来た冒険者達みたいな人では私でも安心して仲間と呼べる自身はありません。

改めて団の仲間となる人がしっかりとした人であればいいと思うながら、私は二人を待ち続けます。

それから十分ほどで雫さん達三人とその後更に十分ほどでサラさん達二人が来てくれました。

それから、雫さんとコウさん、サラさんが一人ずつ人を背負い街に向かう事になりました。

結局森から出た瞬間三人は自分で歩くことができるようになり、逃げるように街に向って走っていきました。

サラさんはかなりご立腹のようで街で見かけたらどうしてやるのか！等といったましたが、実際そんなことする人じゃないのはあま

り長い付き合いとは言えませんが私にでも解ります。
そんな軽口を叩きながら私達は街に戻りました。

ゝ第四章入団希望ゝ其の三（後書き）

もう二話。

第四章入団希望　其の四

「月夜の雫」第四章入団希望　其の四」

「サラ」

さてさて、獲物自体は問題ないけど、連れてきたこいつ等がどうなるかが問題だねえ。

まあ……あたしが見る限りじゃ闇者と相対して逃げ出さない奴は五名位か……せめて腰とか抜かさないで逃げてくれれば助かるんだけど……何とかしてほしいね。

「サラさん、後ろの方で二名抜けて街に帰えられたみたいです。」

「おっと、気づかなかった……よく気づいたねあんた、えっとラマだっけ、助かったよ。」

本気で気付かなかった、この子意外といい感性してる、こりゃ雫じゃないけど楽しみだねえ。

「さあて！ここでもう一度だけ聞いておくよ！後五分もすれば狩場に到着する！そこまでいけばもう途中で腰抜かしたりした奴を助ける余裕なんてなくなるからね！自身のない奴、覚悟のない奴はここで引きかえしな！」

私は振りかえり残りの奴等に声を大にして最後の忠告をしてやった。

ひと陰に隠れるように立っていないながらその視線に宿る意志……私はやる！といった覚悟の籠ったそれは隠しようもなく私を楽しみにさせてくれる。

（いやあ本気でいい子が来たもんだね！雫も今日眼をつけたみたいだけど、この子はあたしが見極めさせて貰うよ。）

「……お、俺すいません！ここで抜けさせて貰います！」

一人の冒険者の男がそう言って走って逃げだすと、それに続くように「俺も！」「私も！」といった感じで一斉に逃げだした。流石のあたしも少し茫然としちまったね。

いやだつてさ……。

「残ったのが一人ってどういう事だいこれは？」

そう残ったのがラマ一人だけって……情けないにもほどがあるんじゃないかい？

「……覚悟のない人にいられるより、いない方がいいですよ。」

「あんたも意外と辛辣だねえ、まあ確かにだけどさ。」

ラマのその言葉にヒューと口笛を吹きながら答え、仕方ないんで二人で行くことにした。

「んでさ、ラマあんたはライラとの戦闘経験は？」

「ありません、レイラルは一人で最高四匹までなら相手にできます。グリも一度だけ戦ったことがあります、一人では倒せませんでした。」

なるほどなるほど。

実際ランクDでレイラル四匹をソロで倒せるんならたいしたもんだね。

グリは流石にねえ……あたし達見たいに武器が揃ってるってんならまだしも、普通の武器屋の武器じゃ少々荷がおもいかね。

「一緒に行ったパーティの人が留めの一撃を持って行ってしまい、結局二人で倒したことになるってしまいましたので……」

……おお！いいねえ！こういうの好きだよあたし！
ランクDに何でいるのかが不思議なぐらいの実力だね。

「なるほどね、でもさ、なんでそれだけの実力があって未だランクDにいるわけ？」

「……依頼……受け忘れて……」

ごめん、思わずふいちまったよ。

確かに高レベル闇者を倒せば依頼を受けずともランクを上げる事は出来るとは言え、一匹だけじゃさすがに無理だしね。

「ああ、ごめんごめん、悪気があったわけじゃないんだよ。家のリーダーと微妙に抜けてるところが似ててね。」

そう、咄嗟に思いついたのが雫のことだった。

あいつも何気に可笑しな実力を持っているにもかかわらず自分自

身たいして強くないとか思ってるし、後一步って所で抜けるところが多いからねえ。

「そうなんですか？リーダーといえますと雫さんの事ですよ。あのデスプリンガーをただ一人で倒したという噂の……」

「そうそう！まあ噂っていつでも、完璧な事実なんだけどね。実際見てみないと信じられないと思うけどさ。」

私がそう言うと、初めてここで吃驚したような表情を見せて、「本当だったんだ……」と呟っている。

そりゃそうだよ。

あたしだって、実際見た人に直接事実だって聞かない限りただの噂とは思えない話だし。

「すごい人なんです……雫さんって。」

……まあ確かに凄い奴だよ。
いろんな意味で。

「まあ実際団に入れば否が応でも雫と付き合っていくことになるんだ。楽しみにしときな！」

まあこの子は入団確実だね。

実際あの場で逃げなかったのもそうだし、今こう話しながら歩いてるにもかかわらず周りにきちんと意識を向けて闇者の襲撃に備えてるし。

「……なんだかもうすでに入団決定してるみたいに聞こえたんですけど？」

はて？といった感じに首を傾げながら聞いてくるその様子に苦笑を洩らしながら、「後の楽しみだよ。」とだけ言って剣を構える。あたしに続くように弓を構え視線を闇者がいるであろうその先に向ける。

「流石だねえ、気づいたかい。」

「はい。これだけ荒々しくこちらを襲う気満々であればいやでも気づきます。」

そうでもないんだけどね。

実際気づかない奴等の方が多さ、さっきまでいたやつらなら絶対気づけないと思うよ。

まあそんな事は言わないけどさ。

「さあて！それじゃあいつちよいきますか！気を付ける事はライラのスピードのみ！動き一度見切ってしまう後はどうとでもなるから落ち着いて行きなよ！」

あたしはラマにそう言っただけで前方にいるであろうライラに向って一気に詰め寄る。

奇襲をかける予定だったであろうライラは逆に奇襲をかけられ、咄嗟に反応ができなかったみたいで、あたしの一撃で吹き飛び、木に激突してそのまま絶えた。

「……いい感じだね！あのスピードに弓を合わせられるんならかなりいい腕だ！」

あたしの後ろから襲いかかってきたライラをラマの弓が射抜いた。

流石に仕留めるまではいかなかったまでも、横っ腹につきさったから、機動力なんてもう皆無だろうね。

ほら、動きが鈍くなった瞬間に奇麗にずがいに一発決めて終わらだ。

「命中精度も高いつと……どこまで高スペックに出来てるねつと！」

あたしはそう言いながら横から襲いかかってきたレイラルを一刀のもとに切り伏せ、ラマと合流する。

「……私自信命中制度と動体視力には自信がありますので……ただひとつ言っておかないといけないのは……っは！」

ラマは咄嗟に現れた大きな影にまた一本の矢を打ち込んだ。

「………少しでも硬い敵にあたると、その皮膚を通すだけの力がないんです。この通りに。」

現れた影はグリ。

大きさ二メートルくらいの熊。

実際グリーズルの弱いバージョンってやつだねえ。

それでも比較的その皮膚は硬い、でもそれほど硬いつてわけじゃないんだけど……まあ欠点がなかったら逆に可笑しいからいいか。

「なるほどね！これからはもう少し力をつけるようにしないといけないねえ、だありやつ！」

矢をはじいたグリがラマに襲いかかるうとしてきたんで、思いつきり吹き飛ばしてやった。

流石に一撃で死ぬ事はなかったか。

まあ……振り向きざま腕だけで振ったんだから威力なんてほとんどないよねえ。

「……はい、最近は筋トレするようにしてます。今は一先ず……はあああつ！……こんな感じで通せそうな場所を狙って何とかする方向でカヴァーしてます。」

気合い一閃って感じかね？

グリの目に吸い込まれるように一本の矢が突き刺さった……ってよくあんなところ狙えるねえ、その器用さがうらやましいわ少し。

「さあて、状況整理するよ。今ライラ二匹とレイラル一匹、そして何故かグリが一匹いたね。本当であれば後ライラ一匹とレイラル四匹で終わりの筈なんだけど……」

「明らかにこの殺気まがいの視線の数と一致しませんね、少なく見積もっても八匹くらいはいそうです。」

おいしい！九匹なんだよね。

でもそこまで把握できるんなら上出来か、にしても恐らくライラが残り二匹にレイラルが六匹。

……あと一匹結構やばい感じがするから出来るんなら逃げたいところだけど……。

「……サラ……さん。一ついいですか？」

ゴクリと唾をのみ込みながらラマがあたしに近づき、少し震えながら視線を可笑しい殺気を放つ方向へ向ける。

「気づいたみたいだねえ、あいつは結構やばい感じがする、あたし一人じゃきついかもしれないから、隙について逃げるよ!」

「は、い。私……にとって……あのプレッシャーだけで、結構きつい、です。」

少し息を乱しながらそれでも気丈にしっかりとその視線はその方向へ向けている。

「声を出せてるだけでも上出来さね!あたしだって実際今すぐにも逃げだしたくて仕方ないんだからさ!」

励ますつもりで少しおかしい位のテンションでラマの肩を叩いてやった。

実際あたしも結構緊張してるんだよね。
明らかにグリーズルより強敵だったのは間違いないし。

「つつ、つは!」

集中していない左から突然襲われ、少し焦りながらも正確にその眉間に矢を吸い込ませる。

襲いかかってきたレイラルはその一矢の元絶命し、それを皮切りにレイラルとライラが一斉に襲い掛かってきやがった。

「うらあああ!ライラは引き受けるから、何とかそっちのレイラル五匹頼むよ!」

確か四匹ならとか言ってたけどこの際頑張ってもらっしかない。
頼むよ。

「任せて下さい！無傷で倒せるのが四匹だけで、実際まだまだ数をこなせます！」

そう言つてまた一匹と倒した。

「よつし！いい返事だ。それじゃああたしが倒すまでに五匹倒してたらそれで完璧に団の入隊許可してあげるよ！」

そう言つてライラの爪を交わし距離をとる。

流石にあのスピードを真正面から対応するにはあたしの早さじゃ追いつけない。

なら……。

「狙い通り！」

一歩下がった瞬間、草むらに隠れていた一匹のライラが背後から飛びかかってきたけど、これを狙ってたんだよね！

「はい一匹目！」

「私三匹目です！このまま行きます！」

ありや、これは本気で負けそうだね。

正確さが半端ないよ、ほとんど一矢の元たおしてるじゃないかなあなんてね。

「残念、あたしは二匹目も終わりだよ！」

速さについて行く事は出来ないけど、その速さに対応する事は出来るんだよ。

早さに追いついて斬るんじゃない、その速さで剣にぶつかつてくるように構えればいいだけなんだからね。

「……もう少しだったんですけど……つつつつ!？」

残念そうに最後の一匹を倒して近づいてこようとしたラムが一気に前筋力を使って飛びずさった。

草むらから出てきたそいつは襲いかかって来たわけじゃない。

ただ……そうただ、視線をラムに向けたただけだ。

それだけで本能的にそう言った行動に出たんだろう。

あたしも思わず剣を構えて、一歩後ずさちまったしね。

「人間どもか、今我は争うつもりなどない、ただ暇つぶしの散歩にきているだけだ。我と戦うつもりなどないのであるう？ ならば行くがよい。」

そう言つてそいつはあたし達の前から去つて行つた。

「……………つつは、はあはあはあ!？」

ラムは思わず呼吸まで止めてしまっていたようで、姿が見えなくなつてそれを思い出した見たいだ。

かくいうあたしも、實際手のひらには汗がびっしり、背中も氣持ちが悪い位汗をかいているよ。

「……相手が本当に知能の高い闇者で、それも戦いに酔つたやつじやなくて助かつたねえ。」

あたしが剣を杖によりかかり溜息をつく、気が抜けたようにラムがその場に座り込んだ。

「私……初めて視線を向けられただけで死んだと思いました。あれ……何なんですか？」

ラムが知らないのも無理はないね。

あたしだって辛うじて名前を知ってるだけで、実際見たのなんて初めてなんだから。

「あいつは、ケンデウスって化け物さ、レベルだって未確認の本気の化け物だよ。」

そうあいつ、あの二メートルくらいの身長に、人と似た顔立ちと体型。

その上人間以上の知能をもち、全身体能力が、人間の五倍以上ある化け物。

実際街中であの雰囲気もなく歩いていれば、闇者だと気付かない可能性もあるくらい人そのまんまの化け物。

「……レベル未確認なんて……神話の話に出てくる闇者レベルってことじゃ無いですか……よく私たち生きていられましたね……本気で今、信じてませんけど神に感謝してもいいかもしれないって思いました。」

クリスが聞いたら少し頬をふくらませるかもしれないようなことを言いながら、少し笑いがこぼれたところを見ると、多少精神的に戻ってきたみたいだね。

立ち直りも早いのは冒険者にとっていい事なのか悪いことなのか。

「おっと……」

「？」

なるほどね、クリスも無事依頼終了したみたいだね。

にしても……あたしんとこの馬鹿達も情けなかったけど、クリスんとは話にもならないね。

きっとクリスの見た目を馬鹿にして、目立とうとした馬鹿なんだろうけど、腰抜かして助けを呼ばないと帰れないなんて話にもならないじゃないか。

「つつてええい！」

びつくりした、木の上からレイラルが一匹襲いかかってきやがったよ。

咄嗟に反応できたからよかったものの、下手したら大怪我してたね。

ひとまず、クリスと通信を終えたあたしは、ラマに言いながら闇者の遺品を集め、クリスの元へ向かう事にした。

「さあつて、ラマ、これからよろしくね！」

「……は、はい！よろしくお願いします！」

あたしはこうして、ラマの入隊を許可して、二人で走りながらクリスの元へ向かった。

ゝ第四章入団希望ゝ其の四（後書き）

残り一話。

第四章入団希望〜其の五

「月夜の雪」第四章入団希望〜其の五」

「雪」

「ちよまてやごらあああ!?!」

今の状況を説明してやろうか?
ああしてやるよ!

「つつ、コウ!ビレイ!」

今俺達の現状は。

「はい!、ビレイさんお願いします!」

「ま、任せろ!」

分かれた瞬間、何やら多数の殺気がするなあと後ろを振り向いて。

「だああああ!何で俺いつつもこんなんばっかしなんだああああ
!?!」

ずらりと並ぶ鉄の群れがいた。

「雫さん！いつもこんなことしてるんですか！？流石ですねええええ！」

重なり合う視線と視線。

「……今我が欲するは聖なる雷！ライティングウェーブ！……ってキリがないですよ！」

愛想笑いする俺達。

「解ってる！けど適度に振り払いながら逃げるぞ！？」

通じ合う心！？

……なんて、んなわけあるかあああ！？

そのまんま襲われてるわ！

数を数えるのもばかかしい位のレイラルの群れ。

俺だって既に二十匹は倒してるぜ！

「僕初めてですこんなに倒したのお！八匹目ええええ！」

「私も初めてですよ！？こんなむちゃな戦い！ライティングウェーブ！私で十三匹目です！」

まあ慌ててる振りもそろそろいいかね。

ぶっちゃけ何とかなりそうだから。

にしても、コウの攻撃凄いな。

居合だろあれ。

速度はまだただけど、その刀剣の切れ味はかなりのものだし、ブレもあまりないせいかな、一刀の元しっかり倒せてるのがすげえ。

凄いと言えばビレイもだな。

あいつ走って逃げながら器用に詠唱までこなして敵倒してるんだからよ。

イメージ的に魔法使いつてのは落ち着いて集中し、その場にとどまらないと魔法使えないのかと思っただけど、俺の勘違いだったみたいだな。

「にしてもすげえなあ、二人とも。コウは速度がもう少し欲しいところだがそれでもしつかり一刀の元敵を斬り伏せてるし、ビレイは俺てつきり勘違いしてたぜ、魔法使いつてのは落ち着いて、集中しないと魔法使えないと思っってからな。固定砲台みたいなイメージがあった。」

「あ、ありがとうございますうう！って何で雫さんそんなに落ち着いてるんですか！？」

「私のこれは特殊なだけだ！何ですかその落ち着きは！？下手したら死ぬんですよ！」

なるほど、ビレイはやっぱり特別ってか特殊？よくわからねえや。まあ後で聞くとして。

「いやさ、最初二人がものすつごく慌ててたから、悪ふざけで慌ててるふりしちゃったけど……ぶっちゃけあれくらいならなんとかなるだろう？。」

実際の数解らないと言ったものの、逃げて倒しながら数えたところ、正確ではないが残り六十匹くらいしかないはずだ。

「……何ふざけてるんですか！そんなわけないでしょう！あの数です

よ！？普通に戦って勝てるわけがない！」

「いえ、でも雫さん達はあの依頼をこなした方です、もしかして……」

「こなしたとしても数の暴力に勝てるわけがないだろう！」

さてはて、喧嘩というか、少し言い合いが始まったし、そろそろ狩場にもついちまうからそろそろ決めるか。

「んじゃまあ後百メートルくらいで狩場予定地だし、そろそろ決めるか。」

俺がそう言っで立ち止まると、慌ててコウとビレイも立ち止まる。

「何止まってるんですか！雫さん死にますよ！？」

「何するつもりですか！？いくら貴方が噂通りだったとしても一人であの数を倒せるわけがないでしょう！？」

そう、俺一人なら倒せないだろうな。

まあ死ぬことなく逃げる事は出来るかもしれないけど……あくまでもただけどさ。

「まあな、俺一人なら殲滅するのは難しい！だけどよ、今俺は一人じゃないだろう？」

そう言っでニヤリとコウとビレイを見つめる。

コウは……少し沈黙した後、覚悟を決めたかのように俺に頷き、ビレイはコウが頷いた後、溜息をつきながら「雫さんはいつつもこ

うなんですか？」といいながらも参戦を決定した。

「はっはっは！まあこんなもんだな大概。もし俺の団に入るんならそれなりに覚悟しておけよ！と朱華頼む！」

「はいお父様。大地の精霊よ今こそその御力をこの大地に現し、悪しき存在の歩みを止めよ！アースバインド！」

おおう！すげえレイラル達の前に巨大な土の壁出来やがった！

それに激突させてあいつら止めやがったぜ！

いや実際、物凄い音だった。

聞いたことねえけどきつと、爆弾が爆発したらあんな音になりそうだな。

「精霊魔法！？雫さんが使った……わけではないんですね、その妖精ですか。」

物凄く驚いたように俺を見たビレイは、俺の肩にとまった朱華を目にして、少し落ち着いたようだ。

「はい、今のは私です、朱華と申しますのでよろしくお願いします。」

「は、はい！僕コウです！コウ＝コロです！よろしくお願いします！」

朱華のその言葉に少し緊張して答えるコウ。

「朱華さん、よろしくお願いします。私はビレイ、ビレイ＝ローラんです。」

意外にビレイも素直に返事をした。
意外につてのは失礼か。

「さあつて、自己紹介が終わったところであいつらを始末するとしますかね。朱華残り何匹だ？」

「はい！残り四十匹といったところです！すいません、私のアースバインド限界みたいです、崩れます！」

俺はその朱華の言葉と共にその土の壁に走り始めた。
手にはもちろん俺の相棒である漆黒の鎌を装備している。
とても手に馴染むこれは、未だ二度しか本格的に使っていないにも関わらず、もうずっと共に闘ってきたかのように感じる。

『パリン！』

「意外と音奇麗なんだな。」

ガラスが割れたような音とともに、土の壁が消え、目の前にレイラル達が現れる。

俺は全力で鎌を真横に振るい、目の前のレイラル達を切り裂いた。

「おおおらあああ！？新記録！八匹一気にいったぜ！」

そんな事をのたまいながら一度距離をとった俺の後ろから、コウが一步踏み出し、俺に襲いかかるうとしたレイラルを斬り伏せる。

「流石です！噂はやっぱりただの噂じゃなく、本当のことだったんですね！」

懂れてますって視線が強化されてるよおい。

くすぐったいからやめてくれ、武器が凄いだけなんだったの。

「聖なる雷、我の名の元、今こそこの地に降り注げ！ライトニング
レイン！」

おおー！雷の雨か！

空から降り注ぐレーザーの攻撃みたいですね。

「……確かに、噂が虚偽だった……ということはないみたいです
ね。まだ完全に信用したわけではありませんが。」

そう言いながら、ビレイは俺を一度見るとまたレイラルに向き
な
おる。

「流石だなあ、今ので一気に半分になったぜ。残り一気に行くぞ！」

そう言った俺に続いてコウが走り、その後方でビレイが魔法を唱
える。

朱華は暇そうに俺の肩に止まったままだ。

こうして、その群れとの戦闘は本格的に始めて十分もかからない
で終わっちゃった。

「さあて、収集品だけあつめるぞ、朱華さつき逃げながら倒した
ときの奴、どうした？」

「ここに集めておきました！」

「でかした！」

そう言って頭を軽く撫でてやるととても嬉しそうに俺の肩の上で羽根を揺らしてる。

「集めるのも大変そうですね、と愚痴を言っけても仕方ないですし集めましょうか。」

一番初めに動き始めるのがやはりコウ、めんどくさそうにそれに続いてビレイも集め始める。

ひとまず全部集め終わると、俺は改めて二人に聞いてみた。

「さて、まあ解つてると思うけど、あそこにグリが五匹いる。今ならまだ引き返せるけど……二人とも付いてくるか？」

「はい！もちろんです！僕強くなりたいんです、雫さんみたいに強く！」

「もちろんですよ、まだ雫さんの実力を本当に確かめたわけじゃ無いですからね、今度の戦いで見極めさせて頂きます。」

二人とも逃げる気は全くないと。

にしても強く……ねえ、確かに武器は強いけど、俺自身なんて少しばかり他の人より身体能力が上なだけで、そんなんでもねえんだけどなあ。

どうしたもんやら。

まあ今はいいか、グリ討伐始めるとしようかね。

「オーケイ、んじゃまあ……行くぞ！」

「まずはこの距離、まだ向こうには気づかれてないので私が先制攻撃をしますがよろしいですか？」

「オーケーオーケー、いっちょ派手なのいったれや！」

なぜにそんな話し方になるんだ？といった感じに二人が見てくるが無視。

「……はあ、行きます！我が思うはその雷、我が願うのはその炎。重なり合うその二つ、今この場にて再現し、悪しき存在への鉄槌となせ！ライトニグボール！」

見た目普通の雷の玉みたいに見えるが……。

飛んで行った先の当たったグリを見ると、当たった瞬間にしびれ、破裂し、その瞬間に……溶けやがった！

「今のは実際かなり集中しないといけないんで、戦闘中は使えませんが、一撃で倒せる魔法はないんで私は足止めと牽制に務めますがよろしいですか？」

俺は思わず頷きそうになったが、これはあくまで二人の入団試験を兼ねてる事を今思い出した。

「いやだめだ、俺も今頷きそうになったけど、二人の試験でもあるんだから、とりあえず俺が二匹倒すまでに各自一匹ずつ倒せればそれで合格！倒せなかったら……その時はその時でまた考える！」

俺がそう言うと、小さく溜息をつきながら、「それも一理ありますね。」と仕方なそうに前に出るビレイ。

コウに至ってはやる気に充ち溢れ……溢れすぎて空回りするんじ

やないかと思ってしまう。

そしてグリが四匹まとまって襲いかかってきた。

「さあてまずは一匹目っと。ほらほら急がないとすぐに二匹目いくぞ！」

まず一匹目を刃を下にしていた状態から振り上げて真つ二つに、相変わらず切れ味……すげえよなあこれも。

虹の切れ味の次位にすげえ。

「ライトニング！……っち、あと三発くらいか、余裕だね！」

「っふ！っは！……硬いです！切り裂けません。ですが……切れないわけではないですので……覚悟してください！」

と二人盛り上がり始めたところ悪いんだけど。

「ごめん終わっちまった。」

「は？」

二人の息が完璧にそろった。

いや……だって仕方無いっしょ。

振り上げて振り下ろしたら二匹目にあたって倒しちまったんだからさ。

「……はあ……噂は本当だったんでしょね、確かに低レベル闇者のグリとはいえ、一動作で二体も倒せるなんて、普通はできません。……今まで数々のご無礼申し訳ありません、これから我が本当の力改めてお見せいたしましょう！」

「はあ……やっぱり雫さん凄いです。僕も頑張らないと！」

コウは素直に頷いて目の前のグリに攻撃を開始する。

ビレイは、先ほどまでのおかしな挑戦的な態度が一変し、急に俺に対して丁寧な態度をとるようになった。

正直どうしていいか解りませんよ！？

「……闇より出でしその腕で、悪しき存在である目の前の者を今こそその地に飲み干せ！ダーククレイド……」

んなこと考えてると、いきなりビレイの目の前のグリが自分の影に沈むように消え去った。

「最後です。」

と同時位に、先ほどから同じ場所のみを切り続けていたコウがとうとうその首を両断した。

「おつかれさーん。コウも結構意地っ張りなんだな、ビレイに関してはもう俺魔法全然解らねえから凄いとしか言いようがねえわ。」

そう言っでカラカラと笑う。

「さあつてと、終わった……と思ったんだけどなあ。」

後ろからさらに六つの視線が俺を襲う。

感覚的に感じたことのあるこの気配は、グリが二匹とライラが四匹。

「さあて追加オーダーが入りました！ひとまず俺がグリ二匹とライラ一匹を倒すから、その間に二人で一匹ずつでもいいし、一人一匹にしてもいいから、頼むは。」

俺はそう言つてまずはグリの方へ歩いて行く。

ライラに至つてはちかづいて行つても逃げられれば何とか追いかける事は出来ても捕らえることなんてできないからな。

「さあてコウ君、どうしますか？」

「僕はライラであれば一人の方が借りやすいのですけど……」

「解りました、では一人一匹で、今度こそ隼さんに勝ちますよ！」

「たった一匹倒すのに三匹倒されるなんて少し恥ずかしいですよね！頑張りましょう！」

話しは決まつたみたいだね。

んじゃまあいくとします……とと。

クリスもう終わったのかよ、早いなあ。

それもほとんどクリス一人でやって、うは、数がめちゃくちゃだったのか、本当に頑張ってくれたな。

「二匹目つと……コウ、ビレイ大丈夫か？」

「心配されるまでもありません、しっかりこなしてみませすよ！」

「問題ありません、流石にこのすばしっこさに手を焼いてますが、決まれば一撃です。」

クリスの話は続き、まじかよ大の男が少女といってもいい位のクリスが頑張ってる間腰抜かして怯えてるだけだったってか。
まじありえねえ。

「「完了!」」」

三人が完璧にシンクロした。
少し嬉しいような恥ずかしいような微妙な感覚だな。

『……………クリスよく頑張ってくれたな!』

クリスの話も丁度おわり、こちらも丁度終わったんでクリスのもとへいく事に。

コウとブレイに事情を話し急いで収集品を集める。

そーいえば俺達一番離れているっぽいのか……。

何せ、分かれた時歩いて行った方向が俺とクリスなんて真逆だったからなあ。

サラは意外と近いかも知れねえ。

「さあて、収集品も集め終わったし急ぐぞ!」

俺達はそう言って走り出した。

ブレイなんかは走ってついてきながら、腰を抜かした馬鹿共に愚痴をこぼしている。

コウは黙ってついてくるものの、少女だけを戦わし、自分達は腰を抜かしてる!等という馬鹿達に嫌悪感を抱いてるのは確かだ。

そんな二人を引き連れ、クリスの元に着いたのは俺達が最後だった。

そして馬鹿どもを背負い、町まで戻ろうとしたが途中で元気になつて逃げだしやがった……少しいらつとくるな。

「さあて、一度ギルドに戻って、結果発表だな！」

俺がそう言くと、サラとクリス、ラム、コウ、ビレイが頷いた。
こうして一路ギルドへ向かう事になった。

「これが今回の報酬です！」

そう言っ受取ったのは全部で九万シル。

予想以上に物価が高くなっており、収集品が高く売れたのだ。

「さあて緊張……してるのはコウだけかよ、つまらねえ。」

おつとぼそつと本音が出ちまった気を付けねえとな。

「結果発表！ってかまあ今この時点でこの場所にいるだけで入団許可してるんだけどな。」

俺はそう言っ三人にカラードルと書類を渡した。

「一応もう登録しておいたが、間違いがあつたら直してくれや。」

三人の顔をうかがいつつそう言ったものの、間違いがあつたら直すのがめんどくせえ……間違いないように祈るかね。

そして一分経つか経たないかで三人とも間違いはないという事だった。

俺はその書類をラリアに出した。

「よっし！これで完全に完了だ！じゃあ改めてこれからよろしく頼

むな！」

「はい！よろしくお願いします！」

「よろしくお願いします、雫さん。これからいろいろ学ばせて頂きます。」

「よろしく、お願いします。これからお世話になります。」

上からコウ、ビレイ、ラマだ。

こうして簡単な自己紹介を終えたところ、タイミングよく書類もでき、完璧に三人とも俺達の仲間になった。

それを拍手で迎える俺とサラとクリス。

そして……俺はすでに限界だった……主に疲れが。

おそらくビレイとコウも似たようなもんだろう、サラはまだ元気がありそうだが、クリスなんかは今にも倒れてしまいたい！って感じだしな。

「すまねえが今日はもう疲れた！だから明日詳しい説明をする！ひとまず今日のところは俺の家があるから、そこで休んでくれや。」

そう言っただけで立ち上がり屋敷に向かう。

本当に今日もまた疲れた……明日、体力が回復してから本格的にどうするか話し合おうかね。

まあ屋敷はギルドから歩いて五分ほどなんですぐ着いた。

まあ案の定フィアナを最初みた三人の反応は……。

コウは本気で気付かず説明してもいまいち理解していなかったが、問題ないと納得した……つまらねえ。

ビレイは速攻で魔法詠唱始めやがったんで、後ろからサラがどついて止め、俺が説明してやると、「そんな事もあるんですね……」

と心底不思議そうに、どこか興味がそそられるって感じの視線を向けて納得した……もう少し面白いリアクションが欲しいな！

そして……ラマ……。

「……きゅ」

まあ……最初は少しおかしいくらいに思ってたんだろうな。

その後、透けて後ろが見える事に驚き、少し震えながら俺に訪ねてきたんで。

「ああ、幽霊だ！」

と言っただけだ！

まあ……まさか気絶するとは思わなかったんだけど……でも、こういう反応を待っていた！

なんてことをやってると、フィアナからは猛抗議をくらい、クリスとサラは本当にどうしようもないなあと苦笑を洩らしつつラマを介抱し、コウとビレイは溜息をついて乾いた笑みを浮かべていた。

全く失礼な奴らだ……俺悪く……ないよね？

……いや、ごめん、本当は少し悪いと思ってるよ？

なんてことをいいあいながら各自部屋に戻って休むことになった。ひとまず、俺も部屋にもどり、着替えるとベッドに横になって少し考え事使用としてたんだが……まあいわずもがな、速攻で眠りに落ちてしまったわけだ。

ゝ第四章入団希望ゝ其の五（後書き）

第四章完了。

次五章に入ります。

仲間も増え、依頼をこなす毎日が……はじまるんですかね？

第五章資金繰り〜其の一

「月夜の雪」第五章資金繰り〜其の一」

雫達が新しいメンバーを迎えてから一週間。

新しいメンバー達全員が、雫の屋敷で暮らす事になり、それぞれの部屋の手配と足りない道具などを買い求めたりしているとあつという間に時間は過ぎ去った。

「よし！ここで重大発表があります！」

漸く落ち着いたメンバー達を雫は食堂に集めていた。
やったらいい笑顔で皆を見つめる雫。

この時全員の気持は一つになっていた……『嫌な予感がする！』と。

「……なんだってんだい？」

一番初めに口を開いたのはサラだ。

クリスは少し考えながら、何となくその嫌な予感の答えに気づいたらしく、冷汗を流していた。

「うむ！それがなんと！……金がそこをついた！」

クリス以外の全員が「はあ？」といった感じで聞き返してきた。

「どうしてだい！かなりの大金がこの前手に入ったじゃないか！」

「そうですよ、僕なんてあんな大金みたの初めてでしたよ！」

「詳しい説明をしていただけませんかね？」

「……少し……納得ができません……」

上から順に、サラ、コウ、ビレイ、ラマだ。

確かに、何も見ていなかったメンバーにとって、あれだけの大金がたった一週間で無くなったと聞けば、不思議に思うだろう。

九万シル。

普通の人であれば二三年は普通に暮らしていけるだけのお金なのだ、逆に不思議に思わない方が変だろう。

そんな質問の嵐に答えたのはクリスだった。

「恐らく……皆さんの部屋の備品と、足りなかった道具の購入、後は皆さんの装備品の修理代……ですか？」

恐る恐るだが、間違いないだろうという確信をもってクリスはそう言った。

クリスの横にいたダーニヤが頷き、迎えにいたフィアナもコクコクと頷いている。

「その通り！クリスは何度か俺と買いたし言ってたから気づいたみたいだが……一通りそろえたところすっかり全額無くなっちゃった！」

（てかむしろ足りなかった位なんだけど……特に修理……今回はダーニヤがかなり無理して協力してくれたからなんとかなったが…

…このままじゃ毎回、毎回金欠でなくことになりかねえ。修理が意外といい値段するからなあ……)

当初、修理しようと思った時点で、資金が二千シルほど足りなく、ギルドに借金を使用と考えてていた所を、ダーニヤが実家のほうにある道具を持ってきてくれ、何とか今回は借金をしなくてすんだのだ。

しかし、今回はこれで何とかなったが、次回からはもう道具などもほとんどないから無理だという言葉が頂いているので、ある程度余裕を持って資金を稼がないといけない。

そう言う結論を出していた。

「ちなみに簡単に内訳を言うのだ。まず各部屋の備品を揃えるのに二万シル。足りない道具ともしもの時の道具。後日持ちする干し肉と干した果実、あと硬いパン等もある程度まとまった数を用意したところこれだけで一万シル。これが一番高くついたところなんだが、修理……これが六万シルかかっている。今回は一番金のかかる修理品の俺とサラはほとんど修理をしておらず、クリスの修理品が服とマントだけでもかかわらず、これだけで修理代が五万万シルだ。コウ、ビレイ、ラマはほとんどすべて修理したとはいえ、全部合わせても一万シル位で済んでいる。つまり、だ！」

「間違つて雫やサラの装備品が一つでも出れば、一つあたり安くても三万シル。高いもので八万シル位を見てもらわないといけないってわけさね。クリスの装備品だって同じくらいかかる。新しく入った子たちには近いうちに私自身が自慢の一品を打ってやるからそうになると、一人頭全部修理するとなると、雫が大体三十万シル、サラが二十万シル、クリスが十五万シル。他の子達は私がその時どれだけのものを用意できるかにも関わってくるけど、大体少なくとも十万シルは見といてもらいたいねえ。」

「という事だ。正直異常な金額がかかるんで、普段この装備品は使わないように！といたいところだが、命を預ける道具何だからんなわけにもいかねえ！だからだ！これ以上を稼ぐしかないっつーわけだ！ぶっちゃけ衣食住に関してはある程度この屋敷があるからなんとかなるとして、修理品やもしもの時の治療代なども考えて常時九十万シル以上は保持しておきたいところだ。それだけあればある程度余裕をもっていけるようになるはずだからな！まあぶっちゃけよ、全員が一気に武器防具が壊れるなんてーこと滅多にあるわけもねえしさ、そこまでいらなくも知れねえけど、もしもってことを考えるとそれくらい欲しい訳だ！という事でこれからしばらく金策に走るぞ！いい依頼などあれば見逃すことなくかつさらえ！」

雫に続きダーニヤが補足し、最後にまた雫が締める。

聞き終えたメンバーはサラとクリスを除いて、少し信じがたいといった感じの表情だ。

実際、十万シルという大金すらお目にかかるのは滅多にないことだ。

それはコウやビレイ、ラマとて同じだろう、下手をしたら今まで見たことすらないかもしれぬ。

それなのに、それを大幅に超える九十万シルを最低欲しい……正直今までの世界観から離れ過ぎて理解するのに時間がかかっているのだ。

「……はあ……いい武器に防具つてのは本気で助かるけど、修理の金額までいいものだからねえ。普通の武器の相場の百倍つてのは確かに始めて聞いたんじゃ茫然としても仕方ないねえ。」

サラが其の三人を見つめつつ方を落としながらため息をついた。修理品の相場、今サラが言ったとおり、全部の武器と防具を修理

しても通常千シルから三千シルくらいだ。

それも、ほとんどすべて修理をしないといけないなんて状態も少なく、軽く手入れを頼むくらいであればそれこそ数十シルから数百シルくらいで済む時も多い。

今まで冒険者をやってきた三人もそのあたりを知っているからこそ、あまりの現実離れした金額に啞然とするしかないのだろう。

「……そうですね、私たち、雫さんとサラさんと私の武器と防具は確かに店で買えるような代物じゃない分……お金がかかるのも仕方ないですよ……でも、それだけの大金を最低限保持するとなると、かなり大変ですよ？」

クリスがどうするんですか？と雫に尋ねる。

「ん〜ぶつちやけ今はまだ策は無し！ってかさ俺この世界で冒険者として闇者倒して、依頼をこなして金を稼ぐ以外、金の稼ぎ方ってしらねえんだは。しばらく過ごしていればいい策もできるかもしれないけど、今はまずギルドの依頼をこなして金を稼ぐしかないだろう！ひとまず俺とサラは一人である程度いい金額の依頼をこなして、クリスとコウとビレイとラマはその依頼に応じて全員で挑んでもらうか、分かれてそれぞれ動いてもらうかを決める感じだな。」

「……そうですね、私も一人で稼ぎたいところですが、後方支援が主な私にはそれも難しいですからね。前衛と組んで挑んだ方が絶対効率がいいですよ。」

少し落ち込みながらも、理由がはっきりしてるため反論できず、少し情けなさそうな笑みを浮かべながら雫とサラを見る。

「正直俺たちだって、依頼によってはクリスがいないとどうしよう

もない場合だってあるんだ。そんな落ち込む必要ねえって！正直俺やサラがクリスより強いってわけじゃないだしさ。強さのベクトルが違っただろう？比べようがねえんだって！」

雫はそういいながら少し乱暴にクリスの頭をなでる。

言っている事は解るのだろうが、それでも情けない気持ちをすべて拭い去ることはできないようだ。

それでも、氣遣ってくれる雫と、その後ろでしつかりと頷いてくれているサラを見て、表情には少し力の入った笑みが戻った。

そうこうしてるうちにようやく三人の意識がこちらに戻って来たらしく、ひきつりながらも雫達の話聞いていた。

「さあて、んじゃまあ早速ギルドに行くとしますかね！目標は俺とサラは一人当たり一万シル！クリス達は四人で二万シル！あくまで目標としての金額だが……自分達でいけると思えばそれ以上を目標してくれてもいい！もしくは危険だと思えば無理すんなよ？ぶっちゃけ金策なんかで命落としちまうなんて、絶対嫌だからな！」

雫がそう言うと、サラとクリスは頷いて部屋に準備をしに戻った。他の三人は雫に色々と話聞きながら、やるしかない！という事がいやでも解ってしまい、準備をしに部屋に戻っていった。

「……ふう……にしても金かかるなあ……かかり過ぎだろう。」

「まあしゃあないさ。雫あんたの武器なんてぶっちゃけ自動修復がほとんどできるんだ、時間さえ立てば直せるけど、すぐに直すにはさっき言った金額くらいはかかるんだよ。他の子達のもね。さあつてと！私はあの三人の武器と防具をうちに行くとするか！幸い良い工房がある訳だし、道具も運び終わったからね！一か月もあれば終わるはずさ。楽しみに待つのきな！」

あつはっは！と笑いながら食堂を後にするダーニヤ。
その後ろ姿を見つめながら。

「だからその新しい武器と防具が金かかるんだっての……まあいい事だから何も言えねえんだけど……」

とこぼした。

そんな雫にフィアナが覚めたお茶を交換し、「お疲れ様です」の一言をかけていた。

以外に心にその一言が響き、どうして涙が出そうになりながら、新しく出してくれたお茶を飲み干し、雫も部屋にもどり準備を始める事にした。

〈第五章資金繰り〉其の一（後書き）

しばらく間が空きました。

申し訳ありません。

これからいろいろと今までの話を見直しつつ、修正出来ればしていこうと思います。

更新遅くなりましたらすいません。

第五章資金繰り〜其の二

「月夜の雫」第五章資金繰り〜其の二」

「……おおう！何だこの依頼の数！？」

雫達が準備を整えギルドを訪れると、そこには走りまわるギルドの従業員達。

そんな彼等、彼女等を不思議そうに見ながら、掲示板に向かったのだ。

そして掲示板を見た一言めがそれだった。

「何かあわただしいし、この依頼の数……少しばかり異常じゃないかね？」

サラも雫の言葉に頷きながら掲示板を見つめる。

「おっ！ラリア！おはよう、今日何なんだ？何かあったのか？」

丁度タイミングよく通りかかったラリアに声を掛け、この異常な状態が何でか尋ねる。

忙しそうに走り回ってたラリアがピタッと動きをとめこちらを見つめる。

その瞳はかなりの疲労を感じさせるのに十分なくらい虚ろになっている。

「あ、ああ！ 雫さん！ 丁度いいところに！」

ラリアが雫の姿に焦点を合わせると、突然大声をあげて詰め寄ってきた。

「うお！ な、なんだ？」

「もう大変なんですよ！？ 何でか三日前から冒険者の皆さんが突然依頼をこなしてくれなくなっちゃって、その上この街から離れちゃったんですから！ 今この街にいる冒険者の数は雫さん方いれても二十人にも満たないんです！」

今にも泣きそうになりながらすがりついてくるその姿は涙を誘うものがある。

少し引きながらも雫はそんなラリアを慰めるように頭を撫でていた。

サラとコウ、ビレイとラマは少し苦い表情を浮かべながらラリアを見つめる。

何故か……その答えを知っているかのように。

「にしても……なんでなんだろうな？ 突然だったんだろう？ ひとまらずじゃあねえ！ 俺達で出来る限りの依頼をこなしてくか！」

雫がそう言うと、クリスを除いた全員が気まずそうにギルドメンバーを見る。

そんな様子に気づいたクリスが不思議そうにサラに尋ねる。

「サラさん？ 何か……知ってるんですか？」

「……いや、何も知らないさ……」

明らかに知ってる感じでそう言ったサラは少し悲しそうだった。そんな様子にそれ以上聞くことができなくなり、クリスは諦めて零と同じように掲示板を見つめる。

「……あら？こんないい依頼が手つかず……治療の依頼！私これ受けます！」

「ああ！僕これ！刀剣の鑑定！これ受けます！」

「……私はこの魔法研究の手伝いという依頼を受ける事にしよう。」

「私はこの狩りの手伝いという依頼をこなそうと思う、貴族の依頼らしくかなりいい金額だしね。」

各自自分の特技をいかせる依頼を見つけていく。

ある意味、絶対一番になくなるような美味しい依頼がごろごろと残っている。

クリスの治療の依頼は特殊な依頼だが、それでも絶対残っているような依頼ではない、何せ依頼の報酬が五万シル。

コウの刀剣の依頼も五千シルと大金だ。

ビレイの魔法研究の手伝いは成功度合いにより報酬が変わるみたいだが最低で一万シル、最高で十万シルまでなるといふ。

ラマの狩りの依頼はどこぞの馬鹿な貴族が出した依頼らしく、ただの手伝いにも関わらず一万シル。

他にも一万シルを超える依頼がまだ十数個残っているうえ、十万シルを超える依頼すら二三残っている。

「へえ……俺たちにとっちゃ結構ラッキーだな！俺はこれだな、討伐依頼。一週間くらいかかるみたいだが八万シルって高額だしな！」

「ならあたしはこれだね！三日間で五万シル。あたしも討伐依頼だね。これ以外他に出来る事ってないから仕方ないさね！」

そう言つて一人一人個人で出来る依頼を見つけ受理してもらう。サラと雫の二人で受付をし、ほかのメンバーには外で待っていてもらう事にした。

ラリアは一気に数が減つて喜び、感謝していた。

その時、ほかの冒険者達も戻つて来たらしく、報酬や新しい依頼をこなすため掲示板に向かおうとしたが……雫達の姿を見つけると、こそこそと小声で話し始める。

（……何だ？……ん？俺達の話なのは間違いないみたいだな……化け物？厄災？）

多少聞こえてきた単語から、間違いなく雫達の事を話してるのは間違いなく、それがいい話じゃない事も解る。

（ところどころ聞くと……俺達が化け物で厄災を運んで冒険者を殺そうとしてる……って感じで聞こえたけど……聞き間違いか？それとも……）

「雫、気にすんじゃないよ、ただの噂話さ。馬鹿な奴等の嫉妬つてやつだよ。」

雫が立ち止まりその言葉を聞いてる事に気づいたサラが、いつの間にか隣に立ちそう言つて俺を促しながら外に出る。

「……サラの反応からすると、本当にああいう話が出る訳だな。ってことは……何だこの騒ぎ俺達のせいじゃねえか……」
「……」

ならねえ！」

がしがしと頭を掻きながらサラと二人、外で待っている他のメンバーの元に向かう。

「ふむ、つーことは俺以外の他の奴等はすでにこのこと知ってるわけか？」

「さっきの反応からすると、クリスだけ知らないはずだね。他の奴等は皆知ってるばかったよ。」

「なるほどね、だからかさっきから少し気まずそうにしてたの。」

「……何だい気づいてたのかい。なるべく気付かせないようにしたかったってのにさ。」

そんな話をしながらメンバーの元に着くと、今までそんな話を話してたなんてことを全く表に出さず、のほほんとした感じの明るい調子で午後から出発するといったした。

「一先ず、俺とサラはしばらく戻ってこれないから、その間はクリス頼むな！後各自依頼が終了した時点でギルドを助けてやってほしい。なるべく多くの依頼をこなしてやってくれ。」

「はい！解りました。私の依頼は基本的に一週間かかるものの、夜の時間だけなんで他の依頼も受けられますし、他の皆の補助をする事も出来るので任せて下さい！」

ある程度話をまとめると一度屋敷に戻り、雫とサラは保存食を少し多めに持ち、すぐに討伐の依頼をこなすべく屋敷を後にした。

ビレイも魔法研究を行うべく、必要だと思われる道具を揃え屋敷を出る。

ラマは午後からの予定らしく、狩りに必要な弓と矢を揃え、もしもの時の為に救急道具も用意しながらクリスに訪ねてきた。

「クリスさん、救急の道具ってこれでいいでしょうか？」

「はい？ ああはいはい、えっと……包帯とタオル、綺麗な水とアルコール……大体いいと思いますけど、これも持って行った方がいいですよ、レイコウの葉、すりつぶしてぬれば熱と化膿を抑える効果がありますから便利です。」

クリスは紅葉のような形の紫色の葉っぱをそう言っただけでラマに手渡す。

ラマも礼をいいながらそれをしまい、準備を整えると、二人お茶を飲みながら少しゆっくりする事にした。

「すみません！ 僕もこれから言ってきますね！ 夜には戻ってこれると思います！」

二人がお茶を飲んでいると、あわただしくコウがそう言っただけで食堂の扉を開け放ち、走って屋敷を出て行った。

「これではラマさんが二時間後に出かけるのと、私が夜に出かけるだけですね。一応今日戻ってくる予定なのはコウさんとラマさん、そして私ですか。ビレイさんは確か……」

「ビレイさんは三日後までには戻ると言っていましたね。早く終われば明日にでも戻れるかもしれないという事でしたが。」

「そうでしたそうでした！ひとまず、今日は簡単なスケジュール表みたいなものを作っておきますので、何か変更や新しい依頼を受けた場合、直接言えない時はそれに書いておくようにしてください。コウさんにも伝えてもらっていいですか？私後で行く前にビレイさんに伝えに行ってきますので。」

「はい大丈夫です。」

これからの予定を話し合いながら少しゆったりとした時間を過ごす。

この一週間色々とお世話いただき買い物やら部屋の整理やらを行っていたため、短いながらもこういうゆったりと過ごせる時間を大事にしていた。

雑談交じりにそんな時間を過ごしていると、すぐに二時間がたつてしまい、ラマも依頼をこなしに出かける事に。

「それでは行ってきますね。夜には戻ってこれるはずなので、入れ違いになってしまいかも知れませんが。」

そう言っって屋敷を後にした。

一人残ったクリスは、一人で暇だなあと思いながら、夜の準備に入った。

といっても、今回の依頼は神聖の奇跡による治療なので、必要なものといっても特にない。

あえて持つて行くとすれば杖くらいだろう。

準備すると言っても十分くらいで全部終わってしまい、その依頼の時間が来るまでフィアナと一緒に雑談をしながら時間を潰す事にした。

そして、夜といよりも夕方に近い時間になり、クリスが屋敷を出ると、屋敷に残っている人はダーニャのみとなった。

そしてダーニヤにいたっては工房にこもり武器と防具を打つか寝るかのどちらかしかしていないため、つい今日の朝までにぎやかだった屋敷は静まり返っていた。

「……あのような……楽しい時間になれてしまうとやはりこういった静かな時間というものが今まで以上に寂しく感じられますね……」

フィアナは誰もいなくなった食堂に立ちながらそう呟いて、少しさびしそうにため息をついた。

「さて、こんなことで気落ちしていてもはじまりませんよね！皆さんが戻るまでに部屋の掃除でもしてしましましょう！」

そんな様子も一瞬で、次の瞬間にはいつも通りの笑顔を浮かべながら部屋の掃除をするために屋敷の中を歩きまわる。

そして、そんな状態が一か月近く続くことになった。

〔第五章資金繰り〕其の二（後書き）

とりあえず、ある程度お金がたまるまで続きます。

く設定（簡易版）く（前書き）

一応簡単な設定です。

といっても世界の国の名前と、虹を携えし者のちょっとした話だけです。

随時更新していく予定です。

～設定（簡易版）～

「世界」

異世界……名前自体はなく、大陸と国の名前のみ。

第一大陸：セレディア。

第二大陸：セレガイ。

第三大陸：オクディア。

第四大陸：セラ。

第五大陸：死の大陸。

*順に上から大きい大陸、力のある大陸になります。
第五大陸の死の大陸だけは除外です。

「国」

第一大陸セレディア。

・ディア

・セレ

・セレディア

*あと小さな村が多数。

第二大陸セレガイ。

・ガイ

・セレガイ

*あと小さな村が多数。

第三大陸オクディア。

・オク

・オクディア

*あと小さな村が多数。

第四大陸セラ。

・セラ

・セラア

＊あと小さな村が多数。

第五大陸死の大陸。

不明。

「種族」

・人間

・亜人

・龍族

・獣族

・鳥獣

・海獣

・天使

・悪魔

・闇者

この世界は一万年前突如とし現れた天使族と悪魔族の二人により歴史が刻まれた時より世界が始まったといわれている。

その時、二つの種族を纏め、この世界を作り出した一人の人間がいた。

その者は虹色に輝く銀を携え二つの種族をまとめ上げた。

だが、その虹色を携えし者は二つの種族が共存し虹色を携えし者と同じ人間族が現れ、地を駆ける獣、海に潜みし者、空を舞いし者、原住民族と呼ばれし者が互いに混じり合った時、世界から姿を消した。

その者によつて作られた世界の共存は長い間平和に続いていたが、千年を超えた時その平和が崩れ去った。

各種族の共存が崩れ去り、闇者と呼ばれるものが産み出された。

世界はこの時から少しずつおかしくなり始め、崩壊を始めた。

そんな時、また新たな虹を携えし者が現れこの世界を調停し、崩壊をくいとめた。

それ以来、数千年単位で世界の調停は崩れ去り、崩壊の危機を迎えることになる。

そのたびに虹を携えし者が現れ、この世界を救い続けてきた。

ただこの話を知っている者は数少なく、事実世界の崩壊に気づいている者もほとんどいなかったことから、ただの伝説、お伽話として伝えられることになった。

〈武器防具とアクセサリ〉（前書き）

第五章までに出てきた武器と防具です。

といっても、今現在装備している装備品の身ですが。

こちらにも新しい装備品などでしだい、随時更新予定です。

武器防具とアクセサリ

「武器」

・ 雫の鎌（漆黒の鎌）…… 雫専用のダークマタといった未知の物質を使った鎌、通常時はただのクリスタル。

雫以外の者が扱うことは不可能、鎌として具現化させる事すら不可能。

・ サラマンドラの大剣…… サラの為に作られた炎の大剣。

サラマンドラの革と角を使い、特殊な技法により作られた魔力を持つ剣。

無属性の剣とし使うこともできるが、扱えるものは剣自身に認められし者のみで、今現在サラしか使えない剣。

・ ダiamondプリズンの杖…… クリスの為に作られたダイヤモンドを特殊技法により加工し作られた杖。

魔力の増幅という効果も持ち合わせている。

・ 呪言の杖…… 店に売られている杖、ビレイが使っているもの。

・ 銀の弓…… 店に売られている弓、ラマの使っているもの。

・ 狭霧…… コウの使っている刀剣。

店に売られているものではなく、遺跡より発掘された

過去遺物の刀。

切れ味と抜刀の素早さを飛躍的に高める効果がある。

「防具」

・妖精王の衣……雫の為に作られた魔法軽減効果とヒーリング効果を持つ特殊な衣。

・雫の鎧……雫しか使えない鎧。

武器と同じでダークマタを使った部分鎧。

魔法の軽減と反射効果を持ち、防御力の高さは折り紙つき。

なにより、部分鎧になりながら前進鎧と同じ役割を果たす。

・太黒龍のサークレット……太陽石と黒龍の逆鱗を使って作られたサークレット。

潜在能力の引き出しと精神の安定、

頭上全体の保護もこなす。

・サラマンドラの鎧……サラマンドラの鱗を使い作られた鎧。

魔法の軽減効果、炎の無効化、水と氷の半減効果を持ち、通常材質の中ではトップクラスの防御力を誇る。

・サラマンドラの髪飾り……サラマンドラの逆鱗を使い作られた髪飾り。

自動発動で防護魔法が発動させることができる。

・ 聖樹の服……魔法の軽減効果、刀剣類、物理系のダメージの軽減効果もある。

・ 聖風のマント……風の守りが自動発動するマント。

・ 青銅の鎧……コウが身につけている鎧。

・ ライラの服……ラマとビレイの身につけている服。

・ グリーズルのマント……ビレイの身につけているマント。

・ 青銅の兜……コウが身につけている兜というよりもサークレットに近いもの。

「アクセサリー」

・ 聖鳥の指輪……物理ダメージの軽減効果、ダメージの蓄積がたまると壊れる。

・ 聖龍の指輪……精神ダメージの軽減効果、ダメージの蓄積がたまると壊れる。

・ サラマンドラのネックレス……攻撃力と防御力の増加、全サラマンドラ装備を身につけてるときのみ。

・アースライムの腕輪……ダメージの身代わり効果、蓄積すると壊れる。

・風の腕輪……素早さを上げる腕輪、コウの装備品。

・精度の貫手……命中精度の増加、ラマの装備品。

・知力のネックレス……魔力の増加と詠唱速度の増加、ビレイの装備品。

第五章資金繰り〜其の三

「月夜の雫」第五章資金繰り〜其の三」

「おはよー、おー皆ここに集まるのなんて久しぶりだな！一カ月ぶりくらいか？」

雫が食堂に入ると、其処には雫以外の全員がそろっていた。

「おはよう、そうだねえ確かに一か月ぶりだね全員が顔を合わせるってのは。」

皆が挨拶している最中にサラが応える。

雫はどこか嬉しそうに自分の定席につき、フィアナに朝食とお茶を頼む。

「さあて、この一カ月ほっとんど休むことなく頑張った御蔭でギルドのほうもある程度落ち着いたみたいだな。俺達の変なうわさもある程度沈静化したみたいだし段々元に戻ってきてるってのもあるんだろうけどな。」

フィアナが運んできた御茶を飲みながらそう言って皆を見渡す。

「そうですね、ギルドの方からは本当に感謝されてましたよ。噂も私最近になって初めて知ったんですけどほとんどもう話に昇ることも無くなってきましたね。」

雫の言葉に反応を返したのがクリスだった。

ふと気づいたように、クリスが雫に話しかける。

「あつ！そういうえば雫さん、ギルドの方の資金なんですけど、ようやく五十万シルまでたまりました。一応この屋敷にいる時間が一番長い私が纏めていたんですけどどうしたらいいですか？」

「お！まじで？予想以上に早くたまるなあ。皆頑張ってくれたからか！もうひと頑張りで目標金額にとどくな！んでもって資金の管理は今まで通りクリス、もうしばらく頼むわ。俺はまだしばらく何日かあけるような討伐以来受ける予定だから、すまねえな。」

雫はクリスの質問にそう答えながら、他の皆にも話しかける。

「ひとまず、俺もできる限りそういった事もやっていくけど、他の皆も手伝えることあったら頼むな！」

雫の言葉に皆快くうなずき、クリスは「よろしくお願いします」と言って頭を下げていた。

「さあてと、あたしはそろそろ出るよ。昨日受けた依頼があるんでね、多分明日には戻ってこれるはずさね。」

そう言ってサラがまず席を立った。

「あつ、私もそろそろ行かせて頂きます。あの依頼主の方に気に入られたみたいで、今日もまた手伝ってほしいとの事だったので……今日の夜には戻ってこれます。」

「それじゃあ私とコウも行くでしょう。コウは今日中に戻れるはずだが、私は恐らく明後日まで戻ることが出来ないと思う。」

「はい！行ってきます！」

続くようにラマ、ビレイとコウが席を立ち一緒に食堂をあとにした。

「クリスは今日は休みか？」

フィアナに運んでもらった食事を食べながら雫が尋ねると、首を振りながら「今日も夜からです」と言って微笑んだ。

「そうか、なんか屋敷やギルドの事まかせつきりにしちゃってますまねえな……もうしばらく頼む。」

「全然ですよ。気にしないでください。みなさん頑張ってるですから私だってこのくらい頑張らないといけないですよ！」

そう言って微笑んだクリス。

それに嬉しそうに頷きながら一つ気になっていた事を尋ねた。

「そっぴやさ、まあ仕方ない事なんだろうけど依頼さ、いいやつほとんど無くなってきてるよな？ラマとクリスは引き続き手伝ってるから変わってないけど、コウとビレイ、俺とサラは確実に前みたいな良い依頼が当たらなくなってきてるんだが、この調子でいけばどれくらいで目標金額に届くと思う？」

雫がそう尋ねると、少し考えながら応える。

「そう……ですね。恐らく二か月の内には大丈夫だと思います。何かしらの問題が起きなければ……ですけど。」

考えながらそう答えるクリスは、前みたいはどこか申し訳なさそうな雰囲気や遠慮した雰囲気が無くなっている。

この一カ月ギルドと屋敷の事をいろいろと頑張っていた事で色々自信がついたらしい。

「そうか、それでも予想よりは半年くらい早くたまるんだよね……んじゃま頑張るとしますか！」

そう言って食事を終えた雫が席を立った時、屋敷に來客が訪れた。

「雫様、ギルドの方が御來訪されておりますがいかがいたしますか？」

「ん？誰だ？」

不思議そうにそう尋ねた雫にフィアナが「ギルド長です。」と答えたので、來客の為の部屋に案内するように言った。

「はぁ……何なんだろうな？クリス一応お前も一緒に来てくれるか？」

「えっ！私ですか？いいんでしょうか？」

突然そう言われたクリスは驚いたように雫を見つめながらそう問い返してくる。

「大丈夫だろう、頼むわ！」

そう言って手を合わせた雫に苦笑を洩らしながら「解りました。」と応えて一緒に来客室に向かう。

「本当に一体何なんだろうな？」

「私にも……解りませんね、何も問題起こした覚えもないですし、最近噂でもそういったものは何もありませんでしたから。」

不思議そうに二人で何があっただろうと話しながら、ギルド長が部屋に入ってくるまで悩み続けた二人であった。

〈第五章資金繰り〉其の三（後書き）

五章終わりです！

次から六章に入ります。

更新最近遅くなりがちですが、なるべく早く更新できるように頑張ります。

第六章 闘技大会 其の一

「取りあえず、高レベル闇者を数体狩るぞ!」

雫はそう声を上げ、椅子に座る面々を見つめた。

「ちよつとちよつとなんなんだい突然?」

みんなの気持ちを代弁しサラが雫に不思議そうに尋ねた。

「実は昨日なギルド長のデニスが来てだな……」

「ギルド闘技大会?」

ギルド長のデニスが来客室のソファ―に腰を掛けながら静かに頷いた。

雫の隣にいるクリスが「ああそう言えば!」と言って声を上げ、説明を始める。

「雫さん、ギルドの闘技大会です。毎年四回三カ月ごとにある大会でして総合クラスC以上のギルドだけが参加可能な大会なんです! そう言えば私たちシード権があるはずなので三回戦からの出場になるはずですが……。」

其処まで勢いよく説明をしていたクリスだが、言いずらそうに口ごもってしまった。

「……出場資格のもう一つが個人ランクもC以上の人だけなんですよ。」

クリスが口ごもった先をデニスが引きついだ。

「……C以上？って事は……俺とサラとビレイしか出れねえじゃねえか！」

そう、雫とサラ、ビレイ以外は皆ランクDなのだ。

最近頑張ってギルドの依頼を数多く受けているのだが、何せ受ける依頼が雫とサラ以外戦闘以外の依頼の為、ある程度数をこなさなければ上がらないのだ。

「……それで其の闘技大会は何時なんだ？」

雫が頭を掻きながらデニスに尋ねると……。

「一週間後、此処から歩いて一日、馬車であれば数時間の距離にあるセレディアで開催されます。」

「ちょ！短いつて期間！もう少し早く教えて欲しかったんだけど。」

俺がそう言うと、申し訳なさそうに頭を下げてきた。

「申し訳ありません……いい訳になってしまっているのですが、今回はギルドが今迄に無い程立込みまして、処理出来てこの情報が出てきたのも今日の朝だったんです。この闘技大会、開催される期間はある程度決まっている物の、しっかり決まっているわけではなりませんので、一か月前にその報告書類が来るんですが、其れを今朝まで処

理しきれていなかったという事なんです……本当に申し訳ありません。」

雫とクリスは少し気まずそうにしながら「謝らないでください。」
と言ってデニスに逆に頭を下げていた。

「取りあえず、一週間、明日からだと後六日、移動日を考えると五日……短すぎるだろう！手っ取り早くランクを上げるには……あれしか無いよな……。」

「つーわけで、高レベル闇者を狩って、皆にはランクC以上になつてもらう！」

俺が説明し終わると「なるほどね……。」という声が上がった。

「つまり、私とラマさん、コウさんの三人ですね、私たちがランクCになるためには私がライラを三匹、ラマさんはグリーンズルを一匹、コウさんはグリーンズルを三匹でランクCになります。幸いと言いますか何と言いますか、ディアの森に今丁度現れているらしいので其の依頼書を頂いておきました。」

依頼書の討伐内容は、グリーンズル八匹にライラが五匹といったものだ。

「……僕のグリーンズル三匹が大変ですね……。」

そう、一番のネックになるのがコウなのだ。

確かに実力だけを見ればランクC位になっても可笑しくは無い物の、コウが扱う得物は刀に近い剣。

叩きつけるよりも斬り裂くのを主とした物だ。

グリーズルにだと其の刃が上手く通らないため、一匹だけなら何とかなくても二匹以上になると倒せない可能性が出てくるのだ。

何せ、斬り裂くのを目的に作られたその剣は、刃こぼれ等しやすく、刃こぼれがひどくなれば切れなくなってしまうからだ。

「そういう事で、ダーニヤがコウの武器を先に仕上げてくれた。」

そう言っただーニヤがコウの前に一振りの刀を差し出した。

「いいかい、この刀はダイヤモンドを加工し作り上げた一刀だ。確かに切れ味と丈夫さは折り紙つきだが、使い方次第じゃ一発でポツキリいつちまうからね。まあ今迄その剣を使い続けているのならそんな物十も承知だろうけど。後軍から聞いた話じゃコウあんたは居合いに似た攻撃を繰り返すって事だけど……。」

「はい、その辺りは大丈夫です。確かに僕の基本的な攻撃手段は居合いによるものです。」

「んじゃ大丈夫だね。今回この鞘の方にも工夫を凝らしておいたよ。居合い位素早く抜いた際炎の属性をつける事が出来るようにしていた。逆に言うと、居合いで攻撃する際必ず炎の属性がついちまうから、敵によっちゃー効きづらい相手もいるから、そこだけ気をつければいいだろうさね。」

ダーニヤは説明を終えると、その刀を手渡した工房の方に引きこもっていった。

コウは新しく手渡された刀を見て、驚いたようにじいっとその刃を見つめていた。

「コウの腕前は問題ないからこれで何とかなるだろう。何としても闘技大会に出場して準優勝以上を狙うぞ！」

雫がそんな事を言うのも目当ては。

「賞金かい。確か準優勝だと四十万シル、優勝で六十万シルとギルドでの依頼の優先権だっけ？」

サラがそう言った後、大きく雫が頷き「絶対に無し遂げて貰う！」と言って気合の入った視線を皆に向けた。

「ああそれと、出たい奴は個人の方は出場自由だから、出てもいいからな。良い腕試しになるだろう。ちなみに俺も出る、目指すは三位入賞！目指せ賞金！」

一人盛り上がっている雫を一先ず置いておき、サラはコウとクリスとラマをそつと見た。

コウはいまだ刀に魅入られており、ラマは考えながらも行けると感じているようだ。

クリスは一か月前であれば無理です！とでも言うつと思ったのだが、予想に反して雫に対して「落ち着いて下さい。」と苦笑をもらすほど余裕がある。

（皆それぞれ成長してるって訳だね。あたしもつかうかしてらんないね！）

サラはそう考えて、それなら自分もそろそろランクBに上がるた

めの方法を思い浮かべる。

「それじゃあ、この依頼今日から三日以内の依頼何で明日いくぞ！
今日中に準備をすましておいてくれな！」

雫のその言葉に全員が頷き、各自準備に入るため部屋に戻ったり
街に買い出しに行ったりと別れた。

ゝ第六章闘技大会ゝ其の一（後書き）

更新遅くなりがちですが書き続けます！
すいません。

第六章 闘技大会 其の二

『ガタンゴトン』

かなり酷い揺れが雫達を襲う。

そう、今雫達がいる場所は馬車の中。

あれから三日何とか全員ランクC以上になる事ができ、会場のあるセレディアに向かっている処なのだ。

コウ、ラマ、クリスはぎりぎりといったところで何とかランクC。

サラは何とこの三日の間でランクAに上がっていた。

「にしてもやっぱり三日でっての無茶だったんだなあ。」

雫はこのひどい揺れの中でも構わず眠り続ける三人を見つめつつそう呟いた。

無論眠っているのはコウ、ラマ、クリスの三人だ。

「そりゃそうだろう。実際あたし達が手伝って狩る訳にもいかないう状態でやり遂げたんだからさ。」

「全くです。正直私は三日では無理だと思っていました。」

サラとブレイはそう言って感心したように三人を見つめる。

この三人、実際この三日今日まで寝ないで討伐依頼を受け何とかCランクになった瞬間力尽きて倒れてしまったのだ。

其れをサラと雫で運んで今この馬車の中にいるというわけだ。

「んでもまあ、全員で参加出来てよかったよな。……そういえば、ブレイとサラは個人戦の方どうするんだ？」

雫がふと今まで聞いていなかったといった感じで二人に尋ねる。

「なあにを今更。勿論出るにきまつてるだろう？あたしが出ない
とも思ってたかい？」

ニヤリと笑いながらそう言ったのはサラ。

「私は遠慮させて頂きます。個人戦闘の魔法はまだ取得しており
ませんので。」

そう言ったのがビレイ。

「ただ、コウ君とラマさんは個人戦の方にも参加すると言ってお
りましたよ。」

ビレイはそう付け加えて二人から預かった申込用紙を雫に渡す。

「ほうほう。それじゃあ個人戦に関してはライバルになるなサラ
！実際戦った事無いから少し楽しみだな！」

「そうだねえ。あたしもあんと戦えるのは楽しみさね。ただま
あ、あたしと当たるまで負けなければだけどさ。」

雫がそう言くと、挑発するようにサラもそう言い返す。
次の瞬間二人とも楽しそうに笑い声をあげた。

「次の闘技大会までには私も個人戦闘の魔法を身につけて参加さ
せて頂きますので、お二人の戦いを色々勉強させて頂きますよ。」

ビレイもそんな二人にそう言っただけで次の闘技大会は自分も参加すると言いつつ切った。
そんな話をしながら三人、セレディアに着くまで断章を続けるのだった。

セレディアに着いたのはそれから五時間も後のことだった。
途中低レベルの闇者に襲われ、雫達が倒したりした為時間がかったのだ。

「……にしても……でけえなあ。」

雫は呆然と言った感じでセレディアの街を見る。
コウを除いた皆は何度か足を運んだ事がある為其処までではない物の、やはりディアの街と比べるとその大きさはゆうに十倍以上ある為浮足立っている。

「っあ、雫さん。呆然としてないで早く宿をとらないと止まる処無くなってしまうかもしれないよ!」

一番最初にそんな雫の様子に気づいたのはやはりクリスだった。
クリスの言葉に雫も漸く正気を取り戻し、宿を探し始める。
だが……。

「申し訳ございません、当宿はすでに満員でございます。」

五件目の宿もその言葉で撃墜された。
セレディアには全部で七つの宿がある。

そのうち五つの宿がすでに埋まっていたのだ。
そしてさらに絶望を誘う事に……。

「他の宿のもこの時期ですとすでに開いていないと思いますよ？」
というありがたいのかがたくなのか解らない言葉までいただ
いてしまった。

「……どうするよ？」

雫が困ったように呟くと、サラも「さてねえ。」と困ったように呟
いた。
そんな中救いの声を上げたのがコウだった。

「それなら僕の家に止まる事にしますか？」

その提案に驚いたのは雫を除いた全員だ。
何故驚いたか……それは。

「コウって貴族だったの!？」

と言う事だ。

このセレディアで家を構える事が出来るのは貴族のみ。
其れも王族に近い貴族だけだ。

他は皆借家で、借家であれば自分の家とは言わず借りてる家と表現
する。

「ええ、一応……末の息子なんで大した力は無いんですが皆さん
を止めるだけの場所位なら用意できると思います。」

少し恥ずかしそうにそう言うコウ。

雫はどうしてみんなが驚いてるか解らないのでこつそりと虹に聞いていた。

（この街では家を構える事が出来るのは貴族、其れも王族に近い物だけだからです。）

と、解りやすく短い返答で応えてくれた。

雫は虹に礼を言つて改めてコウを見つめる。

「あはは、代は兄が継いでいますので本当に僕が出来るのは寢床を提供するだけですからね、余り期待してないでください。」

そう言つて歩き出す。

歩いていく方向は城の方だ。

三十分ほど歩き、城の城門が見える位置にコウの家は建っていた。

……。

……。

皆が皆呆れていた。

と言うよりも驚いて声が出なくなっていた。

何故か……其れは最初に木が着いた雫が漏らしたこの一言で解るだろう。

「でかすぎるだろう……。」

そうでかいのだ。

目の前の城と比べるとそれよりは小さいが、周りの家と比べても余りにもでかい。

雫が買った家の五倍くらいの大きさはありそうだった。

「大きいだけです。実際使っている処は十分の一もないんです。貴族の見栄ってやつですよ。」

コウはそう言っただけで門の中に入っていく。

門を守っていた衛兵らしき物たちが功を見た瞬間頭を下げ「御帰りなさいませ！」と言っているあたりでもう、全員引いていた。

それからあれこれと言つ間に話は進み、この馬鹿でかい屋敷の広間に案内されていた。

「おお！コウ帰ってきたのか！御兄さんはうれしいぞおお！」

そう言っただけで突然コウに抱きつく、コウより拳一つ分程小さな黒髪の青年。

「ああもう！兄さん人前だからやめてよ！……あ、皆さんすいません、こちらが僕の兄でコレはコロです。」

物凄く恥かしそうに自分に抱きつく兄を紹介するコウ。

其の一言で済んだようで、コレも漸くコウから離れ雲達を見つめる。

「ああ失礼した客人方。コウから手紙で話は聞いております。貴方が団のリーダーの雲さんですね。いつも弟がお世話になってます。」

其の反応には皆が皆驚いた。貴族。

これに偏見を持っていたせいかもしれない。ディアの街にも貴族はいる。

そいつらは全員鼻もちならない嫌な奴……その言葉があてはなる奴

らだった。

コウの兄も貴族で代を取っていると聞いてその覚悟をしていたから、普通の対応をされて驚いたのだ。

失礼であると言えば失礼だ。

「あ、い、いえ。こちらこそコウには色々助けていただいています。この度申し訳ありませんが闘技大会が終わるまでどうぞよろしくお願いします。」

雫が少し動揺しながらそう言って頭を下げる。

「闘技大会が終わるまでとは言わず好きなだけ居て欲しい！むしろ皆でこの屋敷にすまないかい？」

等と言いだす始末。

流石にこの発言に驚いたのはコウだ。

「兄さん！」

そう言って兄を怒るコウ。

コウに怒られ少しシヨボンとしてしまってる様子には皆が皆力が抜けた。

そして全員がコレに大して思ったのは『ブラコンだ！』という思いだった。

こうして雫達は無事闘技大会が終わるまでの止まる処を確保できたのだった。

……屋敷の中で色々あったが其れはまた別の御話。

第六章 闘技大会とその二（後書き）

かなり久方振りの投稿です。

忙しいとです。

この短い話を投稿するだけでもぎりぎりだったとです。

一応闘技大会が終わるまでは書き続ける予定ですが、もしかしたら闘技大会が終わる辺りで打ち切ってしまうかもしれません。

時間が出来れば続けます！

この場を借りて御感想をいただいた皆様方がとうございます！
こんな自分の物語を楽しみに待ってくれた皆様、読んで下さっている皆様本当に感謝してもしきれません。

更新遅いですが、時間がある時に少しずつでも書いて投稿します！

第六章 闘技大会、其の三

『ワアアアアアア！？』

大勢の完成が溢れるここは闘技大会のコロシアムだ。

今、開会の宣言が終わり、とうとう第一試合が始まるとあって大騒ぎだ。

闘技大会に参加する団は全部で十六。

そのうちシード権が前回優勝の団と零たちの団の二つ。

そのためシード権のある零達は三日後まで試合はない。

これがいいことなのかどうかと考えながら零達はこれから始まる試合を団員全員で感染することになっていた。

「にしても……すごい人気だな……。」

零が少しあきれたように呟くとクリスが「仕方ありませんよ。」と苦笑を洩らしながら説明してくれた。

「この闘技大会、参加して上位に入ればそれだけで有名になることができますし、例えば参加せずともその戦いを観戦するとなれば、否応なく皆さん気持ちが高ぶるのも仕方ないことですよ。何せ一番大きな祭りなんですからね。」

クリスがそういった後にサラが付け加えるように続ける。

「まあ祭り自体が少ないってのも影響してるんだけどね。闘技大会を抜けば二回しか大きな祭りってもんがないんだよ。だからこそこういった祭りのときは国中の奴らがこうなるってわけさね。」

というサラも普段より興奮しているようだ。
試合会場を見つめる視線に熱いものが混じっている。

「……雫さんは本当に不思議なひとですね。あれだけ強くて色々知っていきそうなのに誰でも知っていきそうなのが時々抜けてるなんて。」

コウはぼつりと思わずといった感じで呟いていた。
同意するようにラマとビレイもうなずく。

「まあ……色々ある訳だ。そのうちお前さんがたには理由を話さ。今はまあこの闘技大会に集中しようぜ。治部煮外の奴の戦い方ってのは結構為になるしな！」

雫は多少すまなさそうに頭をかくとそう言って視界が始まりの合図を送った試合会場に視線を向ける。

闘技大会の戦闘方式としては勝ち抜き戦だ。

人数は最低三名。

最高で十名まで。

雫達は六人、参加する団としては比較的少ないメンバーなのだ。

かくいう今対決している団も両方とも十人そろえての参加となっている。

「お！動いたぜ！」

雫のその言葉通り見合っていた二人の選手のうち、剣を構えていた選手が一気に相手に詰め寄る。

相手の選手は斧を装備した選手で、以外に早いその突進に少し遅れて対応することになった。

斧を振って防御するには時間が足りない。

そこでその選手は切りかかってきた剣をつかの木の部分で受け止める。

「おお！よく見てるねえ。重量あるだけあって普通の剣じゃすっぱりと行くわけにもいけないからいい判断だよ。」

サラはつかの木にはまって動きが鈍った剣の選手を見ながらそう言った。

そのうえ、剣の選手の予想を大きく上回る行動を斧の選手がとったのだ。

「武器をはなしたっ！？」

叫んだのはこコウ。

刀を手に、居合で戦う彼にはその行為はあり得ないことだった。否。

通常武器を携える者にとって自分の獲物を手放すということはよっぽどのがない限りあり得ないことだ。

それを斧を構えていた選手はなんでもないのでこのようにやってしまったのだ。

ただ、今回に限りその行動はその選手の勝利を導く結果となった。離れた斧はそれなりの重さがある。

剣が未だつかの部分にはまっている剣の選手にとってはあまりにも突然の重りだ。

その結果剣の選手は剣を手放さなかったものの大きく地面に斧毎剣をたたきつけるといった結果になった。

そこにすかさず斧の選手が殴りかかりKOとなったのだ。

「思い切りがいいなあいつ。ってか……もともと素手のほうがつええんじゃないのか？」

雫が感心したように呟くとサラも「そうだろうねえ。」と言って同意する。

コウはその戦い方に興奮したように「ああいう戦い方もあるんですね!」とビレイとともに話している。

クリスは真剣にじいっとその動きを見つめ、ラマもどこかのほほんとしていながらも、その瞳は真剣に会場の戦いを見つめている。

「一回戦から結構いい試合だな。これは期待できるか?」

雫がそう思っただけに楽しんでいたのだが、以外にもあっさりと決着がついてしまった。

一番目立った試合がその最初の試合だけだった。

斧の選手は斧を捨て、素手で戦うことにした……というよりももともそつちが本領だったんだらう。

その動き自体はすさまじいものがあつたものの、対戦相手があまりにもレベルが低すぎた。

剣の選手も実際最初から素手で相手されていれば見所の合つた試合とはいえないものになっていたかもしれない。

斧の選手は六人抜いたところでようやく下がった。

その後に出てきた人は鞭を使う男で、引き分け。

次がコンを使う人で、一人抜いたものの次の選手に敗れ……といった感じに特に特徴も見所もないような戦いが続き、最初斧を持って戦っていた団が勝利をおさめた。

「このレベルの選手がいる団がごろごろしてるとてのか?」

少しやべえなあ……といった感じで呟く雫に答えたのは虹だった。

(いえ、あの最初斧を構えていたのは団『疾風の暴威』のリーダー

ーです。あのレベルの人はそうそういないと思われます。実際、あの団のランクはSランクの団です。対戦相手はよく知らない団ですが、先ほど司会の方が言っていたランクによるとBランク程度らしいので、ランクで絶対の強さが決まる訳ではありませんが、もともと自力に大きく差があったのでしょう。」

「（なるほどな。にしてもよくあの司会の声が聞こえるな。俺には全然全く聞こえなかったぞ。）」

雫が聞こえないのも無理はないだろう。

距離的に二百メートル近く離れているうえ、司会の人は特別声を浸透させる魔法を使っているわけでもないのだから。

実際、司会の声が聞こえたのは虹だけだ。

朱華はこういったことにはあまり興味がないらしく、この騒ぎの中雫のポケットの中で眠りこけている。

ある意味すごいことだと思うが……誰もそのことをすごいとは思わなかった。

そして虹が言ったことは本当のことだと解つたのは二日目の試合が終わったときだった。

あの斧の選手以外に実際強い人間はざっと見積もって八人。

斧の選手と同じ団に所属している奴で槍を使う青年。

団『紅蓮』の鞭を使う女性とブーメランを使う少女に魔法使いの少女。

団『スターライカー』の剣士。

団『バウンド』の斧使いと大剣使いだ。

名前までは解らなかったものの団の名前だけは調べることができた……。

何せ三日目に残った者たちは全部で六チーム。

雫達の『月夜の雫』、優勝候補の『エクスターズ』と今あげた四つの団。

対戦表が配られたから解ったと言っしまえばそれまでのだが…
…。
そして、とうとう零達の初めての戦いが始まるうとしていた。

第六章 闘技大会 其の四

零達の最初の相手は一番初めに見た斧を使った素手のほうが強い男が率いる団、『疾風の暴威』だ。

こちらのメンバーは六名。

一番手はサラ。

二番手がコウ。

三番手がクリス。

四番手がラマ。

五番手がビレイ。

六番手、大將が零。

零に次ぐ力を持つサラがなぜ一番手かというところ、最初に勢いをつけて一気にそれにのりたいからであった。

対する相手の構成は一番手から五番手までは正直サラであれば楽勝に勝てる相手だ。

ただ六番手に槍の青年「デイトライト」があり、七番手から九番手はやはりそこまで強くない相手……とはいってもコウやクリス、ラマが戦う相手としては同じくらいの強さの相手だ。

そして十番手、大將に斧を使っていた男、リーダーの「カルマン」が来ていた。

「いいかい、あたしが絶対に六番手までは行く！問題はあのデイトライトだかつて奴がどれだけ強いかなんだが……正直勝てるかどうか解らない。ただ、これは団対戦だからね？あたしは絶対に相手を無傷では終わらせないからもしもの時は頼むよ！」

サラはそういみんなに言うというリングの上に上った。

リングといっても一変三百メートルはある石のリングだ。

サラが上がると司会が仰々しく騒ぎ立て試合が始まる。

予想通りサラは多少の手傷を負いながらも、ほとんどダメージらしいダメージを受けずに六番手のデイルイトまで行った。

「……流石ですね。低ランクでありながら通り名をもらっただけはある……というのは伊達ではないんですね。大剣の暴虐のサラさん。」

……。

サラと対峙したデイルイトのその言葉にぶっちゃけ一番驚いたのは零達だった。
通り名。

力の認められた者たちが人知れず呼ばれるようになったあだ名だ。通常Aランク以上のそれも一握りの人間にしか与えられないような通り名をサラが持っているという。

そんな話は零だけじゃなく、他のメンバーも初耳だった。

「おいおい、サラお前そんなすげえ通り名ついてたのかよ。」

思わず呆れたように言葉を漏らす零。

「あつはつは。といっても言ってる奴なんてほんとにいないんだから知ってる奴のほうが少ないんだよ。そんなの恥ずかしくて名乗れないじゃないか。」

からからと笑いながらそんなことを言う。

実際零所か他のメンバーも知らなかったのには訳がある。

それは……。

「そうですね、あなたをその名で呼ぶのはほとんどがSクラスの人間だけですからね。」

ということだ。

にしてもこの男一々説明臭い奴だと、雫達だけではなく会場に溢れる他の人たちも思っていた。

「まあ、そんなことは今は関係ないさね？勝つつもりで行かせてもらっよ！」

サラはその話を打ち切るように剣を構える。
自分の身ほどある大剣。

「……そうでしたね、失礼しました。では……尋常に勝負。」

そう言ってデイライトのほうも槍を構える。

それを見た司会がそこで開始の合図を送った。

「つつ！槍兵が特攻かい？」

開始の合図とともにデイライトがかなりの速度で槍と突いてきた。
大剣の刃を使いその槍をさばきながら軽く舌打ちをする。

（ツチ！先手をとられちゃったかい。にしても……）

「何で槍なのに剣の間合いで振れるんだい！？」

そう特攻し、そのまま責め立てるデイライトの間合いは剣士の間合い。
い。

つまり超近距離だ。

通常槍は剣よりも長い距離で攻撃ができるという利点があり、その間合いを保つことによってその真価を発揮できる。

それをこの男は無視した揚句、サラを押すレベルで攻め続けているのだ。

「……い、いつまでも調子に乗るんじゃないよ!」

きりがないと思ったサラは大剣を地面に思いっきり突き刺しその陰から蹴りを放つ。

「つつ!なんて無茶を。」

そういつつ槍のつかでかろうじて受け止めたデライトは距離を離される。
そこでようやくデライトが超近距離であれだけ攻められていたのかを理解した。

「短槍……かい。珍しいもんを使ってるじゃないか。」

短槍。

普通の槍の半分の長さしかないやりだ。

あまりにも利点をなくしたそれは正直使い勝手が悪いどころの話じゃない。

剣と同じ間合いでありながら切ることができる範囲は先の部分だけ。何より切ることを目的としてないため、切ろうとしてもまともに切れないのでその行為自体があまり意味をなくす。

かといって槍の特性の突くといったこともこの短さではあまりにも弱い。

両手を使い、しっかりとした技の元突くからこそ必殺の突きとなれるその突きもその短さではかなり威力が下がる。

正直なところ両手で握るといっても片手で握るようになっていく槍だ。

「……最初の特攻で仕留められなかったのは痛いですね……。」

そう言つて冷や汗を流すディライト。

ディライトの先方は奇襲の上のだまし打ちだ。

槍を見た相手はどうしても懐の突っ込んでくるとは考えない。

ある程度の距離から突いてくると考えるからだ。

そこをディライトは最初に懐に突っ込み、困惑してる間に打ち倒す。

そういつた先方を得意としているのだ。

「……ただまあ、流石に……体力を消耗したあなたに負けるのはいささか恥ずかしすぎるので、この勝負だけは何としても勝たしていただきます！」

そう言つてとりだしたのは逆手持ちのナイフ。

右手で槍を左手でナイフを構え一気に責め立てる。

片手で突く槍とはいえ距離付きの助走があればそれ相応の威力がある。

そして、ディライトの早さからサラには躲すことが難しい速度だ。つまりできるのはそらすかはじくか。

今回のこの突きは今までの戦闘の疲れもたまっていたのだろう、さばくことができず、その大剣の腹で受けはじくことになってしまった。

はじかれた槍は大きく上にそれたが、ディライトははじかれた槍を手放し素早くサラの背後に回り込む。

そうそう簡単に回り込まれるサラでもない。

かろうじてディライトに一発思いつきり力の乗った拳を叩きつけるが、やはりこのレベルの相手であればそれだけで吹き飛ばすといったことはできなかった。

ダメージは大きいだろうがその瞬間の動きだけは目を見張るものが

ある。

そして首に充てられた逆手のナイフ。
司会の「勝者デイルイト！」の叫び声とともにサラの出番は終わってしまっただ。

「……まったく、槍使いが最後にナイフなんて使うじゃないよ！……
……何て事はいえないか。正直あたしの実力がまだまだだってわけさ
ね。いい経験になったよ。」

そう言ってナイフを下したデイルイトに握手を求めるように右手を差し出す。

「……何が実力が足りなかったですか。体力が落ちてなければ最後の攻撃だつてさばかれてた可能性のほうが高いじゃないですか……
……。僕もいい経験をさせていただきましたよ。これほどの力量とは思っていませんでした。」

サラの右手を握りしめそう言っただ。
からからと笑いながらリングを後にしたサラはメンバーに「悪い！負けちまったよ。」と言っただ戻ってきた。
そのあまりに軽さに固くなつていたコウが少し力が抜けた。
といっただも、緊張していることに違ひはないだ。

「大丈夫だよ。最初に言っただ通りデイルイトの野郎にはきつっただのを一発お見舞いしてきたからね。コウの居合ならうまくすれば一発だよ。」

そう言っただコウの肩を軽くたたきサラ。

「……サラさんですら勝てなかつただ相手なんですよ？無理です……

…。」

少しうつむきながらそうつぶやくコウ。

「おいおい。コウ。お前強くなるって言ってた割にはこの程度でしよげちまうのか？」

そんなコウに雫はそう言って声をかけた。
挑発するように。

「雫さんっ！」

クリスが少しきつめの声で止めに入るが、それをビレイが止める。

「……僕だって……できるなら強くなりたいですよ……。」

落ち込んだままそうつぶやくコウ。

「まったく、ならさらに勝った相手に挑むなんてそれこそ大きなチャンスじゃねえか。ぶっちゃけこれに負けても死ぬわけじゃねえんだぜ？そんな好条件の中自分より格上と戦えるんだ、強くなるチャンスじゃねえか。そのうえでもし勝てればコウ自身、自信がつくっていうおまけ付きだぜ？それで何で暗くなってるんだよ。むしろこない条件の中で実力も出せずに何もできなかったとかのほうがいいよっぱと損だと思うぞ。」

実際、雫は最初から慰めようとしていたにすぎない。

ただそれが他の人から聞くと挑発にしか聞こえなかったわけだが。そこで慌てて自分が思っていることを細かく伝えることにしたわけだ。

そこまで雫の内面を解っているメンバーは虹だけだったため、その言葉に周りのメンバーは少し感心したように、雫に続いて声をかけていく。

実際、雫が細かく説明できたのは虹のフォローがあつてこそだった。虹が思わず最初雫が言葉を発した際、（それでは攻めてるようにしか着こませんよ雫様。慰めようというのであればもう少し細かく話をしたほうがよろしいです。）という言葉をもらったうえで、即座に次ぎに行った台詞を考えだしてくれた。表情には出していなかったが、少し焦っていたのだ。

「……皆さん……雫さん……。ありがとうございます！そうですよね、僕が絶対に勝たなくちゃいけないってわけじゃなかったですね。相手の胸を借りる気持ちで行ってきます！」

コウはそう言つてさっきまで落ち込んでいたのがウソのように元気に顔を上げ、リングに上っていく。

現金な奴だなあとサラと雫は苦笑しつつその後ろ姿を見送った。

ただ、実際問題雫はコウなら今のデイルイト相手なら勝利を収めることができると考えている。

それはサラもそうだろう。

コウの居合の早さはかなり早い。

よほど眼がいい人間じゃなければ負えない速度だろう。

終えたとしてもそれに体が突いていくかどうかという問題もある。

相手が固い相手ならいざ知らず、デイルイトの装備は革のアーマーだ。

コウの居合による攻撃でも通すことができる。

といっても切り裂くといったわけではなく、衝撃を与えると意味でだ。

デイルイトは平気そうに立っているものの実際問題かなりのダメージを受けている。

サラの最後の一撃が聞いているのだ。

それもそうだろう。

吹き飛ばなかったのだ。

大剣を片手で扱えるほどの力があるにも吹き飛ばなかった。

その理由は無理やりこらえたから……というのもあるが、サラ自信が吹き飛ばすというよりもダメージを与えることを軸に考えたからだ。

吹き飛ばすのではなく衝撃を体内に残す攻撃。

サラの力でその攻撃を受ければレベルの低いものであれば一発で気絶どころか病院にいきだ。

未だにああして立っていることができるだけでかなり強いという証拠になる。

だからこそ、今ディライトの受けてるダメージがかなりのダメージで、そのうえで居合という速度の攻撃手段を持つコウならば勝利を収められると考えたのだ。

実際、勝負は本当にあっけなく着いてしまった。

コウの攻撃が居合だとディライトも知っていたのだろう。

槍を元の長さに戻し距離を開けて攻撃しようとしたがその槍を居合で吹き飛ばし、距離を詰めようとしたコウ。

ただ今までこのレベルで戦ってきたのは伊達じゃない。

次の瞬間ディライトはコウを蹴り飛ばし距離を測るが、素早く体制を整えたコウが再び体制が整わないディライトに突っ込み一発叩き込んだところでディライトがリタイアしたのだ。

「……あ、あれ？勝てたの？」

確かにサラの攻撃によるダメージが残っていたからだ、それでも勝てたのはそれだけのレベルまで居合の技を上げたコウの努力と、胸を借りるといいながらも勝利を狙っていた心の奥底の気持ちがあったからだろう。

「君は自分を過小評価しているようだね？確かに全快状態であれば勝てたかもしれないですが、それとて全く無傷で倒せたとは思えないほど強かったですよ。もう少し自分に自信を持つてもいいと思いますね。それでは……いずれまた。」

そう言つてディライトは去つていく。

そのまま仲間の元に戻り一声カルマンに声をかけるとそのまま会場を後にした。

ダメージが大きかったため救命室に行つたのだ。

平然と歩きながら言つたのは彼のただの意地だろう。

最初の山場であるディライトが崩れ勢いに乗つたコウが次の相手も倒すことに成功するが、その結果疲れと傷で次の相手の時にリタイアすることになった。

そしてクリスの戦いが始まる。

く第六章闘技大会く其の四（後書き）

次はクリスの戦いです。

闘技大会……予想以上に長くなりそうな予感が……。

それでも最低闘技大会終了までは書き上げます。

第六章 闘技大会 其の五

「我願うは我が敵たる者への鉄槌！フレイル！」

驚くことに先制攻撃を仕掛けたのはクリスだった。

見た目から……そんな印象を全く受けていなかったことでその奇襲にも近い先制攻撃は成功して、相手にまともに当たった。

雫たちですらクリスが先に攻撃を仕掛けたことに驚いている。

それもそうだろう、今まで共に過ごしてきてクリスがこんな先に攻撃を仕掛けるような性格をしていないことが解っているのだから。だが、クリスもまた雫たちがばらばらに金を稼いでいる間に成長をしていたのだ。

まともに奇跡を食らった相手はそのまま気絶して戦闘終了、続いて次の選手との戦いになった。

「……つつ！きゃああ！？」

流石に……油断を誘ったうえでの攻撃じゃなければなかなか攻撃は当たらない……その上、奇跡を唱えるだけの時間もなかなか与えもらえずに、油断しなくなった九回線目の相手に多少のダメージを与えながらクリスは負けることになった。

元々……神聖使いの彼女は一对一での戦闘には向かないのだから仕方のないことだろう。

むしろ一人倒せたことすら凄いことなのだ。

「すいません……まともにダメージを与えることなく負けてしまつて……。」

落ち込みながらそうやって戻ってくるクリスに「何言つてんだい。」と笑いながらサラが頭を撫でている。

周りのみんなも驚いたように凄いと笑いながらクリスを迎えた。そして次の戦闘はラマだ。

「クリスさんがあれだけの頑張りを見せたんです。私だつてやつて見せますよ。」

そう言つてリングに上つていく。

相手は短剣使い……かなり素早さが高いので厄介な相手だが……それ以上にラマは素早く動きながら矢を放つ。

右足に一本の矢がかすり体制を崩したところで相手の眼前に深々と矢を突き刺した。

「……参つた。」

今ので命を取ることもできた……それが解つたのだろう。

相手も意外と素直にリタイアをしてくれた。

ひとつ大きく息を吐いて雫たちを見るラマ。

雫たちにもぎわいながらよくやつたとほめたたえる。

「ふむ、まさか……五人だけの団に俺が出る羽目になるとは思わなかった……すまねえ、悔っていた。だが、今からはそんなものはない。怪我したくなければリタイアしろ。お前の今の實力じゃ俺には勝てん。」

カルマンはそう言って斧を置いたままリングに上ってきた。
相手から掛かるプレッシャーだけでだんだん息が荒くなるラム。

「……できません。私だって月夜の雫の一員です。戦いもせず引くなんてことはしません！」

ラムがそう言った瞬間、カルマンは嬉しそうに笑った。

「そうだ、そういう相手じゃなきゃ戦いがいがねえ。実力は……まだまだこれからだが気概がいい。相手してやるよ。」

カルマンのその言葉を口尻に試合が始まった。

素早く動き回りながら矢を放つラムだが……その攻撃はことごとくかわされる。

その命中精度は群を抜いているにもかかわらず全てかわされている。

それだけ相手との間に実力差が存在しているのだ。

「……いけっ！」

カルマンの背後を取った瞬間今までで一番早い矢を打ち込んだ……にもかかわらずそれをそのこぶしで落とされた。

「いい腕だ。だが……俺に届くにはまだまだ足りない、もう少し強くなったらもう一度戦おうぜ。」

カルマンはそういうと素早くラムに走り寄る。

ラムも逃げるように避けようとするが……ラムよりさらにカルマンの方が早かった。

「終わりだ……。」

そう言っただけでラマは腹に一撃をもらい……そのまま力尽きた。
気絶したラマをカルマンが雲たちの方へ運んでいく。

「いい娘だ。何より気概がいい……いいメンバーがそろっているな。
だが……今俺とまともに戦えるのはお前さんだけだぜ？」

カルマンはそう言っただけで雲にラマを渡す。

獰猛に笑いながらそう言ったカルマンはそれだけ言っただけで戻っ
ていく。

「……悔しいですが事実です。今の私ではあの人の相手は務まりま
せん……恐らく傷一つつけられないでしょう……。」

悔しそうにこぶしを握りしめて絞り出すように呟いたのはビレイ
だ。

そんな彼の肩を叩きながら「これからまだまだ強くなれるんだろ
う？」と笑う雲。

そして……ビレイは戦闘放棄をして雲とカルマンの戦いが始まっ
た。

「クックック。いいねえ、いいねいいね！お前さん。強いなあ。」

カルマンは本当に嬉しそうに笑いながら構える。

雲も漆黒の鎌を構えながら構えた。

初めに動いたのはカルマンだ。

ラマ戦で見せたスピードよりもさらに速い速度で雲に詰め寄り思
いつきり殴りかかってくる。

それをかろうじて躲し、追撃で蹴りが放たれたのを鎌の持ち手部

分で受け止め……吹き飛ばされる。

「今ので一撃も入らないか。流石だな。」

そう言いながらなお詰め寄ってくるカルマン。

「……無防備すぎるぜカルマン！」

詰め寄ってきたカルマンに向かって、地面に付していた鎌を振り上げる。

軽くかするがよけられた。

そしてそのまま攻撃をしてくる。

「つちい！」

雫もそのこぶしによる攻撃を身を捻り辛うじてかわすが……体制が無茶だったおかげでそのまま突っ込んできたカルマンのタックルを食らう。

一進一退……本当に実力が拮抗している戦いだっただ。

「……強すぎるぜ。ちと厳しいな。」

荒い息を吐きながらそう漏らしたのは雫だ。

「よく言うぜ、こっちこそぜんそく全力での攻撃をこうまでよけれちまっちゃ、自信がなくなるってもんだぜ。」

カルマンも息を荒くしながらそう言って笑う。

そうしてぶつかり合う二人。

カルマンの奮うこぶしや蹴りを躲し反撃し、躲される。

そんな戦いを数十分続け……互いにそろそろ体力の限界に近付いてきたところで……。

「来る……んだな。」

「おう、これが最後だ……決めてやるよ！」

カルマンはそういうと今までの中でも最高の速度で雫に詰め寄った……と思ったら消えた。

そう感じた瞬間虹から（後ろです！）という声が聞こえ、咄嗟に前方に転がる。

そして……雫の頭があったところにカルマンの蹴りが通り過ぎて行った。

転がり、すぐにそのすきについてカルマンの首元に虹と突き付け……時間が止まる。

「……っち、あれを躲されちまったらな……。負けだ負け。畜生め！」

こうして、カルマンが負けを認め、雫たちの勝利で試合は終わった。

カルマンの言葉を聞いた瞬間雫はその場に座り込んで大きく息を吐いた。

「はぁ……疲れた。しんどい。ってか人間なのかよあんた。」

雫は同じく地面に座り込んだカルマンにそう話しかける。

「どっからどう見ても人間だろうが。っていうお前こそなんだよ最後の。あれ……躲せるとか絶対人間じゃねえだろうが！」

そう言ってお互い笑う。

こうして……とりあえず今日の試合は終わり……夜、酒場で楽しそつに雫たちとカルマン達が酒盛りをしていたのはまた別のお話。

次の相手は……スターライカー……優勝候補のエクスターズは1団だけ余ったため、自動で決勝戦へ進出らしい。

こうして……酒盛りを続けながら明日への英気を養っていく雫たちだった。

第六章 闘技大会（其の五（後書き））

数々のご意見ご指摘ありがとうございます！

誤字脱字などの修正だけは行わせていただきました。

本当に……誤字とか多くて申し訳ありません。

お金の管理……もう少ししっかり煮詰めます……確におかしいところが多すぎますね。

ご都合主義については……すいませんご勘弁ください。

なるべく少なくしようとは思っていますが……多少なりともそういったところが出てしまうのは作者の力量不足です。

修正できる……そう感じるだけ物語を書けるようになったら修正させていただきます！

後……虹についてなんです……前の感想にも確か書いたと思うんですが、色々と裏設定で「読んだ」で間違いありません。

……そこまでかけるかどうかが今のところ怪しいんですが……当初の予定では後々のその設定関係の話が出る予定でした。

もし……そこまでかけなければ申し訳ありません……。

ちなみに主人公の名前は夜月雫です。

色々と間違えや読みづらいところがあって申し訳ありませんでした。それでも読んでくれた皆さん、応援してくださった皆さん本当にありがとうございます！

あとがきで申し訳ありませんが、この場にてお礼を申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2791f/>

月夜の雫

2010年10月9日15時10分発行